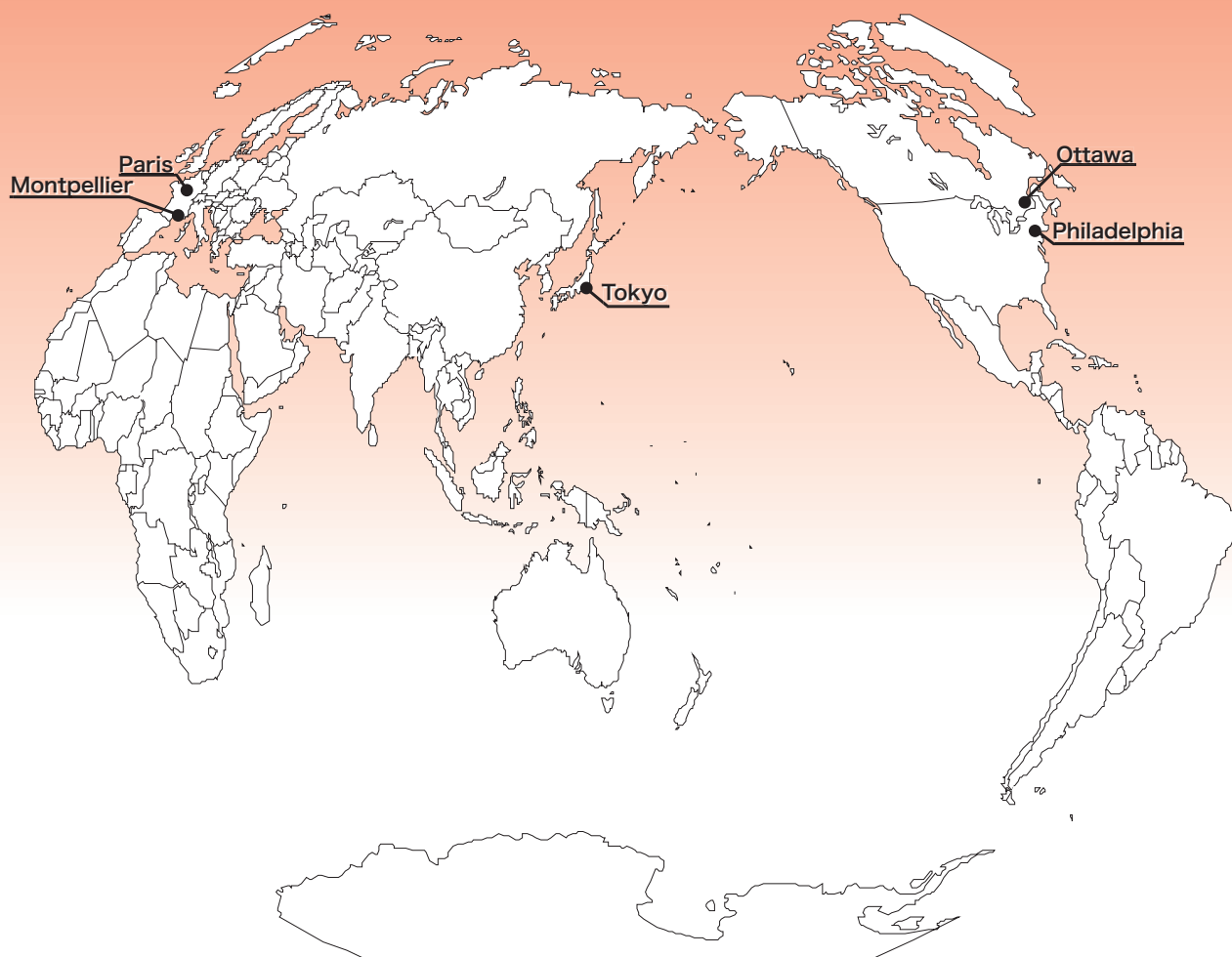


スポーツ指導者海外研修事業

令和3年度帰国者報告書



公益財団法人 日本オリンピック委員会
JAPANESE OLYMPIC COMMITTEE

スポーツクリ



スポーツ指導者海外研修事業 令和3年度帰国者報告書目次

令和元年度長期派遣（2年）

塚田 圭裕（バレーボール）	3
山中 武司（アイスホッケー）	37
松岡 慧（フェンシング）	55
福井 英郎（トライアスロン）	67

○令和元年度 長期派遣（2年）4名

競技団体		(フリガナ) 氏 名	研修項目	研修先	研修時期
1	バレーボール	ツカダ ケイスケ 塚田 圭裕	①バレーボールの指導法（トップレベルの選手およびチームの強化方法の研修） ②アメリカ・ナショナルチームの視察（コロナ禍のため中止・代替でジュニアチームの視察） ③アメリカ国内の大学スポーツ（NCAA）の研究	ア メ リ カ (フィラデルフィア)	令和元年8月7日～ 令和3年8月6日
2	アイスホッケー	ヤマナカ タケシ 山中 武司	・カナダアイスホッケーのジュニア世代の育成指導方法を学ぶ。 ・最先端のアイスホッケー戦術の習得。 ・世界のトップ指導者達の指導論、指導法を学ぶ。	カ ナ ダ (オタワ)	令和元年6月26日～ 令和3年6月25日
3	フェンシング	マツオカ サトシ 松岡 慧	①フェンシング競技指導に必要な技術及び技能の習得 シニア・ジュニア・カデカテゴリー毎のコーチング技能及びマネジメントスキル ②フェンシング強豪国の育成及び強化システムの調査・研修	フ ラ ンス (パリ)	令和元年8月20日～ 令和2年3月19日
4	トライアスロン	フクイ ヒデオ 福井 英郎	フランスにおけるトライアスロン競技の仕組みと環境を学ぶ。 2024年パリオリンピックに向けた準備や若手育成・強化方法を視察し学ぶ。	フ ラ ンス (モンペリエ)	令和元年6月28日～ 令和3年9月30日

研修員報告〈バレーボール 塚田 圭裕〉



令和元年度・長期派遣（バレーボール）



I. 研修題目

- ①バレーボールの指導法（トップレベルの選手およびチームの強化方法の研修）
- ②アメリカ・ナショナルチームの視察（コロナ禍のため中止・代替でジュニアチームの視察）
- ③アメリカ国内の大学スポーツ（NCAA）の研究

II. 研修期間

令和元年8月7日～令和3年8月6日

III. 研修地及び日程

（1）主な研修先

- ①テンプル大学女子バレーボール部（フィラデルフィア・ペンシルベニア州）
（Temple University Women's Volleyball Team）
- ②APAC排球会（Volleyball Club）El Paso（エルパソ・テキサス州）

（2）受入関係者

- Bakeer Ganesharatnam（ベイカー・ガネーシャラトナム「以下ベイク」）：
テンプル大学女子バレーボール部監督（Head Coach）
- Akiko Hatakeyama（畠山亜希子）：
テンプル大学女子バレーボール部コーチ（Assistant Coach）
- Yoshiki Nakamoto（中本芳樹）：
APAC排球会（Volleyball Club）El Paso監督（Head Coach）

（3）研修日程

①通常研修

- テンプル大学女子バレーボール部コーチ（Volunteer Assistant Coach）：
令和元年8月9日～令和3年8月6日
- APAC排球会（Volleyball Club）El Pasoアシスタントコーチ（Assistant Coach）：
令和3年5月21日～6月25日

②特別研修

【大学バレーボール関係】

- 2019 AVCA*年次コーチ会議**（Coach Convention）参加
〈ピッツバーグ・ペンシルベニア州〉
令和元年12月15日～18日

*AVCA = American Volleyball Coaches Association

[アメリカバレーボール コーチ協会]

**年次コーチ会議は全米選手権に合わせて毎年同開催地にて開かれる全米の全カテゴリーのコーチのための集会および講習会となっている

- 2019 NCAA* 女子全米バレーボール選手権大会準決勝・決勝の視察
〈同上〉

令和元年12月19日～20日

*NCAA = National Collegiate Athletic Association [全米大学体育協会]

- Bob Bertucci (ボブ・ベルテュッシ「以下ボブ」) バレーボールキャンプ*
(VolleyballCamp)

〈イーストハノーバー・ペンシルベニア州〉

令和2年1月19日

*バレーボールキャンプ：有名コーチによるバレーボール教室、大学のオフシーズンに全米各所で開催される

- スタンフォード大学女子バレーボール部練習視察
〈フィラデルフィア・ペンシルベニア州〉

令和3年8月29日

【ジュニアバレーボールクラブ関係】

- Las Vegas Classic 2021視察 〈ラスベガス・ネバダ州〉

令和3年6月4日～6日

- 2021 USA Volleyball Girls Junior National Championship*視察 〈同上〉

令和3年6月26日～7月5日

*USA Volleyball Girls Junior National Championship (GJNC)

= 女子全米バレーボールジュニア選手権大会

【その他・バレーボール関係】

- Athletes Unlimited - Volleyball [アスリッツ・アンリミテッド・バレーボール*]
の視察および女子アメリカ代表チームコーチTama Miyashiro (タマ・ミヤシロ)
による講義 (コロナ禍のためオンラインにて実施)

令和3年3月16日～4月16日

*アスリッツ・アンリミテッド・バレーボール=2021年に発足したアメリカ合衆国の女子プロバレーボールリーグ

- 9-Man (9人制) Volleyball DC Mini Tournamentに選手として出場
〈モントゴメリー・ニュージャージー州〉

令和3年8月22日

【その他・他競技関係】

- 野球メジャーリーグ：Phillies対Cubs観戦 (当時在籍していたダルビッシュ有選手の先発試合) 〈フィラデルフィア・ペンシルベニア州〉



令和元年8月15日

- 野球メジャーリーグ：Diamondbacks対Angels観戦（大谷翔平選手の2番・先発試合）〈フェニックス・アリゾナ州〉

令和3年7月11日

- 野球マイナーリーグ：Chihuahuas対Skeeters観戦〈エルパソ・テキサス州〉

令和3年7月19日

- NCAA男子バスケットボール、女子バスケットボール各1試合観戦〈フィラデルフィア・ペンシルベニア州〉

令和元年11月5日同日

- NCAAアメリカンフットボール1試合観戦〈同上〉

令和元年10月12日

【その他・競技外活動】

- 第46代アメリカ合衆国大統領選挙・フィラデルフィア地区選挙管理委員会ボランティア〈同上〉

令和2年11月3日

研修のスケジュール		
令和元年8月初め	渡米（研修開始）	フィラデルフィア
同月	チーム（テンプル大）に合流 秋シーズン・練習開始	同上
8月末～9月中旬	プレシーズンマッチ開始	大学からバス移動圏内
9月中旬～11月中旬	カンファレンス戦	飛行機での遠征
12月	全米選手権・コンベンション	ピッツバーグ
12月末～令和2年1月中旬	冬期休暇・コーチキャンプなど	イーストハノーバーなど
1月中旬	春シーズン・練習再開	フィラデルフィア
2月末～3月初め	コロナ禍の影響を受け活動休止	同上
3月初め	チーム活動再開	同上
3月中旬～8月初め	学内での感染拡大を受け再び活動休止、 自宅勤務	同上
同月末	活動再開 一か月間は週8時間プログラムで活動 （後述）	同上
9月	週20時間プログラムへ移行 地域によっては試合を実施 （所属カンファレンスは中止）	同上
10月	紅白戦を実施し、保護者等への映像共有、 活動への理解を図る	同上
11月末～令和3年1月初め	冬期休暇・自宅勤務	同上
1月初め	春シーズン・練習再開	同上

研修のスケジュール		
1 月末～4 月初め	カンファレンス戦 (コロナ禍のためプレシーズンマッチは行われずにノンカンファレンスマッチとしてカンファレンス戦と並行して実施)	各地へバス・飛行機での移動を伴う遠征
4 月初め	所属カンファレンスのチャンピオンシップトーナメントへ出場・準優勝	シンシナティ
5 月中旬	ジュニアチームへ合流	エルパソ
6 月初め	Las Vegas Classic 出場	ラスベガス
6 月末～7 月初め	全米ジュニア選手権出場	同上
8 月～10 月中旬	テンプル大での活動のため、研修期限の2021年8月6日以降は「自主的」に研修を継続	フィラデルフィア
令和3年10月中旬	帰国* *12月末までオンラインでスタッフミーティング等に参加	東京

Ⅳ. 研修概要

(1) 研修題目の細目

- ①アメリカの大学バレーボールについて
- ②アメリカのジュニア年代のバレーボールについて
- ③テンプル大学女子バレーボール部について
- ④NCAAのその他のスポーツについて
- ⑤アメリカのスポーツ文化
 - 1) アジアンコミュニティによる9人制バレーボールについて
 - 2) メジャーリーグについて
 - 3) 日常生活における娯楽としてのスポーツについて
- ⑥アメリカのプロバレーボールリーグについて
- ⑦コロナ禍におけるアメリカのスポーツおよび日常生活について

(2) 研修方法

- ・アメリカの大学バレーボール団体・関係者への聞き取り等実地調査
- ・アメリカのジュニア年代のバレーボール団体・関係者への実地調査およびコーチング実践
- ・テンプル大学女子バレーボール部でのコーチング実践
- ・NCAAのその他のスポーツ団体・関係者への聞き取り等実地調査
- ・アメリカのプロバレーボールリーグ団体・関係者への聞き取り等実地調査
- ・コロナ禍におけるアメリカのスポーツおよび日常生活について実地調査



V. 研修報告

（１）渡米に向けて

今回アメリカを研修地として選んだ理由は、①アメリカ代表、特に女子チームが2014年の世界選手権で優勝し、2016年のリオデジャネイロ五輪で銅メダルを獲得しており、世界の強豪チームとしての地位を確立していること。②日本のトップリーグであるV.LeagueのDivision 1 所属チームにもたくさんのアメリカ出身の選手がいて、交流が深かったこと。③そうしたトップ選手の全員が大学を卒業しており、さらには個人的に知り合った選手の多くがセカンドキャリアへの関心が高く、その点において約3分の2の選手が高卒という日本の女子トップ選手と大きな差異があり、④アメリカの大学教育とスポーツの関係について非常に興味があったからである。

受け入れ先のチームを探すにあたって、以前の私の所属先の上司に当たる菅野幸一郎氏が2013年から2015年にかけて研修した強豪チームミネソタ大学女子バレーボール部を含めていくつかの候補があったが、今回の研修において主な研修先としたのはテンプル大学女子バレーボール部（以下テンプル大バレー部）である。決め手となったのは①アメリカ女子バレーボールにおいて335チームある（その年によって多少の変動がある）NCAA Division 1（Division 1～3まで存在し、競技力だけでなく大学の経済規模によって配置される）所属のチームであること、②1年目からチーム内で正式にコーチとして赴任できること、③チームとしての学業成績が非常に優秀であることだった。

特に②のコーチとしての正式採用については、アメリカの大学スポーツではNCAAによって監督（Head Coach）1名、コーチ（Assistant Coach）2名、ボランティアコーチ（Volunteer Assistant Coach）1名でなければ実際にバレーボールコートなどの練習場で、選手に直接コーチングができないため非常に重要であった。

〈コラム1：ビザの取得について〉

今回の渡米に当たってはJ-1（交流訪問者）ビザを使用した。J-1ビザの申請は手続きが多く、受け入れ先とのやり取りも細かにしなければ難しい。今回の研修では受け入れ先の大学に日本人コーチの畠山氏がおり、大学側から手厚くサポートをしていただくことで申請することができた。

しかしながらJ-1ビザの在留期間は1年間であり、場合によってはもう1年更新することができるといもので、私の場合は更新することが認められなかった。

そこで私はJ-1ビザからB-1/B-2ビザへ切り替えて在留資格とした。B-1/B-2ビザは、商用（B-1）、旅行または治療（B-2）を目的とした米国への短期入国者を対象としており、取得に際しても受け入れ先からのサポートレター以外に特別な申請書類は必要なくJ-1ビザの取得と比べる容易であった。

ただしB-1/B-2ビザにも注意する点があり、当然ながら米国内で収入を得る必要があるということと、米国入国管理局の管理官が認める実際の滞在可能な期間を示す「I-94」の記載についてである。ビザに記されている在留期間と実際の滞在可能な期間は別で、B-1/B-2ビザのように長期の在留資格を認めるビザについては、実際の滞在可能な期間は短くなることが多く、私の場合は6か月ごとに滞在期間の延長を申し出る必要があった。

(2) NCAAとAthletic Department（大学体育局）について

1906年、米国で社会問題となっていたスポーツ現場での死亡事故や学生アスリートの学業不振に対応するために、当時のルーズベルト大統領の大統領令によって設立されたNCAAの大きな特徴は、プロの職員による運営体制にある。そしてその根幹たる役割を担うのが体育局（Athletic Department）である。

日本では大学スポーツの運営は学生主体の体育会によって管轄されているが、各競技の運営についてはそれぞれに裁量が任されていることが多く、OB会で選ばれた一般社会人が監督やコーチを兼任し、自身の仕事の合間にコーチ業を行うことから「ホリデー監督」と呼ばれる形態であることも珍しくない。NCAAではそのようなことはなく、体育局が監督やコーチ、マネージャーなど全ての職員に対する任命権を持ち、OBやOGの発言力は日本の体育会組織と比べると強くはなく、別の仕事を兼任している監督やコーチもおらず、すべての職員が専任という形態で従事している。そのため、休日だけ監督やコーチが来るということではなく、NCAAに所属するすべての競技スポーツで、新人選手のスカウティングや家庭の事情などが無い限り、すべての職員が毎日大学内で自身の競技スポーツの運営に携わっている。

また日本では各競技スポーツ同士のつながりや体育会組織とのつながりはそれほど重要ではないように思うが、米国ではすべての職員が体育局に認められてはじめて職に就けるため体育局職員とコミュニケーションをとる場面は非常に多く、私の場合は、Senior Associate ADのTim Thiess（以下ティム）が最終的な窓口となっていたため早くから交流があった。コーチ同士の交流も非常に盛んで、各競技スポーツのコーチングスタッフには専用のオフィスがあり、ほとんどの競技スポーツが同一のスペースにいるため日ごろから情報交換をしやすい環境であった。

【オフィスルーム】 私のあてがわれた部屋は男子サッカー部のアシスタントコーチ陣と共同部屋であり、お互いの競技のことや日本の漫画の話をよくした



【デスク】 ノートパソコンとデスクトップパソコンを一台ずつと拡張モニターまでチーム側で準備してくれたが、メールのやり取り以外は自前のノートパソコンで作業することが多かった



さらにすべての体育局職員が集まるAll Coaches Meeting（全コーチミーティング）



も毎月行われており、私は日本から来たバレーボールの新しいコーチということで、初参加時から多くの職員から声をかけられたことをよく覚えている。ミーティングの内容は大学としてのビジョンやミッションの再確認、話題となっている事柄（2019年ごろはオリンピックスポーツについて、2020年からはオンライン開催であったが主にコロナ禍への対応についてなど）、あるいは各競技スポーツの様子や試合の告知などである。終盤には参加者に議題を提示させる場面も多く、さすがアメリカ、多くのコーチ陣が現状困っていることやサクセスストーリーなどを皆の前で語っていた。



【全コーチミーティング】 前で話しているのは体育局長や体育局職員、座っているのはコーチ陣。会が終わればコーチ陣同士での情報交換会が始まる

〈コラム2：Volunteer Assistant Coach就任までの道のり〉

渡米してしまえばあとは自動的にコーチ就任とはいかないのがNCAAであり、ボランティアアシスタント、つまり無給で仕事をする場合でもその例外ではない。体育局はすでに実績のある競技スポーツチームの監督から指名されたアシスタントであってもすんなりと認めてくれることはない。彼らが特に注視するのは、「バックグラウンドチェック」と呼ばれる犯罪歴や体罰歴、児童虐待歴等に関する審査である。

私の場合は、Pennsylvania State Police – Response for Criminal Record Check（ペンシルベニア州の警察からの犯罪歴の有無の証明）、Pennsylvania Department of Human Services – Child Abuse History Certification（州のヒューマンサービスからの児童虐待歴の有無の証明）、Finger Print Certificate（ペンシルベニア州への指紋登録・照会）、Disclosure Statement Application for Volunteers（ボランティアとして従事するための上記の情報の開示声明書）の4つの書類をそろえるためにそれぞれの機関と連絡を取る必要があった。

私のあとに来た同僚のアシスタントコーチの例では、鍛錬期に入る前に合流していたにもかかわらず、手続きの関係上バックグラウンドチェックがスムーズに進まなかったために、規定上オフィスにいることはできたが練習には1週間遅れて参加するということがあった。

（3）体育会系あるいは体育学生とStudent Athlete（学生アスリート）

私がコーチとしての業務を始めてまず驚かされたのは、選手の学業への取り組み方だった。あらかじめ授業のスケジュールをコーチ陣と選手、そして体育局の学業担当者と連携して、朝からお昼前までの時間を競技活動時間として調整されているため、選手は朝一番でボール練習をして、そのあとにウエイトトレーニングもしくはコンディショニングトレーニング（ラントレ）を行い、人によってはお昼前から授業に出るというサイクルが定まっていた。練習が終わると授業へと駆けていく選手の様子は

日本でも見られそうだが、それ以外の選手も練習が終わると空きスペースでパソコンや参考書を広げて自習を始める。テスト前でもなければ4年生の卒業論文作成のためでもない、米国のStudent Athlete（学生アスリート）にとっては当たり前の光景だった。さらにそれは大学内に限った話ではなく、試合で遠征に行く際のバスや飛行機の中、空港内、宿泊先のホテル、試合会場など場所を問わず空いている時間は学習時間となっている。



試合会場でも勉強する選手たち



学生アスリートの日常

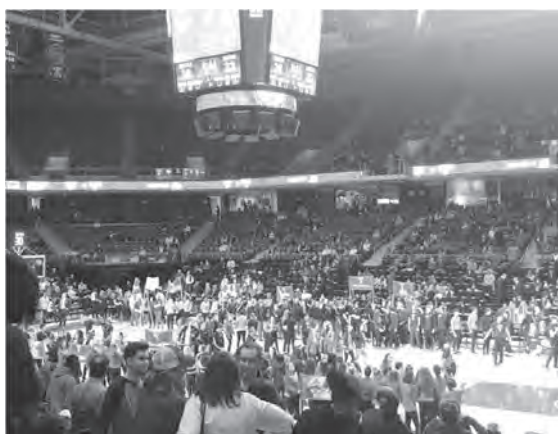
私は渡米前から米国出身のバレーボール選手との交流があり、米国のトップ選手は大学時代に学んだことと自身のセカンドキャリアについてリンクしており、文武両道で素晴らしいなと思っていたが、バレーボール選手としてのキャリアや実績は関係なかったのだと思い知らされた。米国ではNCAAの規定によりGPAが2.0/4.0以上でなければ試合や練習に参加できないとされている。GPA（Grade Point Average）は日本の多くの大学でも用いられ、 $GPA = \text{各科目の} \{(\text{単位数}) \times (\text{評価のGP})\}$ の総和/履修登録した総単位数で求めることができる。私の赴任したテンプル大バレー部のチーム平均は3.7/4.0前後であり、所属カンファレンス（日本の野球でいう6大学リーグのような区分を表す）の中でもトップレベルの学業成績であった。

競技スポーツにおける競技成績はもちろん表彰等の対象となるが、それと同等かあるいはそれ以上に学業成績を称える文化が米国にはある。アメリカンフットボールの試合前の壮行会やバスケットボールの試合のハーフタイムイベントなどでGPA 3.5以上の学生アスリートを表彰する時間が設けられ、会場内も非常に暖かくそれを称賛していた。

米国では、「私は学生アスリートです」というと、それだけで「私は文武両道の人間で、インターンシップも経験し、即戦力として働くことができます」とアピールできうる。しかもこの文武両道という面では、学生アスリートとして4年間を全うした学生は最低でもGPA 2.0以上であることは間違いないので、日本における「体育会系」という場合と意味合いが変わってくるだろう。米国の競技ス



アメリカンフットボールの壮行会にて



バスケットボールのハーフタイムイベントでの表彰、GPA4.0獲得者が中央に

スポーツの1年におけるシーズンは短く、シーズン中も1週間くらいの休みが何度かあるため、私の体感では、新型コロナウイルスが流行する前から、年間の半分から3分の1くらいの時間は競技から離れているように感じた。

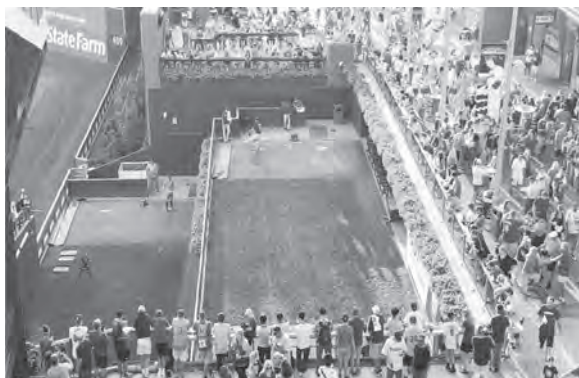
オフシーズンの間もNCAAとしてトレーニングプログラムの提供は推奨しているが、多くの学生がインターンシップを経験したり、夏季集中講義を受けて春や秋のシーズンで、競技に集中しやすい状況を作ったりしている学生も多い。私は学生の中にインターンシップを経験したことはなく、そもそもそれほどの長期の休暇はなかった。米国で学生アスリートとして過ごせるチャンスがあるならぜひ多くの日本の学生にも経験してもらいたい。



〈コラム3：遊び上手なアメリカ人〉

ここまでは米国の学生アスリートの学業への取り組みについて見てきたが、ここでは遊ぶときは遊ぶ、遊び上手なアメリカ人の様子を見てもらいたい。

まず特筆すべきは、NCAAの規定によりひと月に一回程度チーム単位で行うチームアクティビティ（Team Activity）がある。コロナ禍の影響で全体としての回数は少ないが、いずれも印象的なイベントがコーチングスタッフ陣を中心に企画された。また体育局主催の壮行会や体育局職員を中心としたさまざまなパーティー、チームごとのクリニック、遠征中の食事会などをここで一挙に紹介することとしよう。



カブス在籍時のダルビッシュ有投手



大学アメリカンフットボール観戦



郊外フィールドでのトレーニング



ビーチバレー（コーチングスタッフ陣）



全競技スポーツ総会での一幕・ペタンク



新入生歓迎会・チアリーディングチーム



バルチモアでの試合の合間の自由時間



外部の講師を呼んでのヨガ講習



試合後のクリニック



遠征中の食事会

- 試合後にそのままバレー教室を行うのがアメリカ流、新入生二人組も必死の指導
- 食事会はいつでも明るい



サンクスギビングデイのパーティー



インドアパットゴルフ

- 米国で重要な祝日の一つ、監督の自宅にお呼ばれすることも多かった
- 日本ではあまり見かけない室内のパットゴルフ、優勝はコーチ陣チームだった
- 個人成績最高スコアで回ったスコア表は残念ながら紛失してしまった

元NBA選手も参加する本格的な草バスケ、中学時代に1年だけ入っていたバスケ部での経験が活かした？昼休み中のこのコートは職員専用で忙しくてもみんな意地でも集まる、マイケル・ジョーダンとNBAファイナルで争った経験を持つAaron Mckie（アーロン・ミッキー）に「Hold on！」は「Stop！（＝止まれ！）」だと教わったのはいい思い出となった



アメリカンフットボールの壮行会にて



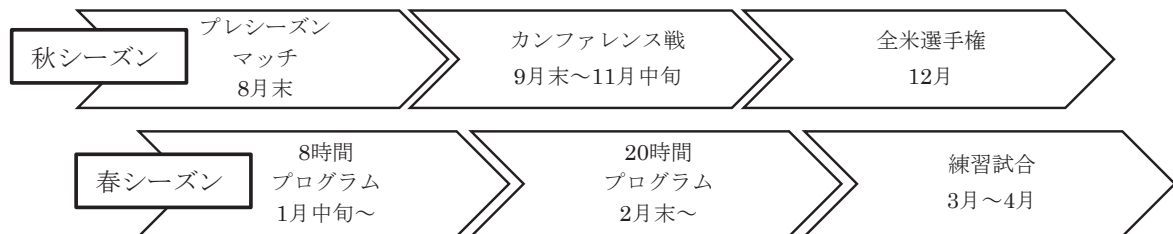
（４）テンプル大学女子バレーボール部でのコーチング実践

①年間・月間スケジュール

私が研修中のチームの年間スケジュールはコロナ禍の影響を受けた２年間だったため特殊ではあったが、通常では９月から始まる秋シーズン（Fall Season）が大学女子バレー界で最も重要である。８月末～９月中旬のプレシーズンマッチ、９月末～１１月中旬のカンファレンス戦を経て、各カンファレンスの規模に応じて優勝チームか２位のチームまで（ミネソタ大学やネブラスカ大学といった強豪チームがそろうBIG10カンファレンスのような大きいカンファレンスからはさらに複数のチーム）が１２月の全米選手権に駒を進める。約３週にわたって行われる選手権でその年の全米チャンピオンを決めた後は、ウィンターブレイク（冬期休暇）を挟んで１月中旬から春シーズンが始まる。

春シーズン（Spring Season）では１週間の練習時間に制限が設けられ、８時間プログラムと２０時間プログラムに分かれて実施される。この中にはストレングスコーチによるウエイトトレーニングやコンディショニングトレーニングの時間も含まれるため、ボールを使った練習時間はより短くなる。また春シーズンは公式戦もなく、４回

までの練習試合を各チームの判断で行うことができるようになっている。テンプル大ではこの時期に卒業生を交えての部内大会であるAlumni Tournament（アルムニ・トーナメント）を開催しているが、コロナ禍のため私はそれを経験することができなかった。



秋シーズン、春シーズンの大まかなスケジュール

4月末頃になると学生アスリートたちは春学期の最終試験に向けて勉強やレポートの総仕上げにかかる。そのためこの時期は「オープン・ジム (Open Gym)」といって選手個々の判断で練習をすることができる日を多く設定している。オープン・ジムではコンディショニングトレーナー以外のコーチングスタッフの立ち入りを禁止しており、やるかやらないか、何をどうやるか、といったことがすべて選手に任されている。この時、「Did you do anything at the open-gym yesterday? (あなたは昨日オープン・ジムで何かしましたか?)」などとは聞いていけない。したかどうかを確かめる行為は受け取り方によっては強制しているように見え、選手からの告発が体育局にあればそのコーチに対してペナルティが課されてしまうことになりかねない。

全米選手権に出場できないチームは12月がそのまま休暇期間となるため、勝てないチームは練習する期間も短くなってしまう。そうしたチームの選手が競技力を向上するためには、このオープン・ジムのどれだけ活用するかが大きくかかわっている可能性があり、非常に気になる場所であるがそれを知るすべはない。

②週間スケジュールと一日の流れ

週間スケジュールは秋シーズンのキックオフから学生たちの授業が始まるまでの期間（8月初め～8月末）が最もハードになっている。4月に1年間の活動を終える選手たちにとっては数か月ぶりのチームでの練習となる。しかしながら、その年の新入生はここで初めて大学チームでの練習を経験するため、入学してチームに合流後すぐに、初めての秋シーズンを経験することになる。そのためこの期間に入る前の過ごし方が重要になる。前半(Summer 1)と後半(Summer



S&Cコーチの指導を受ける新入生

2)に分かれる夏季期間のうち、7月頃～8月初めの期間では選手個々にストレングス(S&C)コーチとウエイトトレーニングやコンディショニングトレーニングについて相談し、個別プログラムを実施している。また前述のオープン・ジムも活用し、そこに新入生も参加して鍛錬期に備えている。

この鍛錬期は、一日の練習時間が日本と比べて短く休暇期間も多いアメリカの学生アスリートにとっては体力的にも精神的にも厳しいものとなっているため、主に週末の土曜日にチームアクティビティの時間を設定したり、追加の休暇日(Additional Day Off)を設定したりして工夫している。なお、この追加の休暇日はいわゆる有給休暇のようなもので、シーズンごとに消化すべき日数がNCAAで規定されている。

週間スケジュール例：秋シーズン、鍛錬期（8月初め～8月末）

	月	火	水	木	金	土	日
朝	8:30- 11:00 ボール	8:30- 11:00 ボール	8:30- 11:00 ボール	8:30- 11:00 ボール	8:30- 11:00 ボール	ビーチバレー、インドアゴルフ、野球観戦などのチームアクティビティ、もしくはAdditional Day Off	OFF
午前	11:00- 11:45 ウエイト	11:00- 11:45 ラントレ	11:00- 11:45 ウエイト	11:00- 11:45 ラントレ	11:00- 11:45 ウエイト		
昼	休憩	休憩	休憩	休憩	休憩		
午後	15:00- 18:00 ボール	15:00- 18:00 ボール	15:00- 18:00 ボール	15:00- 18:00 ボール	15:00- 18:00 ボール		
夕	余暇時間	余暇時間	余暇時間	余暇時間	余暇時間		

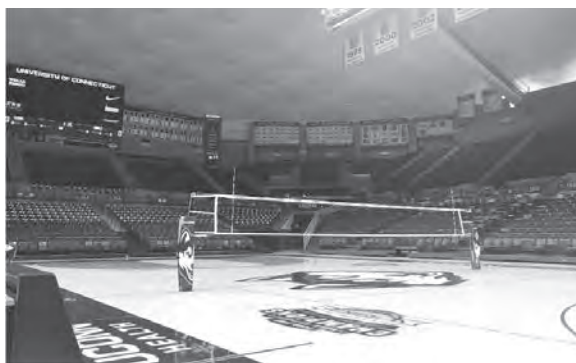
秋学期の授業が始まると午前か午後に一回、チームでのボール練習とウエイトトレーニングもしくはコンディショニングトレーニング（ラントレ）を行う。プレシーズンマッチでは多くの場合、4チームが一つの大学に集まって、2日間にわたって総当たりのトーナメント戦を行う。そのため金曜日と土曜日が試合日となる。基本的には試合をした次の日はOFF日にしなければならないため鍛錬期に近い週間スケジュールとなる。

週間スケジュール例：秋シーズン、プレシーズンマッチ（8月末～9月中旬）

	月	火	水	木	金	土	日
朝	8:40- 10:40 ボール	7:30- 9:45 ボール	8:40- 10:40 ボール	AWAYならバス移動あるいはホームゲームの準備 学生は合間を縫って講義に出席する	試合 (1試合もしくは2試合)	試合 (1試合もしくは2試合)	OFF
午前	10:45- 11:30 ウエイト	10:00- 11:00 ラントレ	10:45- 11:30 ウエイト				
昼	休憩	休憩	休憩				
午後	授業	授業	授業				
夕	余暇時間	余暇時間	余暇時間				



カンファレンス戦は完全にホームアンドアウェイ（Home and Away）方式で行われ、「比較的」近い大学同士でペアとなって移動あるいはホームゲームのホストをするようになっている。アウェイの場合は木曜日に一つ目の対戦校へ移動し、金曜日に試合をする。土曜日には2つ目の対戦校へ移動して、日曜日に試合をする。日曜日は試合時間が早めに設定されており、試合をしたその日にホームタウンへ帰れるように配慮されている。フィラデルフィアからフロリダやテキサスにある大学へ移動する際には米国内であっても、一日に2つの飛行機に乗るため、木曜日に2回、土曜日に2回、そして日曜日の試合後に2回と、週末だけで計6回も飛行機に乗ることがある。日曜日の試合後にすんなりと飛行機に乗ればいいが、テンプル大で利用することが多いアメリカン航空では遅延や欠航が日常茶飯事となっており、その日のうちに帰れないということが1度や2度ではなかった。



どの大学も大きな体育館を持つ



コーチ陣の服装も様々

週間スケジュール例：秋シーズン、カンファレンス戦（9月中旬～11月中旬）

	月	火	水	木	金	土	日
朝	OFF	7:30- 9:45 ボール	8:40-10:40 ボール	移動日	試合	移動日	試合（帰宅）
午前		10:00-11:00 ラントレ	10:45-11:30 ウエイト				
昼		休憩	休憩				
午後		授業	授業				
夕		余暇時間	余暇時間				

春シーズンに入ると8時間プログラムと20時間プログラムで一週間の練習時間を調整することになる。8時間プログラムではウエイトトレーニングやコンディショニングトレーニングに時間を割こうと思うと1回のボール練習の時間は1時間ほどになるため、チーム全員で一緒にやるのではなく、何人かのグループを作ってコーチ陣が同様の練習メニューを一日に2回あるいは3回実施する。チームでの全体練習を設定する場合は、ウエイトトレーニングやコンディショニングトレーニングの時間との間に少し余裕を持たせることでオープン・ジムの時間を設けている。

週間スケジュール例：春シーズン、8時間プログラム（1月）

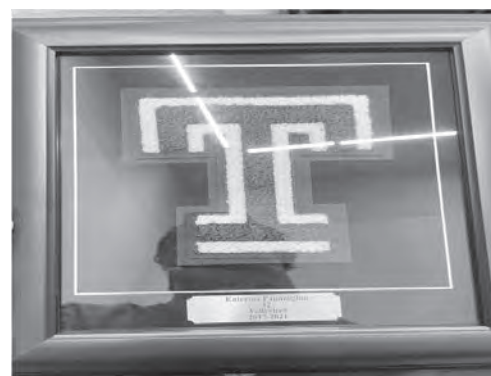
	月	火	水	木	金	土	日
朝	8:40- Group A 9:40- Group B	8:40- Group B 9:40- Group A	8:40- 9:40 全体練習 +オープン・ジム	8:40- 9:40 全体練習 +オープン・ジム	オープン・ジム	OFF	OFF
午前	10:45-11:35 ウエイト	10:45-11:35 ラントレ	10:45-11:35 ウエイト	10:45-11:35 ラントレ	10:45-11:35 ウエイト		
昼	休憩	休憩	休憩	休憩	休憩		
午後	授業						
夕	余暇時間	余暇時間	余暇時間	余暇時間	余暇時間		

20時間プログラムでは、全体でのボール練習を2時間～2時間半、ウエイトトレーニングやコンディショニングトレーニングを1時間に設定すると週6回の練習日でおおよそ20時間となる。チームによっては追加の休暇日をこの期間に消化することもあり、結果的に8時間プログラムと同じように土曜日と日曜日がOFFになる。また3月の初めに1週間程度規定されているスプリングブレイク（春期休暇）に合わせて、その前後に追加の休暇日を割り当てて長めの休暇期間とすることもできる。これらの裁量権は監督（Head Coach）に委ねられており、その決定は体育局によって認可される。

またこの時期は来年チームに入ってくる新入生が練習見学に来ることが多く、コーチ陣やGAはその対応に負われることも少なくない。なお、新入生の来訪にもNCAAでは厳しい規定があり、公式の来訪（Official visit）とプライベートでの来訪（Private visit）が定められ、この時期の公式の来訪にかかる費用はすべて大学（チーム）側で負担することとなっている。



Official visitに対応するコーチ陣



この時期、卒業生に送られる記念盾



週間スケジュール例：春シーズン、20時間プログラム（2月～3月）

	月	火	水	木	金	土	日
朝	8:40- 10:40- ボール	8:40- 10:40- ボール	8:40- 10:40- ボール	8:40- 10:40- ボール	8:40- 10:40- ボール	OFF (Additional Day Off)	OFF
午前	10:45- 11:45 ウエイト	10:45- 11:45 ウエイト	10:45- 11:45 ウエイト	10:45- 11:45 ウエイト	10:45- 11:45 ウエイト		
昼	休憩	休憩	休憩	休憩	休憩		
午後	授業	授業	授業	授業	授業		
夕	余暇時間	余暇時間	余暇時間	余暇時間	余暇時間		

① テンプル大バレー部のチーム構成－多様性に富んだチーム－

私が赴任した当時は監督（Head Coach）のベイクにコーチ（Assistant Coach）の畠山氏と同じくRen Cefra（以下レン）がコーチングスタッフとして在籍していて、そこに私がボランティアコーチ（Volunteer Assistant Coach）として加わった。現場スタッフとしては、そこにGraduate Assistant（以下「GA」：大学院在学生によるインターンシップ）としてDirector of Operations（いわゆるマネージャー業）を担当するSarah Linebaugh（以下サラ）がいた。畠山氏は長年テンプル大バレー部を支えた日本人コーチだったが、コロナ禍の影響等の事情により、私がともに仕事をするのができたのはワンシーズンだけとなった。このコーチの枠にはその後Kait Kozak（以下ケイト）やLesli Akeo（以下レスリー）がその役を務めた。

テンプル大バレー部の特徴は前述のとおり学業優秀であることに加えて多様性（Diversity）に富んだオリジナリティを持っていることである。監督のベイクはスリランカ系のドイツ人であり、畠山氏と私が日本人、コーチのレンやレスリーはハワイ出身、サラの後任であったChristie Cesarini（以下クリスティー）もフランス出身であった。

選手にも海外からの留学生プレーヤーが多く、その年ごとの入れ替えはあるが私がともにプレーしたのは、ドイツ出身者が2名、ギリシャ出身者が1名、オランダ出身者が1名、トルコ出身者が2名、ポーランド出身者が2名、またハワイ出身者が4名であった。ハワイ出身者を除く米国出身者は他に10名いたが、そのうちの5名はAfrican Americanであり、私がアメリカで見たチームの中でも最も多様なルーツを持っているチームである。

そのほかのチームでは、やはりいわゆる白人と呼ばれる層の選手が多くを占めており、次いでAfrican Americanやハワイ出身者が多く見られた。ヨーロッパからの留学生としてトルコ出身者がよく見られ、次いでギリシャやドイツ、ポーランド出身者が何人か見られるという環境であった。そのため、私のチームの中にはそうした多様性が進学先を決めるうえでの一つの判断材料だったという学生もあり、私自身も日本ではなかなか直接実感することが難しい多様性の問題をじかに感じる事ができたことは大きな収穫であった。特に、コロナ禍で話題となった「Black Lives Matter（ブラッ



ク・ライヴズ・マター)」運動の際には非常に身近な問題としてチームとしても個人としても考えることができた。



2021年のチームのホームページの写真

多様性の国、アメリカの中でもさらにそれを突き詰めたようなチーム構成となっている

②英語力と語学学習について

ここで私の英語力について簡単に説明する。私は本研修が始まる一年ほど前から本格的に語学力向上のための自己学習を始めた。それ以前にも大学や大学院等で英語力を試される場面は多少あったが、当時受けたTOEICの点数も人に自慢するような点数ではなかった。テンプル大への留学生を対象としたTOEFL（一般的なTOEICがリスニングやリーディングに重きを置いているのに対して、主にスピーキングに重きを置いている英語力検定試験）の最低点が79点なのに対して、私がJ-1ビザの取得のために受けた最初のTOEFLの点数は29点であった。

他にもIELTSなど国際的に英語力を証明する試験はいくつかあったが、仕事の関係上それらを何度も受験する時間がなかったため、テンプル大の専門職員とのインタビュー形式の試験に挑むこととなった。それは一度落ちたら終わりというものではなかったが、研修期間どおりに渡米するためには一発合格が条件となっていた。6点満点中4.2点という成績で最低ラインの4点を上回り、なんとか当初の予定通りJ-1ビザを取得することができた。

私の場合、英語の学習に関して最も効果を発揮したのは実際に話すことであった。中でもダイレクト・メソッド（直接教授法）と呼ばれるAに対してはA、Bに対してはBと決まった文言を答える方式の学習法が私には合っていて、「カラン・メソッド」として当該プログラムを提供しているネイティブ・キャンプにはたいへん感謝している。

こうしたオンライン英会話の良いところは、研修中でも行えることであり、時差の影響はあるものの在米中も英語力の向上や日ごろの出来事を講師とのやり取りの中で、英語を話すことで知識の定着や日常の振り返りに非常に役立った。

オンライン英会話以外にも洋画を見たり、英語の短文をリスニングで流したりしながらいわゆる英語耳をつくることにも力を入れていたが、その点についてはやはりネイティブはネイティブであった。渡米後チームメンバーと積極的に話すようにしたが、

コーチ陣は英語が母国語ではない国出身であったり、あるいはそうした人が多い地域出身であったりと私に合わせて話してくれるため比較的話しやすかったが、英語を母国語として話す学生のうち外国語を積極的に学んでいない学生の話している言葉は特に早く、ちょっとした日常会話であっても聞き取ることができなかった。

③日本とアメリカのStudent Manager（学生マネージャー）事情

日本でも米国でもマネージャーと呼ばれる学生が存在するが、その役割や意味合いは異なっている。ここではStudent Manager（学生マネージャー）すなわちお金をもらわずにボランティア形態で働くマネージャーの日本とアメリカの違いを見ていきたい。

日本では高校や大学でよくみられるマネージャーだが、高校では選手として入学・入部した学生が専任や選手を兼任する形で従事することが多く、その業務としては雑用全般を任されることが多いように思う。大学では「主務」と呼ばれる学生マネージャーの上級職ともいべき役割を担う学生がいるが、日本ではいわゆる女子マネージャーが最上級生になるにあたって主務に昇格したり、4年生の選手のいずれかが主務を兼任したりする姿がよく見られる。

米国では日本の主務に当たる業務はすべて前述のGAが行っている。NCAAのスポーツ競技にGAとして携わる者はその後のキャリアでマネジメント業を活かしたいと考えており、当該スポーツへの専門性よりもマネジメントの能力によって評価される。一例としてテンプル大バレー部を支えたGAの内、サラはスポーツ経験がなくアメリカンフットボール好きな女性で、後任のクリスティーは大学までテニスをプレーしていた女性だった。またサラの前任のJason Broadt（以下ジェイソン）はバレーボール経験者ではなかったが、GA時代にバレー部での仕事ぶりを評価されてテンプル大・体育局全体のマネージャーに昇格を果たしている。

米国では選手がマネージャーを兼任するということがないということはわかっていただけたかと思うが、ジュニア期から大学まですべての選手がほとんど雑用をすることもないし、誰か一人が自身の競技以外のことに従事することはない。訴訟大国であるアメリカにおいて公平性を欠くことはそれだけで訴えられる要因となりうるし、そもそもジュニア期ではクラブの年会費が非常に高く、選手は日本でいう予備校や塾に通っているようなものである。

日本の予備校や塾で成績の悪い学生が部屋の掃除を押し付けられたり、新しく入ってきた学生にそこで使う教科書などの勉強道具をすべて持たせたりしないだろう。もしそんなことがあれば、日本でも「私の子どもは勉強をするために予備校や塾に通わせているのになんでそんなことをする必要があるのだ？」とクレームが入ることだろう。バレーボールやほかの競技スポーツでも同じようにその競技をするために通っているのだということが大前提としてあり、すべての選手は顧客であるため、顧客の満足度を上げるための努力の中には、チーム経営者側でどれだけ練習環境を整えられるかということが含まれている。

大学に入ってから同様に、後述するフルスカラーシップ（Full-Scholarship：奨学特待生）の学生だろうと、ウォーク・オン（Walk-on：一般入部生）の学生である



うと、NCAA傘下の競技スポーツに参加している以上まずは学生として勉強をしっかりとし、そのうえでそれ以外の時間を自身の競技に充てることが大前提である。そのため米国の大学では基本的に選手はネットを張ったり、コートをもップ掛けしたり、ボールを準備したりということをしていない。「練習環境を整える」のはコーチの仕事なので、コーチングスタッフが毎回それらのことをするようになっている。選手はその間、練習の準備のためにコンディショニングトレーニングを行い、もっと余裕があれば講義の予習や復習といったことに時間を使っている。

練習の前後ならともかく練習中のボール拾いやボール渡しといった仕事も基本的には選手の仕事ではないため、コーチ陣とGAが役割分担をする。それでも練習の強度が上がってきた時や反復練習やグループ練習など人手を要する場面が練習中には出てくる。そうした時に登場するのが冒頭で紹介したStudent Manager（学生マネージャー）である。

学生マネージャーはほとんどの場合がスポーツ系の学部 zu 所属しており、スポーツマネジメントを専攻していることが多い。彼らは秋シーズンや春シーズンの初めごろに各スポーツ競技のヘッドコーチやGAと連絡を取り、書類審査や面接を経てチーム専属（あるいは他の競技との掛け持ち）の学生マネージャーとなることができる。

彼らの役割は大きく①練習環境の整備（前述のコート設置やフロアのもップ掛け、ボール拾いなどコーチのサポート）、②試合前後のホームゲームの準備（会場設営や会場整理、グッズ販売などGAのサポート）、③ホームゲームにおける試合中のボールレトリバーやもップ係などの補助役員）の3つである。これら日本では下級生やマネージャーが中心となっていて行っているものを学生マネージャーが行っている。

彼らは単に雑用をしに来ているのではなく、大学のトップスポーツの現場に身を置きたいとか、その競技スポーツに興味があるけど自身の競技力は大学のトップでやるほどではないとか、純粋にマネジメントを学びたい、実践したいという志を持っている（割合としてバレーボール経験者は少なく、どちらかというとあまり競技スポーツに取り組んできたという学生は少なかった）。大学のシステム上もこれらの学生マネージャーは単なるボランティアではなく、一定の仕事認められた学生マネージャーにはそれに相応する単位が与えられる仕組みとなっており、「雑用をしたくない（する時間がない）選手」と「手助けが必要なコーチ陣・GA」と「手伝



学生マネージャーを指導する筆者



「ハワイアンナイト」で学生マネージャーとともに

いをしたい学生」というようにうまく住み分けがなされており、非常に有用なシステムであると感じた。

④フルスカラーシップ（Full-Scholarship）とウォーク・オン（Walk-on）

NCAAにおける競技スポーツチームには2種類の学生が所属しており、それが前述のフルスカラーシップの学生とウォーク・オンの学生である。フルスカラーシップとは文字通り奨学生や特待生を意味しており、ポジションや選手のキャリアによって4年間や3年間など適応範囲は変わってくるものの、基本的には在学中の全ての学費等の費用を免除してもらえ、学生アスリートのことを指す。ウォーク・オンは学費を自己（家計）負担によって賄う学生アスリートのことである。日本の一般入学・入部の学生とやや趣が異なる点は、ウォーク・オンの学生も競技スポーツに関わる負担はなく、入学・入部に関しても事前に大学側と連携している点である。日本の一般入学生の多くが進学先を決めた後に、各部活動に仮入部等の連絡を取るのに対して、ウォーク・オンの場合はフルスカラーシップと同じように高校時代からスカウティングの対象となっており、ジュニアチームでプレーをしている時からいくつかの大学と進学先について協議していることが多い。

フルスカラーシップとウォーク・オンのチームの割合はNCAAで規定があり、バレーボールではフルスカラーシップの上限は13名と決まっている。ひと学年ごとの決まりはないが、大体のチームで学年ごとに3～4人のフルスカラーシップの学生が存在している。そのため、女子バレーでは、Division 1に300校以上のチームが所属しているが、チーム間での選手の大きな人数差というのはほとんど存在しない。

スターティングメンバーの6人あるいはリベロを含めた7人にその交代選手を含めると14人とこの時点でフルスカラーシップの学生の上限である13名を超えてしまい、ウォーク・オンの学生であっても十分戦力となりえるため強豪チームや経済的に豊かなチームは30人や40人の選手を獲得したいと考えるかもしれない。

しかしながらウォーク・オンの学生であっても競技スポーツでの活動費は各チームでの負担となるため、試合に出すかわからない選手を大量に抱えようとするチームは少ない。また、NCAAのルールでは1セット中の交代人数が15人と通常の国際ルール上の6人に対して多く設定しており、ひと試合で出場する選手の人数が多く、ウォーク・オンであっても試合に起用される機会が多いが、仮に多くのウォーク・オンを抱えるチームがあったとして、試合に出られない選手たちが学業もおろそかになり、それらの選手が先述のGPAの規定をクリアできなかった場合は学生個人だけでなく、チームや大学にもペナルティが課されるため、そのことが自浄作用となっている。

さらに、NCAAではトランスファー（Transfer：移籍）が容易であり、シーズンごとの選手の大学から大学への移籍は非常に多い。なお、このトランスファーのルールに関しても、従来の「同州内の移籍の場合は1シーズン試合に出場することができない」というルールが撤廃され、学生にとってよりフレキシブルな環境が整備されている。

これらのことから、たとえ常に全米で上位に入る強豪チームであっても一つのチームで多くの選手を抱えるということがないように、チームや大学と選手間で相互作用



のようにシステム化されており、バレーボールではどのチームも20人前後の構成となっている。

日本と米国の大学におけるスカウティング規定	
日本：個々の大学による	米国：NCAAで規定あり

活動費の負担や移籍の自由度	
日本：自己負担、非常に稀	米国：大学（チーム）負担、活発

部員（プレーヤー）数のバランス	
日本：いわゆる強豪校に偏りやすい	米国：どのチームも一定の人数

日本と米国の大学におけるチームごとの人数の比較（バレーボール）

日本のいい点としては、試合への出場機会を気にしなければ（チームや大学の方針にもよるが）、誰でも強豪チームに入部し、部員として活動できる可能性があるという点だろう。私自身も30人以上が在籍する大学一部チームの端くれとして過ごしたことでコーチとしての今日があるため、一概にいずれかを否定するつもりはない。翻っていえば、米国ではウォーク・オンでの入部ができなければ、入学が決まった後にそうしたチームに入することはほとんど不可能に近く、そうした学生にとっては学生マネージャーになることができなければ在学中に大学の競技スポーツに携わることはできない。学生マネージャーに対しても公正な競争の原理を働かせているのがある意味NCAAやアメリカという国の恐ろしいところともいえよう。

別の視点から見てみると、フルスカラーシップが難しければウォーク・オンで、それでも難しければ学生マネージャーでというように、絶えず競争にさらされている米国の競技スポーツでは、競争を勝ち抜いた者によるそれ以外の者への配慮が自然と発生しやすいようになっていると感じた。それは公正な競争社会における公平性の実現のための循環装置ともいえるべきものである。

それはNCAAを卒業した多くのプロスポーツプレーヤーが毎年、各所に多くの寄付をしていることからわかるが、大学が「最後の教育機関」として担っている役割は非常に大きく、その点において私自身が学部時代に学んだものと比べると大きな差があるといわざるを得ないだろう。後述するジュニア期の子どもたちを見ているとなおさら実感するが、（当然、自分自身の楽しみのためにやっているが）ある種の競争社会で勝つことを目指して、あるいはそうした環境を望んで、競技に打ち込むのがジュニア期だとすると、競争後の佇まいや行いなどの社会的・人間的にあるべき姿を学ぶ場が大学時代なのかもしれないと考えさせられた。

私の経験上、大学時代は競技スポーツにおける競技力の序列がそのままチーム内で

の序列となっており、チームの運営や意思決定、あるいは人間関係に対して少なからず影響があったという実感があった。しかしながら米国での研修中はそうしたことを感じることはなく、例えば雑用に関して、コーチやGA、学生マネージャーがいるとはいえ選手の手も必要となる場面では、フレッシュマン（Freshman：1年生）やシニア（Senior：4年生）といった学年やレギュラーメンバーかどうかといったことは関係なくみんなが率先して動いていた。やる気がみなぎっている新入生にとっては、雑用によって本来自分がやりたいことができないということがないのは大きなアドバンテージとなる。競技力による隔たりがないということも頑張りたい人が頑張れる環境づくりを後押ししている。

特に私が競争と公平性の循環装置としての競技スポーツや大学教育の場を感じた瞬間は、あるウォーク・オンの選手が一年間の競技や勉強に対する評価を受けて、期限付きでスカラシップを与えられたときである。その選手にとっては自身の1シーズンや1年間、あるいはこれまでの努力を認められた瞬間であり、同じウォーク・オンの学生にとっては新たな競争への意欲となり、フルスカラシップの学生にとっては自分たちの立場を再確認させられた瞬間となったことだろう。



とあるウォーク・オンの学生へスカラシップを授与することを発表した瞬間
その場で泣き崩れる当該学生とそれを支える上級生、彼女の日ごろの取り組み方を知らない者はこの場にはいなかった

⑤ コーチング実践

私が赴任した当初はコーチ陣や選手との関係、私自身の英語力という課題もあり、チームの前で私の考えを伝える場面というのはそれほど多くはなかった。一年目の私の役割は、データアナリストとしての側面が強く、各コーチのサポートに徹する場面も多かった。

2年目になるとそれぞれとの関係性も出



データ入力の様子

来上がり、徐々に自分の考えをチームに伝える場面も増えていった。特に同僚日本人コーチの畠山氏が日本に帰国された後は日本語を話す機会は失われ、その分コーチとしてほかのコーチ陣や選手とコミュニケーションをとる機会が増すこととなった。

練習メニューの提示については、これまでの取り組みを大きく変えるようなことはせず、ある部分練習をする際は、同じ時間でどれだけの精度で行うことができたかを見えるように何回中何回それが成功したか数える、全体練習をする際は大会で得たデータから基準となる数値を算出して練習の強度に応じてゴールラインを設定するなどシンプルなものであった。私がコーチ業を学んだ日本の大学男子チームでは、学生それぞれがあるデータを与えられた際に、それを学生たち自身で咀嚼して解釈し、お互いに情報を共有していたが、日本の女子のトップチームにいた際は、数字による単純な比較という行為そのものに対して苦手意識があったように感じていた。

テンプル大ではその心配はなく、例えばアタック決定率（＝アタック得点数 ÷ アタック試技数）という比較的単純な数値データでいうと、その選手の得点パターン（パスの返球状況や相手のブロック参加人数、コースなど）と非得点パターンあるいは失点パターンを提示し、得点パターンを伸ばすのか、非得点パターンや失点パターンを減らしたいのか選手自身に考えさせることから始める。選手が望む方向へコーチ陣で協議した内容を、部分練習やグループ練習で意識できるように設定する。そしてその結果を数値データや映像でフィードバックするというサイクルで選手とともに考えながら改善していくという毎日だった。

もともとドイツ出身の監督であるベイクや日本人コーチの畠山氏がいたことで基本練習は一日のメニューの中に組み込まれていたが、ジュニア期ではゲーム形式の練習が中心だった選手たちにとって、基礎基本の徹底は非常に効果的であったもののその重要性を真に理解していない選手も多かった。その必要性についての理解をデータアナリスト的視点から補うことができたことはよかった。数値データによって選手一人ひとりの技術項目ごとの改善点が明らかとなり、選手は日々の成果を即時にフィードバックされることで自身あるいはコーチ陣との連携によって成長を実感しやすくなった。選手個々の基本技術の水準が飛躍的に高くなったことが、チーム力を引き上げる要因となったと考えられる。



選手とともにドリルに参加する筆者（写真右）



〈コラム4：アメリカにおける「自主練習」〉

選手個々の基本技術の水準を引き上げられた要因としてもう一つ考えられるのは、「自主練習」の存在である。これは先述のオープン・ジムとはまた違って、チーム全体でのボール練習の前後にある空白の時間を利用した練習のことで、日本で自主練習という場合と同意である。テンプル大では基本的にNCAAで規定されている練習時間の上限よりも短めに1回あたりの練習時間を調

整しており、選手が望むならその時間分を自主練習として割り当てられるようになっていた。先に述べておくと、この自主練習にも厳密にはコーチ発信のもの（Mandatory Individual Work）と選手発信のもの（Voluntary Individual Work）とに分けられる。前者は練習中にいつもより調子の悪い選手などに監督が声をかけて行うことが多く、後者は選手からコーチ陣に声をかけることで実施される。

2年目の秋シーズンはコロナ禍の影響でカンファレンス戦等の公式戦が中止となり、選手一人ひとりの技術に焦点を当てて取り組むことができた。その中で監督のベイクからまず、ウォーク・オンの選手を中心に私が自主練習で付くようにと指令が出た。そのうちのNという選手はあまりほかのコーチ陣からの評価が高くなく、本人の練習態度についても難ありという感じの選手だった。基礎基本の徹底したプログラムを私から課された彼女も、初めは懐疑的だったが徐々にその効果を実感し、監督から指示をされた日だけでなく、自ら自主練習の実施を申し出るようになった。自信の付いた彼女は練習態度も次第に改善されゲーム形式の練習でも良い成績を残すようになっていった。コロナ禍の影響でメインのシーズンを春に移して行われたカンファレンス戦の開幕4試合ではスタメンに抜擢されるまでとなった。その頃には、彼女の成長に触発されたフルスカラーシップの選手も私の基礎基本の徹底プログラムを実践するようになり、彼女のポジションの競争率が高くなり、それがチーム力向上の要因の一つとなった。



自主練習で基礎基本を見直す選手



反復練習で自信を付ける

⑥ コーチング実践結果－過去10年間の競技成績の比較から－

テンプル大での競技成績を見ていく前にNCAAの競技スポーツにおける評価方式の一つである「RPI」について説明しよう。RPI（Rating percentage index: 評価パーセンテージインデックス）はチームの勝敗と過去の競技成績から重み付けされた対戦相手の強さに応じて各チームをランク付けするためのランキングシステムである。より強い相手に勝てば勝つほど順位が上がりやすいという特徴があり、全米で300以上ある大学女子Division 1に所属するすべてのチームのランクを一目で確認できるという点で優れている。しかし当然ながらすべてのチームがお互いに試合をするわけではないため、信用度にかけるという指摘もある。私個人としては、信用度の問題はともかくとしてランキングという一般に好

RECENT RESULTS(RPI and Standings)

Year	RPI	Standings
2020 (2021 Spring)	26	2 nd
2019	121	11 th
2018	167	10 th
2017	77	2 nd
2016	47	3 rd
2015	72	2 nd
2014	62	3 rd
2013	183	6 th
2012	159	5 th
2011	246	(Atlantic 10) 8 th (Atlantic 10)



近年の成績について・テンプル大の過去10年



まれる要素をうまく取り入れており、スポーツビジネスや興行という観点から面白いシステムだと思っている。テンプル大のRPIとカンファレンス戦における最終成績（Standings）を過去10年間さかのぼって一覧にして上に示した。2021年春シーズンはRPI、最終成績ともに過去10年で最高の成績を残すことができた。

⑦所属カンファレンスのチャンピオンシップトーナメント

2020年秋シーズンの代替シーズンである2021年春シーズンは、テンプル大にとって躍進のシーズンとなった。テンプル大は最終戦績を13勝6敗（うち3敗は同じカンファレンスのチャンピオンチームとの対戦）と好調だった。特に私たちにとって幸運だったのは、例年の完全なホームアンドアウェイ方式が、バックトゥーバック（Back-to-back）方式に変更されたことである。これまでは1週間のうちに同じ対戦相手と2回試合をすることはなかったが、コロナ禍の影響を鑑みて、同じ週に同じカードで2試合する方式となった（これによって週ごとの移動を減らし、複数のチームによる感染の拡大を抑える形となった）。勝つことよりも負けることの方が多かった近年のテンプル大において、負けた後にすぐ同じ対戦相手と試合をすることで、その日のうちに課題を修正して次戦に臨むことができたのがよかった。

先述の自主練習も上限いっぱいまで活用されるようになった。やりたい選手が増えてくると同じ時間にすべての選手に直接指導することが難しいため、先に紹介した基本練習のようなものであればそれぞれ個人的に行い、レセプション（サーブレシーブ）やジャンプを伴ったスパイクのようにコーチ陣が付く必要があるものは時間をずらして実施した。選手がコンディショニングトレーナーとの治療やテーピングのために朝早く来ては選手同士お互いにおしゃべりをしていることに気づいた私は、選手が来る7時30分頃にはすでにネットを立てて、それぞれの選手に必要な道具を体育館の四方に準備しておくことが日課となった。すでに準備



次戦に備えてのミーティングの様子



コーチに教わったものをほかの選手に教える



167cm対186cmを制す筆者、技術と熱量を伝える

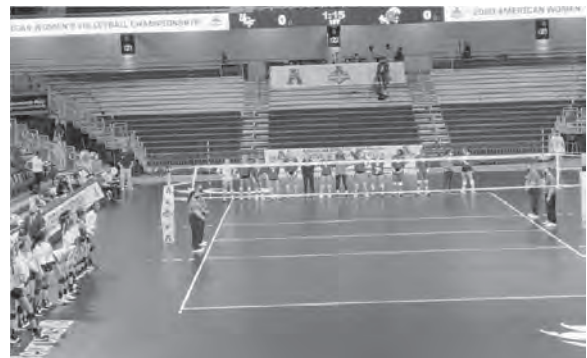
されている体育館を見て無駄なおしゃべりをしている時間を減らし、準備を急がせる狙いがあったが、これが功を奏した。

またこの頃になると私が選手と同じようにゲーム形式の練習に参加する中で実践するテクニックを、次の自主練習で取り入れようとする選手が出てくるなど、私自身にとっても日々の練習が非常に楽しみなものとなっていた。

最終戦となったUCFとの試合は1-3で敗戦となったが、これまで1セットも取れなかった相手から1セットを奪取し、自分たちの力を100%出し切った選手たちの表情は非常に充実した様子だった。



会場となったCincinnati大学



試合前の整列にもチームの個性が出る

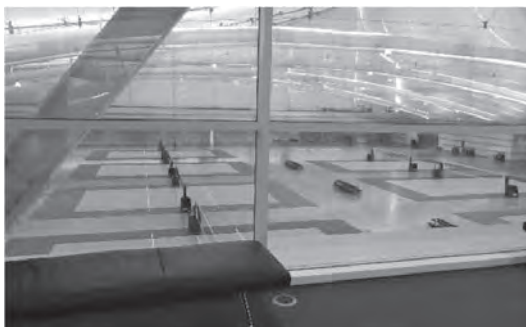


最終戦後の記念撮影にて・上段右側に筆者



〈コラム5：Women's Volleyball Championship（全米女子バレーボール選手権とコーチコンベンション）〉

全米選手権やコーチコンベンションについては過去の研修員による報告と重複する点が多いため簡単に紹介するに留める。またバレーボールに関する専門性の高い事柄については別の形でお伝えしようと思う。ここでは米国における取組全般として他競技でも取り入れられることを意識して紹介したい。



オンコートセッション用コート



会場での配布物



上位校のアナリストによる優勝予想



各チームの特徴が分かりやすい



米国代表チームのコーチ陣が勢揃い



代表コーチのTamaとは交流が続く



人気講師・オランダ女子代表監督のJamie Morrisonは元米国代表コーチ



Jamieのコーチ論・セッターは「ポン！ポン！」のリズムが大事だと力説



伊代表監督のDavideは片言英語で奮闘



伊ジュニア代表のMarcoもリズム命



伊代表の二人は気さくだった



ビーチバレーは時間の都合上断念



準決勝・Stanford対Minnesota



Minnesotaには宮部藍梨選手が在籍



年間表彰アワード的一幕・「なぜバスケとバレーでバレーを選んだの？」との質問に「接触がいやだからよ！」と選手。会場に笑いが起こった



会場にいた女の子にレクチャーする蘭代表のJamie。投球動作を見せながらベルトを使って実践。スパイク時に「肘を高く」は間違った指導法だと解説



通算勝利数を基にしたコーチ表彰



コーチによるコーチのための時間だった



カーチ・キライ（右）による講習



この2年後に東京五輪で金メダル獲得



ブロック講習では、メトロノームを使った4人でのブロック練習を披露したDavide



超満員となった決勝戦・圧巻の光景

（5）ジュニアバレーボールチームでのコーチング実践

今回の研修では米国代表チームの視察を予定していたが、新型コロナウイルスの感染拡大により予定を変更せざるをえなかったため、ジュニアチームでの研修をさせていただくこととした。米国のジュニア期のバレーボールの特徴は①ビジネス化されたクラブチームが中心となっていること、②チーム構成が小中高を基準としたものでは



ここでも基礎基本の徹底



やはり良いものはすぐ取り入れる

なく、U-11、U-12、U-13というように年齢を基準にしていること、③強豪クラブでは、例えばU-15のチームが10数個あり、全米を飛び回る「ナショナルチーム」、遠征範囲が近隣州（あるいは市内）までの「リージョナルチーム」、市内大会だけに出場する「ローカルチーム」に分かれていること、④遠征ではチーム単位ではなく、家族単位で行動すること、⑤シーズンが限られており（シーズン制）、複数のスポーツを行っていること（マルチスポーツ）、⑥大会の規模が非常に大きく、一つの会場に100コート以上設置されていることである。

今回研修を行ったAPAC排球会にはU-14とU-15のそれぞれ一つずつのチームがある比較的規模の小さいクラブであった。体育館は教会に併設されたコンクリートのコートであった。例年であればクラブのシーズンと高校のシーズンは重ならないが、コロナ禍の影響で開始が遅れたクラブのシーズンがずれ込んで、高校のシーズンと重なっていたため、高校でのトレーニングも視察することができた。チームの所在地であるテキサス州では早くから新型コロナウイルスにかかる制限が解除されており、コロナに感染することが前提で生活している様子であった。幸い私が研修期間中には身近なコロナ感染者は出なかったが、研修以前と研修後には複数のコロナ感染者があった。しかしながら、感染の経験を話す子どもたちやその保護者の表情は暗いものではなく、風邪を引いた時の苦労話をするようであった。米国内であつてもフィラデルフィアとテキサス州・エルパソではまた別の国のような文化の違いを感じた。高校のフィールドを使つてのコンディショニングトレーニングや公園の芝生の上にコートを設置してプレーする「グラスバレー」などコロナ禍のための工夫は、体育館使用の規制が解除さ



大学でもジュニアチームでも全力プレー



高校のトレーニングジムとフィールド



コロナ禍で活躍するグラスバレー



コートとカメラが100個並ぶ会場でチームと



れた後も行われており、「体育館が使えないからできない」ではなく、どうやるかを自由な発想で工夫する姿が興味深かった。ラスベガスで行われた地方大会もその後行われた全米選手権も人の出入りは多くなっていた。

（6）アメリカのプロスポーツ

2021年2月27日～3月29日という短い期間で、アメリカ女子プロバレーボールリーグ「Athletes Unlimited – Volleyball」が開催された。これまでも米国ではバレーボールのプロリーグを発足しようという動きはあったが、いずれも成功しなかった。米国4大スポーツの陰に埋もれる形となり、なかなかプロスポーツとして定着することが難しいことがその大きな要因であった。米国女子スポーツでは近年になってバスケットボールを抜いてバレーボールが競技人口でトップとなり、これまでソフトボールやラクロスにおいてプロリーグを成立させてきたAthletes Unlimitedがバレーボール部門を設立に動いた。

本プロリーグ戦が米国内で成功した理由としては、リーグ内にチームを持たない点が大きいだろう。チームを持つためには専用の体育館や試合をするアリーナ、バレーボールやトレーニングをするための設備、所属選手、コーチングスタッフやフロントスタッフなどが必要となるが、それだけの投資をして利益を上げられるか不透明なバレーボールチームを持ちたいという企業やスポンサーを見つけるのは難しい。リーグの中にチームを持たないことでその要件をすべて取り払うことに成功したのがAthletes Unlimitedである。

本リーグ戦では、40数名の選手をリーグ内に雇用して、4名のキャプテンによるドラフトによってチームを決め、その週の結果によって新たなキャプテンが選出され、また次の週にはドラフトによってチームを作る、というサイクルで試合を行っていく。選手評価には専用の採点システムが用いられ、例えばアタックによる得点は7点というように技術項目ごとに成功失敗によって加点や減点がなされるというシステムであった。

2021年大会には米国代表女子チームキャプテンのジョーダン・ラーソンやブラジル代表のシェイラ・カストロ、ドミニカ共和国代表で日本のVリーグでプレーした経験のあるベタニア・デラクルスなどのトッププレーヤーと、大学を卒業したばかりの若いプレーヤーたちが同じコートでプレーをした。コロナ禍でなければ視察をしたいところであったがそれはナショナルチームの視察同様また別の機会に実現させたい。

（7）アメリカのコロナ禍の日常とスポーツ

私の研修期間中はコロナ禍の影響を大きく受けることとなった。テンプル大のあるフィラデルフィアでは比較的日本のニュースで見聞きしていた制限や自粛要請に近いものだったように思う。先述した通りジュニアチームの研修で行ったエルパソはテキサス州の方針で早くからあらゆる制限が解除された地域の一つであり、全く異なった文化であった。幸いだったのは米国の大学スポーツ・NCAAは大きくビジネス



PCR検査は毎日実施

化されていることもあり、それにストップをかけることには消極的だったことである。大学スポーツが止まると興行ができなくなるというだけでなく、非常に多くの人が職を失うことになることから、社会がそれをよしとしなかったのである。2020年の3月12日、全米で新型コロナウイルスが拡大し始めた頃、NCAAはリスク回避の観点から一斉に活動休止を全競技スポーツに通達した。最初は1週間あるいは2週間程度の休止となる予定だったが、ニューヨーク市のロックダウンなど予断を許さない状況となっていたところでしばらく様子を見るという措置が取られた。

バレーボールにおいてチーム活動が再開されたのは2020年8月の秋シーズンに入ってからだったが、その間にNCAAはコロナ禍で行う大学スポーツのルール整備を行っていった。チームでは日々の自主トレーニングの様子を動画で送り合ったり、リモートでのミーティングを頻繁に開いて情報交換をして、次のシーズンに備えた。

8月にチーム活動が再開されてからは、PCR検査が毎日、競技スポーツに関わるものの全員に実施された。その実施に当たってはコンディショニングトレーナーが検体の回収を担当した。体調管理の確認には「Healthy Rooster」という専用サイトが設けられそこにあるフォームに毎日スマートフォンから記入した。マスクの着用やソーシャルディスタンス、アルコール消毒なども徹底され、体調不良者が出た際の対応もマニュアル化されていた。実際には感染のリスクが高まっていたため所属カンファレンスは開催されなかったが、NCAAの規定に則って開催できる地域では秋シーズンも試験的に開催された。

フィラデルフィア市内では一時「Black Lives Matter」に関わるデモ活動等で騒がしい時期があったが、一過性のものでそれほど日常生活に影響はなかった。「アジア人ヘイト」の問題もフィラデルフィア市内やエルパソ、大学での遠征時において私が実感したことはなかった。日本や中国、台湾、韓国など東アジアで競技者の多い「9人制バレーボール」もフィラデルフィアにはチームが存在した。やはりアジア系の住民（アジアンコミュニティ）が中心となって9人制を楽しんでおり、知人による紹介制で、アジアにルーツを持つ者限定でチー



コロナ禍でも快く見学を受け入れてくれたStanfordのCourtneyコーチは元米代表選手



この規模の体育館で一回600ドルかかる



大会は駐車場（アスファルト）の上で行う



ムが組まれていた。フィラデルフィアの中心街にもチャイナタウン（中華街）が存在していて、アジア系住民も多く、9人制バレーボールが盛んな地域の一つとなっている。

テンプル大にしてもこの9人制バレーボールチーム（「RÖNIN」）にしても、多様性に富む社会に住む人々は差別問題に対しての理解が厚く、特にコロナ禍にあって非常に心強い存在だった。また日本人としては、メジャーリーグやNBAといった米国プロスポーツで活躍する選手の存在やテニスで活躍する大坂なおみ選手、ゴルフの松山英樹選手は米国内でも知っている人が多く、スポーツ選手による日本人のイメージアップを実感することは多い。

米国での生活は物価が高いと感じることが多く、前述の9人制バレーボールでも公共の体育館の利用料が高い。多くのチームが集まり、複数のコートが必要となる大会では、体育館ではなく、広い駐車場を貸し切ってアスファルトの上にコートを立てて試合をしている。

先に紹介したグラスバレーではネットひもをキャン普用テントのように器具で地面に打ち付ければいいが、アスファルトの上ではそうはいかない。コートとコートの間には自動車が並べられており、車でネットひもを固定していたのである。

このようにアメリカにおけるスポーツの存在は大きく、プロスポーツ選手は地域住民を元気づけ、大学スポーツもそれに準ずるほどビジネス化されているだけでなく教育的要素が強い。ジュニアや一般社会人ではコロナ禍であったとしても、本当に自由な発想でスポーツを楽しんでいる。

VI. 研修成果の活用計画（研修を終えて）

コロナ禍という世界的な非常事態にあって、アメリカという世界を代表する国に身を置いて、特にスポーツの面でNCAAがどのような対応をするのかを当事者として見ることはできたことは非常に有用であった。プロスポーツや大学スポーツだけでなく、多くの人がこういった状況でどうやってスポーツを楽しむか工夫しており、全カテゴリーを通じて感じたのは「どうやってやるか」という、やることを前提とした行動に刺激を



9人制バレーボールチーム「RÖNIN」



近くのスーパーマーケットの様子



Angelsの大谷翔平選手

受けた。その中でもNCAAが管理統制する大学スポーツは、米国におけるスポーツの根幹をなしており、例えば大統領選挙においても学生アスリートをボランティアとして起用することで選挙そのものへのイメージが向上したと思うほど、選挙に来た地域住民と学生との間で「コロナでたいへんだね」「今シーズンも頑張ってるね」などといったやり取りがあった。

日本では良くも悪くも自粛という手段が取られることが多いが、特に大学スポーツは「止まる」傾向にある。それは全体として責任を取る組織が体育会であり、学生だからであろう。学生主体の体育会の良さとプロが管理するNCAAのような統括組織の良さの両方を経験することで見えてきたこともあるので、そうしたことも今後還元できる場があればと思う。

今回詳細を紹介することができなかった「コーチキャンプ」も、一般社会人やジュニアプレーヤーを対象とした日本という「バレー教室」とは趣が異なりぜひ日本にも導入したいものの一つである。このようにすべて米国と同じようにする必要はないが、米国で得た良いものを今後の私のキャリアの中で実現させていくことで本研修のお返しをしたい。

日本では安全上の観点から上記で紹介した「グラスバレー」やアスファルトの上で行う9人制バレーボールをそのまま導入することは難しいだろうが、近年ヨーロッパを中心に注目されている「スノーバレーボール」は、将来の冬季オリンピックの正式種目として普及が図られており、日本でも広まってもらいたいものの一つである。既製品としてのインドアバレーやビーチバレー、あるいはソフトバレーだけでなく、自由な発想でスポーツを楽しむという視点は他のスポーツにおいても広めていきたい。

Ⅶ. その他、海外のスポーツ、スポーツ環境、スポーツ行政等について感想および本制度についての改善意見、今後派遣される研修員が留意すべき事項等。

私の研修先であるテンプル大には畠山氏をはじめ他にも日本人のS&Cコーチや留学生が何人かいて、彼らから得られる情報も多くあった。そのうちの一人は（コロナ禍のため重なっている時期は短かったが）テンプル大バレー部でも学生マネージャーをしており、私のように派遣された研修員だからこそ知ることたくさんあるが、彼らの情報を集約する場があればと感じた。また今後、本研修によって米国に渡られる方には、今回視察することができなかったAthletes Unlimitedの視察をぜひ予定してもらいたい。バレーボールに限らず新たなプロスポーツの形として興味深い存在だと思う。

最後に、本研修をサポートしていただいたJSC、JOCの皆様、ご助言を賜ったJVAの皆様、本研修のきっかけをいただいた東レの菅野氏と早くからご理解を賜った山口部長（当時）、テンプル大のCoach Bake、畠山氏、Coach Ren、選手のみならずその他チーム・大学関係者の皆様、エルパソの皆様をはじめ、本研修で出会ったすべての皆様に感謝申し上げます。

研修員報告〈アイスホッケー 山中 武司〉



令和元年度・長期派遣（アイスホッケー）



I. 研修題目

- カナダアイスホッケーのジュニア世代の育成指導方法を学ぶ。
- 最先端のアイスホッケー戦術の習得。
- 世界のトップ指導者達の指導論、指導法を学ぶ。

II. 研修期間

- 2019年6月26日～2021年6月25日

III. 研修地及び日程

（1）主な研修先

- カナダ オタワ市
KANATA Lasers U-20（カナダJr-A）2019年6月～2020年7月
NEPEAN Raiders U-20（カナダJr-A）2020年8月～2021年6月

（2）受入関係者

- Dave Leger（KANATA Lasers Head Coach）
- IAN Henderson（KANATA Lasers GM）
- PHIL Bergeron（NEPEAN Raiders Head Coach）

（3）研修日程

①通常研修

- U-20のクラブチームにアシスタントコーチとして所属し、年間62試合以上のリーグ戦と日々の練習に参加して現場指導を実践する。
- コーチカンファレンス（オンタリオホッケー協会主催）
シーズンが始まる前に4日間の集中講義に参加して指導資格（HP1）を取得し、その後は定期的に協会が開催するカンファレンスに参加。
- 地元のNHLチーム（オタワセネターズ）の試合を中心に様々なリーグの試合を視察して最先端のアイスホッケー戦術を学ぶ。

②特別研修

（2019年度）

1. U-18男子日本代表候補チームのヨーロッパ遠征に帯同
2. メジャージュニアチームのコーチカンファレンスに参加
個人スキル取得に関しての練習法を学ぶ。

(2019年度)

1. U-18男子日本代表候補チームのヨーロッパ遠征に帯同
2. メジャージュニアチームのコーチカンファレンスに参加
個人スキル取得に関しての練習法を学ぶ。

(2020年度)

3. U-20世界選手権の全試合を視聴して世界ランキング上位国のジュニア世代の
現状を把握する。
大会後にU-20カナダ代表監督によるコーチカンファレンスに参加。
4. NHLコーチ協会主催のコーチカンファレンスに参加
世界のトップ指導者達の指導論、最先端の戦術を学ぶ。



NHLオタワセネターズのリンク



オタワセネターズのリンクでは試合だけではなく練習もファンに公開される



Ⅳ. 研修概要

（１）研修題目の細目

- ・カナダのジュニア世代（U-20以下）の育成指導方法を現場指導しながら学ぶ
- ・最先端のアイスホッケー戦術の習得
- ・世界トップランキング国のジュニア世代の現状を把握する。
- ・世界のトップ指導者達の指導論、指導法を学ぶ。

（２）研修方法

- ・カナダのジュニアチームにアシスタントコーチとして所属し、カナダ人コーチと共に現場指導を実践する。
- ・北米プロアイスホッケーリーグ（NHL）や世界選手権といった様々なレベルの試合を観て最先端の戦術を研究する。
- ・カナダで行われたワールドジュニアを全試合視聴して世界のトップチームの現状を把握し、大会後にカナダ代表の取り組みについて学ぶ。
- ・様々なコーチカンファレンスにZOOM形式で参加し、世界のトップ指導者達の指導論、指導法を学ぶ。

（３）研修報告

①カナダを研修先とした理由

私が研修先にカナダを選んだ理由は3つある。

1つは、カナダとアメリカにはNHL（ナショナルホッケーリーグ）という世界最高峰のリーグがあること。世界最高レベルのリーグであることから、北米には世界のトップ選手、指導者が集まるため、最先端の情報が豊富である。テレビでは毎日のように世界のトップ選手達の試合を見ることができ、スタイルの異なる様々なチームの試合を見ることで常に最先端の情報を得ることができる。

2つ目は、指導者の教育、育成に力を入れていること。カナダでは、NHLでの指導経験のある優秀なコーチ達が、カナダのいたるところでカンファレンスを行っていて、指導法や戦術についてオープンに共有しあう場が多く、指導者が勉強しやすい環境が整っている。

3つ目は、ジュニア育成においてスキル開発に重きを置いていること。カナダでは近年ジュニアの育成に関しては個人スキルを非常に重要視している。ジュニア期においては、8歳から12歳の間がスキルを習得するには最適な時期だと北米のコーチカンファレンスではよく言われていることから、いたるところでスキルコーチやNHL経験者がポジション別の特別レッスンを多く開催している。私も一度だけ、元NHL選手が開催するポジション別のスクールにサポートコーチとして参加させてもらったが、練習方法は細部に拘ったメニューなどが多く、非常に興味深く勉強になった。

②私のチームが所属するJr-Aリーグのカナダでの位置づけ

私のチームが所属するJr-Aリーグというのは、カナダのジュニアでは上から二番目のレベルである。一番上のレベルのリーグCHL（メジャーJrリーグ）は主にプ

ロを目指す選手達を育成するのが目的のセミプロリーグである一方、私の所属する Jr-A リーグは、アメリカの大学（NCAA）や、カナダの大学（U-sports）からのスカラシップ（奨学金制度）を受けて選手を進学させることを目的としたリーグである。選手達がスカラシップを受けることで、免除される金額は大学ごとに違うが、4年間でフルスカラシップ（学費、寮費、スポーツにかかる費用が全額免除）を受けると、平均して2,000万円近く大学から支援を受けることができる。このスカラシップにより、北米のアイスホッケー界では高校を卒業してからの2年間アイスホッケーだけに専念できる環境があり、大学には20歳になってから進む選手が多い。この辺りはアイスホッケーが国技のカナダならではのところと、日本とは大きく違うところである。

CANADA WEST	CANADA ONT	CANADA EAST
CHL WHL	CHL OHL	CHL QMJHL
JR. A AJHL BCHL MJHL SIJHL SJHL	JR. A CCHL NOJHL OJHL	JR. A MJAHL QJHL
JR. B CapJHL	JR. B EOJHL GOJHL LJHL	JR. B CAJAAHL IsJHL LHC LHJSLSJ

カナダのジュニアアイスホッケーの組織構図

WESTはカナダ西部、ONTはオンタリオ州、EASTはケベック州と3つ地区に分かれている

Choose Quick View	CCHL 2019-2020	Division	Conference	League	Overall	Home
Robinson						
		GP	W	L	OTL	PTS
1	x - Carleton Place Canadians	62	49	7	4	104
2	x - Brockville Braves	62	36	16	3	82
3	x - Smiths Falls Bears	62	33	24	3	71
4	x - Pembroke Lumber Kings	62	32	27	2	67
5	x - Kanata Lasers	62	26	28	2	60
6	Kemptville 73's	62	26	31	4	57
Yzerman						
		GP	W	L	OTL	PTS
1	x - Rockland Nationals	62	39	19	1	82
2	x - Hawkesbury Hawks	62	36	24	2	74
3	x - Ottawa Junior Senators	62	34	25	3	71
4	Navan Grads	62	29	32	1	59
5	Cornwall Colts	62	21	35	1	48
6	Nepean Raiders	62	11	48	1	25



KANATA LasersはCANADA ONTのJr-AのCCHL(セントラルカナダホッケーリーグ)に所属し、リーグは12チームから構成されている。

リーグのホームページには大学と合意に至った選手が随時紹介されるようになっている。



事前準備

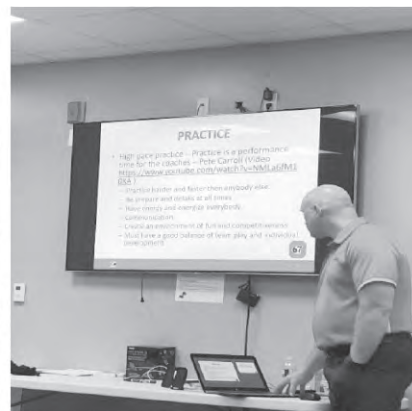
2つ目はPolice Checkという警察での身分証明を受け、犯罪歴がないかなどの確認を受けなければならない。カナダは多くの国籍の人種がいる国であり、その中で子供達が安心してプレーするためにも身分を明らかにすることは必須である。同国では1996年にGraham Jamesという有名なコーチが選手に性的虐待を行っていたことが明るみにな

り、社会的な問題となった過去がある。これを受けカナダアイスホッケー連盟も子供達を守る為に、どんなコーチであってもジュニア世代を指導するものにはRespect in sportとPolice checkは必須であると決めている。

2019 HP1 Schedule

Date	Time	Presentation	Presenter	Materials
Thursday July 4	08:00 - 08:30	HP1 Intro & Overview	Brian Gillam - HEO Coach Development Coordinator	
	08:30 - 10:00	Physical Preparation	Chris Schwarz - Ottawa Senators Strength Coach	Sent
	10:00 - 11:00	Group Time		
	11:00 - 12:00	Team Building	Kim Thompson - Team Canada Mental Performance Coach	Sent
	12:00 - 1:00	LUNCH		
	1:00 - 2:00	Mental Preparation	Kim Thompson - Team Canada Mental Performance Coach	Sent
	2:00 - 3:30	Defensive Team Play	Francis Wather - Assistant Coach, Gatineau Olympic	Sent
	3:30 - 5:00	Offensive Team Play	Marie Duhamel - Assistant Coach, Ottawa 67s	Sent
	5:00 - 6:00	Game and Bench Management	Jason Clarke - Head Coach, Carleton Place Canadians	Sent
Friday July 5	08:00 - 10:00	Planning, Teaching and Evaluating Techniques in	Larry Ruch - HEO/GAC Facilitator	Sent
	10:00 - 11:00	Group Time		
	11:00 - 12:00	Effective Use of Technology	Brian Gillam - HEO Coach Development Coordinator	Sent
	12:00 - 1:00	LUNCH		
	1:00 - 2:30	Group Time		
	2:30 - 3:30	Making Ethical Decisions	Ren Graham - HEO/GAC Facilitator	Sent
	3:30 - 5:00	The Ideal Coach	Ren Graham - HEO/GAC Facilitator	Sent
	5:00 - 6:00	Goalie Coaching	Charlie McTavish - Ottawa 67s Goalie Coach, Hockey Canada Goalie Instructor	Sent
Saturday July 6	08:00 - 09:30	Leadership Techniques in Coaching		
	9:30 - 10:30	Group Time		
	10:30 - 12:00	Planning a Competitive Program	Anders Tourigny - Head Coach, Ottawa 67s	Sent
	12:00 - 1:00	LUNCH		
	1:00 - 2:00	Penalty Kill	Eric Landry - Head Coach, Gatineau Olympiques	Sent
	2:00 - 3:00	Group Time		
	3:00 - 4:30	Advanced Skill Development	Pat Malloy - Head Coach, Pembroke Lumber Kings, Hockey Canada Skills	Sent
	4:30 - 6:00	Group Time		
Sunday July 7	08:00 - 09:00	Player Evaluation and Selection	James Boyd - General Manager, Ottawa 67s	Sent
	09:00 - 10:00	Leading On-ice Sport	Ruggles Pritchard - HEO/GAC Facilitator	Sent
	10:00 - 11:00	Group Time		
	11:00 - 12:00	Power Play	Norm Milroy - Ottawa 67s	Sent
	12:00 - 1:00	LUNCH		
	1:00 - 2:00	Managing Conflict	Larry Ruch - HEO/GAC Facilitator	Sent
	2:00 - 3:30	Group Time		
	3:30 - 4:30	Coaching Pathways	Dave Leger - Head Coach, Kamia Lassers Jr A	Sent
	4:30 - 6:00	Group Time		

HEO (ホッケー・イースタン・オンタリオ) 主催の4日間集中コーチカンファレンス



Police check



Respect in sport

キャンプ前のスタッフミーティング

チームとしてスタートする前に、コーチ陣が全員揃ってミーティングが行われた。監督から昨シーズンの反省と、それを踏まえての今シーズンの進め方、方針が説明された。そしてコーチそれぞれの役割も明確にされた。カナダではシーズンの初めに各コーチの役割を明確にするのが通常である。(※2年目に移籍したチームでも同様にシーズン前に監督からコーチ陣の役割が明確にされた。)

私は主にチームのディフェンス面を担当し、ディフェンスの選手に対するリンク上でのアドバイスはもちろんのこと、他にもビデオ等を用いてフィードバックを行い、シーズンを通して彼らをサポートすることを任された。私は日本でもビデオを使って選手達にフィードバックする指導を得意としていたので、この仕事のおかげで、私は担当するポジションの選手達との信頼関係をいち早く築くことができた。

・練習時

練習ドリルの作成と説明。ディフェンスプレーに関しての説明

・試合前

ディフェンスプレーに関してのレビューや試合に向けた準備

・試合中

ディフェンスの選手達のラインチェンジ(交代) 指示やプレーのアドバイス・フィードバック

私に与えられた役割表には各場面に応じた役割が明確に記載されている。

令和元年度・長期派遣（アイスホッケー）



- 試合後

ビデオを使つての個人へのフィードバック。次の試合のディフェンスプレーに関する準備。

トライアウトキャンプがスタート

9月上旬に開幕するリーグ戦に向け、私たちのチームは8月中旬から2週間のキャンプを行った。カナダのJr-Aリーグには、他地域からもプレーする場所を求めてくる選手が多いため、この2週間はトライアウトキャンプを兼ねてチームを作る時期であった。

チームは2日間の練習と戦術確認のミーティングを行ったのみで、3日目からは同じリーグに所属するチームとのプレシーズンゲームが行われた。日本では割とプレシーズンゲームが始まるまでの練習期間が長く、どのチームも万全の準備をしてからプレシーズンゲームに臨むチームが多いことから、私にとっては正直驚きであった。しかし、北米やヨーロッパでは、数回の練習ですぐに他チームとのプレシーズンゲームをするのは当たり前であった。プレシーズンゲームは失敗をするのが当たり前で、修正しながらチーム作りを行い、開幕戦までにチームとしての形づくりをできれば良いぐらいのスタンスなのである。リーグ戦の試合数が62試合もあるため、前半戦は調子が出なくても、シーズン後半にベストの状態に持っていく、プレーオフにピークを持っていくチームがほとんどである。

私はこのキャンプで、カナダならではの厳しさを目の当たりにした。キャンプがスタートした時点ではチームに30人余りの選手が所属していたが、プレシーズンゲームで活躍できない選手達はチームに残ることができず、毎日誰かがチームを去っていった。中には良いパフォーマンスを発揮できずに、1試合だけで切られてしまう選手もいた。選手達は自分のポジションを掴むため、毎日必死に競争し合う。それが1つ1つのプレーに対する厳しさにつながっているのだと改めて思った。

チームは開幕戦前日までに23名の選手に絞られ、ロースター（登録選手）が確定した。

リーグ戦開幕

9月上旬からリーグ戦が開幕した。リーグ戦は3月上旬までに各チームが計62試合を行い、最終的に上位8チームが3月からのプレーオフに参加できる。リーグ戦は毎月10試合前後が行われるため、1週間のスケジュールは練習が2～3回で、試合が3試合というペースであった。北米では日本に比べ断然試合数が多く、選手に実戦を多く経験させる。試合で失敗や成功を数多く経験させて成長させるのが目的であり、試合が最高の練習場になっている。特にジュニア期には選手達にたくさんの経験をさせなければならない、ということを指導者も理解している。目の前の勝ち負けには常に拘らせるが、コーチ達は育成しながら次のレベルに繋げることを忘れてはいない。

試合間の練習日は、それほど長い時間の練習を行わない。またジュニア選手なので、練習の多くはできるだけスキルアップの要素を取り組んだ練習が多い。チームの戦術に多くの時間を割かないために、選手達の控室には当日の練習ドリルとプランが書かれた用紙が貼り出され、理解が促されるようになっていたと共に、少しでもリンク上での説明する時間の無駄を少なくする工夫がされていた。



KANATA Lasers のホームリンクにはリンクが2面ある。



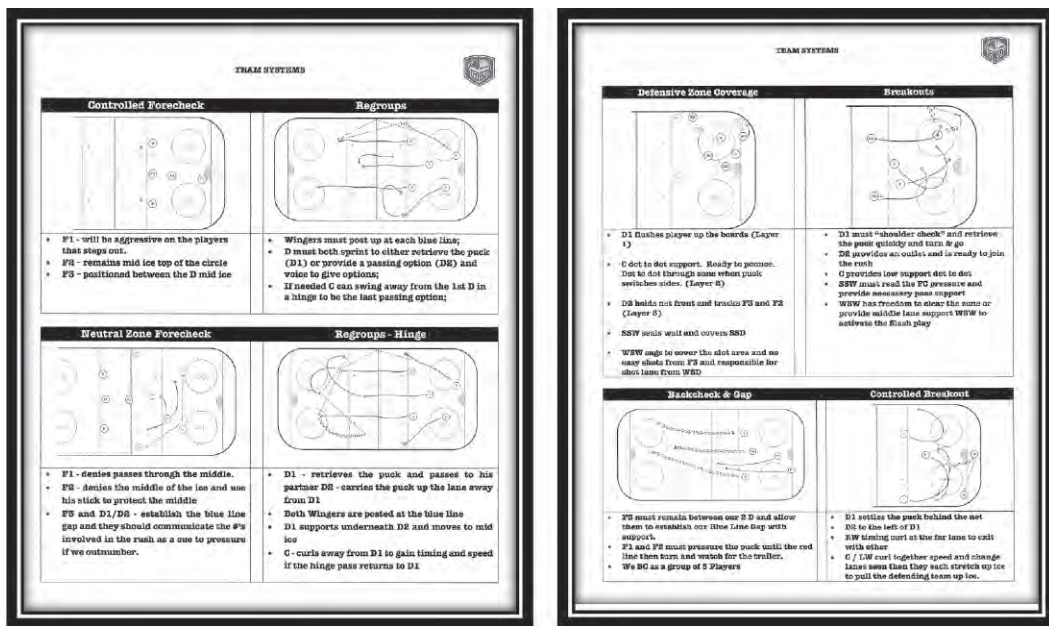
トレーニング施設にはウェイトトレーニング場とスケーティング専用練習場がある。

September 2019						
SUNDAY	MONDAY	TUESDAY	WEDNESDAY	THURSDAY	FRIDAY	SATURDAY
1	2 4-6 pm	3 9-11 pm	4 4-5 pm	5 (7:30) Amateur 900-1000 Point Series	6	7
8 (1:30) Amateur Amateur/Amateur Amateur	9 4-6 pm	10 9-11 pm	11 4-5 pm	12 5-10 pm	13 (1:00) Amateur Amateur/Amateur ETC	14 (1:00) Amateur Amateur/Amateur ETC
15 (11:00) Amateur Amateur/Amateur ETC	16 4-6 pm	17 9-11 pm	18 4-5 pm	19 (7:30) Amateur Amateur/Amateur ETC	20 (7:30) Amateur Amateur/Amateur ETC	21
22	23 4-6 pm	24 9-11 pm	25 4-5 pm	26 (1:30) Amateur Amateur/Amateur ETC	27 (7:30) Amateur Amateur/Amateur ETC	28
29 (1:00) Amateur Amateur/Amateur ETC	30 4-6 pm					

月別スケジュール例

令和元年度・長期派遣（アイスホッケー）





選手控室に事前に貼られた練習メニューには練習ドリルごとの重要なポイントが書かれている。



KANATA Lasersでの練習



アウェー会場での試合



◎特別研修 (2020年2月1日～2月10日)

特別研修-1

U-18男子日本代表のヨーロッパ遠征に参加

私はカナダに渡る前の2019年夏までU-18日本代表の監督を務めていた。そのことから2020年のシーズンは新しいU-18日本代表チームとコーチングスタッフを支えるために、サポートコーチとして日本国外で行われる強化プログラムを手伝い、最終的には世界選手権に帯同することになっていた。私が所属するKANATAのコーチングスタッフも私の立場を理解してくれており、シーズン前にはこの遠征に参加することを了承してくれていた。

2020年4月に世界選手権を控えたU-18日本代表候補チームは2月にハンガリーで行われる国際大会（4 Nation Tournament）に出場し、私もアシスタントコーチとして参加した。大会は日本の他にハンガリー、ポーランド、ウクライナの4か国の総当たり戦で行われた。

大会結果

- 日本vs ポーランド (5-2)
●日本vs ウクライナ (3-6)
○日本vs ハンガリー (4-2)

結果は2勝1敗の2位であった。内容的にはまだまだ本大会までに修正する点が多くあったが、まずは世界選手権を前に体格差がある外国チームと試合を経験することができたことが収穫であった。ほとんどの選手達が海外のナショナルチームと対戦することが初めてであった為、体格差に戸惑う選手、怯んでしまう選手が多く見られた。日本チームは世界では体格で大きく劣るため、攻守において体格差を埋めるための数的優位を数多く作る戦術が必要だと感じた。本番までにいかに新しい戦術をチームに浸透させることができるかという点が課題として残った。しかし、大会を通して日本の強みであるスピードを生かした速攻の攻撃が大きな武器になることも実感でき、改めて課題と成果が明確になった非常に良い海外遠征合宿にすることができた。

※ 4 月に予定されていた世界選手権はコロナウィルスの影響により中止となる。

特別研修-2

メジャージュニアチームのコーチカンファレンスに参加

(個人スキル取得に関しての練習法を学ぶ)

オタワ市に本拠地を置くメジャージュニアチームOttawa 67' Sのコーチカンファレンスに参加した。このカンファレンスはスケートリンクで行われ、スキルコーチが実際に選手達に直接指導するのを指導者達がスタンドから見て、指導法や指導するポイントを学ぶスタイルである。

スキルコーチによる細部に拘った指導が、リンクのパネル映像やマイクを使って紹介されるので、指導者達はスタンドからでも非常にわかりやすく、指導するポイントを理解することができた。終了時には参加者全員に当日の練習メニューなどの説明が入ったUSBメモリーが配られ、コーチ自身が振り返りもできるような配慮もされていた。

カナダでは、いたるところでこのようなコーチカンファレンスが無料で行われており、指導者が常に学びやすい環境を地方のアイスホッケー協会やリーグ側が提供している。さすがアイスホッケー大国カナダならではの取り組みだと感心させられた。

私も早速このような試みを日本の指導者育成に取り入れたいと考えている。



Ottawa 67'Sでのスキルコーチによるカンファレンス

シーズン終盤にコロナウィルスの影響によりシーズンが終了

私の所属するKANATA Lasersは、開幕からの前半戦は非常に良いスタートを切り、8連勝を記録するなどして上位につけて好調を維持した。しかし中盤戦に入り、主力選手の怪我や正GKの不調が響き大きく負け越すなど、一時はプレーオフ進出も危ぶまれた時期もあった。だがリーグ戦終盤には何とか持ち直し、プレーオフの出場権を得ることができた。

ところがプレーオフを翌日に控えたチーム練習の場で、監督から『明日の試合はコロナウィルスの影響で一時中断となる』とアナウンスがされた。コロナウィルスの騒動に関して、北米では3月上旬までは正直よその国の出来事という感覚であり、ニュースでも北米のいくつかのプロスポーツが、万が一のために無観客試合を検討している程度の話であった。しかし、3月11日にNBA選手のコロナ感染がニュースになってからは、事態は一気に変わり、NHLを含む北米のスポーツイベントは全て中断になった。カナダはまだ大丈夫だろうと思っていた人達がほとんどであったが、ホッケーカナダ（カナダアイスホッケー協会）の決断は非常に早かった。早急に会議を開き、カナダのジュニアの活動を全て中止して、そのままシーズンを終了すると発表した。更に数日後にはオンタリオ州が緊急事態宣言を発令したことで、長期にわたる自粛生活となり、私の1年目の研修は思わぬ形で終了してしまった。

2年目の活動（2020年8月～2021年6月）

◎通常研修 NEPEAN Raidersでの指導

2020年シーズン終了後に私が在籍するチームKANATA Lasersはオーナーが変わり、他の地区に本拠地を移すことになった。私は同じJr-Aリーグに所属するNEPEAN RaidersのGMの計らいでNEPEANに移籍することになった。



しかし、カナダではコロナパンデミックの影響から何度もロックダウンと延長を繰り返し、チームとしての活動をオンタリオ州から認められるまでは、かなりの時間を要し、私が新チームでの活動ができたのは9月後半に入ってからであった。とは言っても、チーム全体での活動は認められず、少人数（コーチ1名と選手10人以下）での練習を1時間以内に、できるだけ接触プレーを避けながら実施するといった、厳しい制限の中での練習しか行うことができなかった。

11月以降、リーグ側（CCHL）がオンタリオホッケー協会やオタワ市と協議しながら、特別なルール（接触プレーを限りなく少なくする等）を設けた上で、リーグ戦をスタートさせることを何度か試みた。しかし、2月からカナダのコロナウィルスの感染状況が悪化したことにより、リーグ側は2021シーズンのリーグ戦開催を断念し、シーズン終了を発表した。結局、私の通常研修として予定していた新チームでの現場指導は日々の練習での指導だけで、公式戦でベンチに入って選手達を指導する機会はなく終わってしまった。

◎特別研修

2021シーズンのほとんどが自粛生活の中でしか活動できなかったため、私の2021年の研修は自宅でのデスクワークによる特別研修が主になった。

特別研修－3

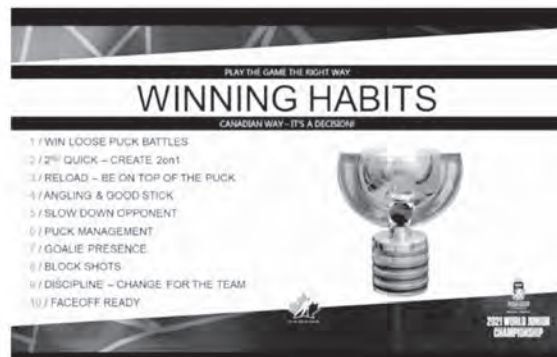
U-20世界選手権視聴とU-20カナダ代表監督によるコーチカンファレンス

2021年のU-20世界選手権は、12月24日から1月6日までカナダのエドモントンで行われ、試合は地上波にて全試合放送された。アイスホッケーの世界では、このU-20選手権（別名：ワールドジュニア）は毎年クリスマスから年始まで行われ、世界中が注目するホッケー界のビッグイベントである。日本ではなかなか全試合を見ることができないので、私にとっては世界のジュニアトップレベルを知る非常に良い機会であった。世界ランキング上位10か国の各チームがどのような戦術を使っているのか、また、日本のU-20がこのレベルまでに迫り着くまでには、何が必要なのかを意識しながら、全試合を視聴して、参考になるシーンの数々をビデオクリップに収め研究することができた。

大会の数週間後には、オンタリオホッケー協会主催のU-20カナダ代表監督Andre Tournigny氏によるコーチカンファレンスがZOOM上にて2日間行われ、私も参加した。

チームカナダの大会までの取り組みや、チームカナダが大切にしていたプレー習慣、大会中に使用していた戦術などが紹介され、非常に勉強になった2日間であった。特に戦術に関するプレゼンテーションはビデオを使っただけの説明であったが、非常にわかりやすく、実際に私も大会中、カナダの戦術に注目していただけに更に理解が深まった。特に印象的であったプレゼンテーションは“Winning Habits”（勝つための習慣）というものであった。カナダはワールドジュニアでは準優勝に終わってしまったが、大会を通して一番完成度の高いチームであった。なぜそこまで完成されたチームが作ることができたのか？がプレゼンテーションを通じて深く知ることができた。一つ一つのプレー習慣には必ず意味があり、全てが実戦に基づいているのがよく分かった。特にジュニア世代では、チーム戦術以前に選手個人に良いプレー習慣を身につけさせて、いかに“強い

個”を作ることが大事であるか、そして、個々が強いチームになれば、戦術の遂行度も上がり、戦術の質を更に高めることができるのだということを学んだ。逆に、いくら良い戦術を使用しても個が弱ければ効果が出ないということも改めて勉強になった。



Andre Tournigny 氏によるコーチカンファレンス

特別研修－４

NHLコーチカンファレンス

北米では2020年の4月以降、コロナウィルスの影響により全てのスポーツ活動が長期にわたり中止となった。アイスホッケー界では指導する機会が失われた指導者達の為に、NHLコーチ協会がWeb上でのコーチカンファレンスを約1年にかけて行ってくれた。自粛生活となり、学ぶ機会を失っていた私にとっては、このカンファレンスが私の研修生活を助けてくれた。

カンファレンスはNHLのコーチ達が毎回違うテーマに沿って、自チームの戦術や、その戦術を習得する練習方法をオープンに紹介してくれる場であった。世界のトップコーチ達が用いる映像は、各チームのビデオコーチが編集する映像であるため、戦術を学ぶには非常に鮮明で分かりやすいものであった。他にもポジション別の練習方法の講義やチームビルディングの講義など内容は多

Presenter	Title	Team	Topic	Date	Time
Ray Leach	Head Coach	Pittsburgh Penguins (PAC)	Assessing, how to identify, teach & practice	January 7	4:00 PM ET
David Ross	Coaching Coach	St. Louis Blues	Goalie IQ: A Training Tool and a Mission	January 11	4:00 PM ET
Mike Yeo	Assistant Coach	Philadelphia Flyers	Preparing Your Skater Teams for Success	January 26	3:00 PM ET
Ken MacGill	Assistant Coach	Columbus Blue Jackets	Building Confidence within a Player's Skating	January 27	2:00 PM ET
Jay Varadero	Head Coach	Tucson Roadrunners (AHL)	Pathways to Pro Hockey: Joke	February 6	3:00 PM ET
Ryan Hake	Assistant Coach	Calgary Flames	The Importance of a Clean Break Out	February 11	4:00 PM ET
Scott Aron	Assistant Coach	Washington Capitals	Cultivating Forwards & Building Habits	February 22	4:00 PM ET
Kevin Pratt	Assistant Coach	Colorado Avalanche	700	March 2	3:00 PM ET

NHL Coachesによるコーチカンファレンスのスケジュール



岐にわたり、私にとっては最高の情報収集の機会となった。

私は日本のジュニア指導者も私と同じように活動ができていないと聞いていたことから、日本の連盟強化スタッフと連携して、私がNHLコーチカンファレンスで学んだ資料を日本語版に編集して、指導者に紹介し情報共有を行った。



NHLのコーチ達による様々なテーマについてのプレゼンテーション

（４）研修成果の活用計画（研修を終えて）

私は帰国後、男子ナショナルチームのアシスタントコーチとして活動する。これからは日本のアイスホッケーの強化の中心となり、日本代表の強化はもちろん、ジュニアレベルの育成指導、並びに指導者の育成にも今回の研修で学んだいくつかの内容を活かしていきたい。

・選手と指導者の関係性

まずは私自身の指導者としての基本的な部分で、選手との信頼関係の築き方である。私の今までの日本での指導方法は、指導者からの選手への一方通行の古い日本的な指導であったと、今となっては反省している。私がカナダでジュニア指導に携わり感じたことは、コーチは選手が自ら学ぶのを助ける役割であり、最終的には主体的に自ら行動できる選手を育てようとしているのがよく分かった。私も毎日のように選手達とビデオを使つてのフィードバックを行い、考え方の違う多様な国籍の選手達や、自己主張できる選手達と接する中で、自身の指導スタイルもいつのまにか変わっていった。常に選手の意見、個性を尊重しながら、選手がなりたいたい姿に導けるコーチでありたいという姿勢を今後も忘れずにいたい。

・最先端のアイスホッケー戦術、指導論を代表チームに活用する。

多くのコーチカンファレンスに参加し、また様々なレベルの試合を視聴できたことで、世界トップレベルのアイスホッケー戦術を学ぶことができた。しかし、これらの戦術は北米や欧州の体格が大きいチームに合った戦術でもあるので、全てが日本人に合うとは限らない。今後は日本人のサイズや特徴に合った戦術も選びながら、最終的にはオリジナルの戦術を作成し、世界の強豪と渡り合える代表チームを作るのに役立てたい。

・指導者の養成

日本では指導者が勉強できる環境がまだまだ十分ではない。ジュニア指導において我々連盟強化スタッフが選手達を直接指導できる期間は限られており、選手達は普段、学校やクラブチームでの練習が大半を占める。そこで、やはり鍵になるのが普段、選手達を指導している指導者である。指導者たちの知識を上げ、ナショナルスタンダードを知ること、指導者の質を上げることが最も重要だと考える。

実際にカナダでは選手の育成と同じくらい指導者育成も重要だと考えられている。私がカナダで学んだような“指導者がいつでも学べる環境”を日本でもいち早く作らなければならない。先ずはできることとして、私がカナダから発信したような指導者の情報共有会を継続すること。そして、後にはスケート会場でのスキルレッスンを指導者が勉強できる企画も早期に実現させ、徐々に規模を広げていきたいと考えている。

(5) その他、海外のスポーツ、スポーツ環境、スポーツ行政等について感想

・ジュニア期に経験する試合数の違い

私がカナダでジュニア育成に携わり感じたカナダと日本の大きな違いは、選手がジュニア期に経験する試合数の違いである。カナダではジュニア期には多くの試合を経験させる。試合が一番の練習であり、成功も失敗もなるべく試合で経験させ、そこから学ばせるため、コーチ達は長いスパンで選手達を見守り、成長させることを目的としている。したがって、ほとんどの大会はリーグ戦で行われ、日本のように負けたら終わりのトーナメント形式の大会はなく、常に負けても次にチャレンジできる機会が均等にある。一方、日本では未だに、どのスポーツでもジュニアの全国大会などはトーナメント方式で行われていることが多い。(競技団体によっては既に改善しているスポーツ団体もあるが) 負けたら終わりとなるので、どうしても目先の勝利に目が向いて勝利至上主義に陥ってしまい、選手を長いスパンで成長させるといった視点での育成には繋がらないのが現状である。

実際に日本とカナダのジュニアの同世代の選手達の一年間の試合数を比較すると以下のようにになっている。

日 本 (U-18)	約25 ～ 30試合	(U-20)	約30試合
カナダ (U-18)	約50試合	(U-20)	約60 ～ 70試合

日本の試合数は上位チームが最大で行う試合数であり、下位チームになると更に試合数は少なくなる。一方、カナダの試合数はリーグ戦の規定試合数であり、下位チームでもその数は変わらない。また上位チームになるとプレーオフの試合が加算されるので、更に試合数が増えることになる。単純比較しても日本の試合数はカナダの半分以下である。

現状では日本のジュニアスポーツは高体連や中体連の枠組みで、学校単位の大会が行われているが、今後少子化が進み、単一校でチームが作りづらくなる状況を見ると、日本がスポーツをより発展させていくためには、競技の構造改革が必要である。将来的な理想は、地域ごとのクラブチームでのスポーツ活動であると私は考える。日

研修員報告〈フェンシング 松岡 慧〉



令和元年度・長期派遣（フェンシング）



I. 研修題目

- ① フェンシング競技指導に必要な技術及び技能の習得
シニア・ジュニア・カデカテゴリー毎のコーチング技能及びマネジメントスキル
- ② フェンシング強豪国の育成及び強化システムの調査・研修

II. 研修期間

令和元年 8 月 20 日～令和 2 年 3 月 19 日

III. 研修地及び日程

（1）主な研修先

フランス／パリ BLR 92

フランス／パリ U20男子フルーレフランス代表地方強化拠点（以下「CREPS」と言う）

（2）受入関係者

Julien Blanchet（BLR92代表者）

Yann Detienne（BLR92ヘッドコーチ、チュニジア代表選手パーソナルコーチ）

Geoffroy Labourier（BLR92アシスタントコーチ兼マネージャー）

Rémi Morlot（BLR92アシスタントコーチ、チュニジア代表選手パーソナルコーチ）

Guillaume Pitta（BLR92アシスタントコーチ）

Noël Chirac（BLR92アシスタントコーチ）

Amir（U20男子フルーレフランス代表コーチ）

（3）研修日程

①通常研修

- 1）BLR92にて 9 歳～シニア選手の指導及び国内大会の帯同・視察
- 2）CREPSにてU20代表選手の練習指導及び指導研修

②特別研修

- 1）U20, 17日本代表選手のサポート
- 2）シニア日本代表チームフランス合宿・大会のサポート

（特別研修等日程一覧）

2019年

8/26～8/31 フランス／パリ U15 summer camp

- 9/28～9/29 フランス／パリ 大会帯同 (Tournoi Anthony)
- 10/ 5～10/ 6 フランス／バロンス 大会帯同 (Tournoi Valence)
- 10/12～10/13 フランス／パリ 大会帯同 (Tournoi Paris)
- 10/19～10/20 フランス／パリ 大会帯同 (Tournoi Muret)
- 10/21～10/25 フランス／パリ U15 autumn camp
- 11/16～11/17 フランス／パリ 大会帯同 (Tournoi Hénin-Beaumont)
- 11/19 フランス／パリ シニア女子フルーレ日本代表合宿指導 (INSEP)
- 11/23 フランス／パリ 大会帯同 (Tournoi Paris)
- 11/24～12/ 2 フランス／エクサンプロバンス U17男女フルーレ日本代表合宿指導及び大会帯同 (Tournoi Cabries)
- 12/ 5～12/11 フランス／パリ シニア女子フルーレ日本代表合宿指導 (INSEP)
- 12/12 フランス／パリ 指導者講習会 (BLR92)
- 12/13～12/15 フランス／パリ シニア女子フルーレ日本代表大会帯同 (WC : St-Maur)
- 12/30～12/31 フランス／パリ U15年末年始合宿、シニア選手指導
- 2020年
- 1/ 2～1/ 3 フランス／パリ U15年末年始合宿、シニア選手指導
- 1/ 4～1/ 5 フランス／クレモンフェランド U17男女フルーレ大会帯同 (Tournoi Clermont-Ferrand)
- 1/ 7～1/12 フランス／パリ シニア男子フルーレ日本代表合宿指導及び大会帯同 (WC : CIP)
- 1/13～1/17 フランス／エクサンプロバンス U20男子フルーレ日本代表合宿指導及び大会帯同 (JWC : Aix-en-provence)
- 1/24～1/26 フランス／パリ シニア男女フルーレ大会帯同 (Challenge BLR)
- 2/ 1～2/ 2 フランス／パリ U17, 15男女フルーレ大会帯同 (Marathon fleuret)
- 2/10～2/11 フランス／パリ U20男子フルーレフランス代表合宿指導 (CREPS)、中国代表合同合宿での女子フルーレ日本代表選手の指導 (BLR92)
- 2/12～2/14 フランス／パリ シニア男子フルーレ日本代表合宿指導 (INSEP)
- 2/15～2/16 フランス／ボルドー シニア男女フルーレ大会帯同及び女子フルーレ日本代表選手サポート (Tournoi Bordeaux)
- 2/17～2/21 フランス／パリ U15 winter camp
- 2/29～3/ 1 フランス／パリ U17男女フルーレ大会帯同 (Tournoi Paris)
- 3/ 8 フランス／パリ U20男女フルーレ大会帯同 (Tournoi Paris)
- 3/15 フランス／パリ シニア男女フルーレ大会帯同 (Tournoi Paris)



Ⅳ. 研修概要

（１）研修題目の細目

- ①年代別の育成及び強化システム
- ②強豪国の強化システムの調査
- ③フェンシング競技の普及等の調査

（２）研修方法

- ①研修拠点のクラブチーム「BLR92」において９歳から社会人カテゴリーへの指導実践
- ②「CREPS」において定期的に練習に参加し、U20代表選手の指導実践、WC後に大会のフィードバック及びディスカッション

（３）研修報告

日本は、北京オリンピックでの男子フルーレ個人種目銀メダル獲得、ロンドンオリンピック同種別での団体銀メダル獲得を境に国際大会での著しい入賞成績から遠のいている現状がある。また、未だ競技人口が少ないことも日本のフェンシング競技の発展には大きな課題として挙げられる。フェンシング競技発祥とされているヨーロッパは伝統を継承・昇華させながら現在まで「強豪国」として世界にその存在を示している。その中でもフランスは、ジュニア並びにシニアカテゴリーの世界ランキングにおいて常に上位に位置し、国の一貫指導体制が整っているように感じる。また、国内でもメジャースポーツとして認知度が高いことからスポーツの価値が高いように感じる。そこで、本研修では、今後の日本のフェンシング競技発展のために必要だと考えていることについて以下３点にまとめ報告する。

①年代別の育成及び強化システム（BLR92）

１）練習環境

BLR92はフルーレ種目に特化したクラブチームで、フランスでも２番目に会員数が多い（約500人）。専用のクラブハウスには、埋め込み式のフェンシングのコート（以下「ピスト」と言う）が10ピストあり、日本には専用の練習施設が少ないことや、地域の体育館を他競技団体と共有して練習しなくてはならないことから比較してもBLR92は恵まれた環境で練習が行われていた。

クラブには、５歳から13歳までの「École d'escrime」、14歳から社会人まで競技として練習をする「Compétitions/Elite」、14歳から社会人まで趣味で練習する「Loisirs」の大きく３つのグループがあり、基本的に平日の午後からカテゴリー毎に時間が分けられ練習が行われている。日本のクラブでは、全カテゴリーの選手が同じ時間に練習することが多く、このことから各カテゴリーに特化した指導が難しいことや、限られたスペースや練習機材の不足などの問題が生じてしまう。

クラブには、ナショナルチームで指導実績のあるコーチや現役のチュニジア代表選手の指導をしているコーチなど計５名が在籍している他、クラブ専属の道具の整備士が毎日練習に来て選手たちのサポートをしてくれる環境には驚いた。

2) 練習内容

「École d'escrime」コースの子供達でもさらに年代毎に練習時間が分けられ、それぞれに必要な技能の習得を目指し練習が行われる。共通していたのは「フェンシングを楽しむ」という気持ちを育むような指導を心掛けているように感じ、指導者の言葉掛けや行動は非常に勉強になった。また、挨拶や集団行動にも注意しており、練習に来たときや帰る際には必ず各指導者の下へ挨拶に行くよう指導したり、始めたての子供には試合前の挨拶「Saluer」の礼儀作法から指導を行っていた。これらの影響は、フェンシングを競技として選択した際に指導者との信頼関係の形成にも繋がっていると感じた。

各カテゴリーの練習内容について以下にまとめる。

Satoshi's Planning 2019-2020

	LUNDI	MARDI	MERCREDI	JEUDI	VENREDI	SAMEDI
9h30						Débutants M7 M9
10h						M9 Confirmés
10h30						Bata
11h						
11h30						
12h						
12h30						
13h						
13h30						
14h			Débutants M9-2 M11			
15h30			M9 Confirmés			
15h			M11 confirmés			
15h30						
16h						
16h30						
17h	M11 confirmés	M9 Confirmés	M13 compétition	M11 confirmés	Débutants M9-2 M11	
17h30						
18h	M15 M17 compétition	M15 M17 compétition	M17-M20 Séniors Elite	M15 M17 compétition	M13 compétition	
18h30			Autos Loisirs			
19h						
19h30						
20h		M17 M20 Senior Elite		M17 M20 Senior Elite		
20h30						
21h						
21h30						
22h						
22h30						

École d'escrime
 Groupes Compétitions
 Groupes Loisirs

【Débutants M 9-2, M11: 11歳以下の初心者コース】

1 h / 週 2 日

W-UP (鬼ごっこ等フェンシング要素のない運動)

体づくり運動 (ラダーやマーカーを使った簡易的な動き)

フェンシング (基礎的なフットワークと非電気ファイティング)

※基本的に軽い運動が中心で、後半の20～30分のみフェンシングの指導を行う。
試合前の挨拶の仕方や剣の握り方、構え方やマルシェ・ロンペ・ファントなどの基礎的な動作の指導を行い、徐々にフェンシングへの興味を持たせる意図を持って指導する。



【M9：9歳以下コース】

1h／週2日

W-UP（フェンシング要素の少ない運動や道具を使った運動）

体づくり運動（ラダーやマーカーを使ったフェンシング要素を取り入れた基礎的な動き）

フェンシング（基礎的なフットワークと非電気ファイティングがメイン、電気ファイティング頻度少）

※全体的な練習内容にフェンシング要素が入ってくる。例えばW-UPの鬼ごっこでは、タッチされた人はその場でファント動作のみ動くことができ鬼の手助けをするといった簡単なものや、ラダーやマーカーを使った運動にもマルシェやロンペといった基礎的な動作が盛り込まれていく。日本との大きな違いは、このカテゴリーから習得スキルの課題として「前後のフットワーク動作の大きさ」についての指導が重要視される。歩幅の大きさは状態のバランスにも影響する重要な要素となり、フットワークや非電気ファイティングでの課題を行う中で、マーカーを使って子供達に正しい歩幅や足の運び方を指導する。日本と比べると教える段階が少し早いように感じることや、道具を使って基礎的なフットワーク動作の指導をするところは非常に少ないように思う。これらの影響も関係してか、日本人選手は歩幅への注意がフランス人選手に比べて低いように感じ、マルシェ動作をする時に後ろ足を引きずるといった問題の原因に繋がっているのではないかと感じた。

【M11：11歳以下コース】

1h／週2日

W-UP（フェンシング要素が入った運動や道具を使った運動）

体づくり運動（ラダーやマーカーを使ったフェンシング要素を取り入れた動き）

フェンシング（基礎的なフットワークとディガー・ジェ等のフェイント動作の練習、非電気ファイティングがメイン、電気ファイティングの頻度中）

※電気ファイティングの頻度が増え始める年代では、体づくり運動やフットワークで取り入れる動作のスピードが早くなってくる。さらに、「自分と相手との距離



感を養う」ことに習得スキルの課題が挙げられ、自分か相手の片方のみ前後に動かして、攻撃側が届くと感じた時にファント動作で突きにいかせたり、相手の攻撃が届くギリギリの距離までマルシェで前進させたりゲーム要素を取り入れながら子供達が距離感を養えるように指導をしていた。ディガージェやユヌ・ドゥなどのフェイント動作は集団レッスンの形式で行い、フレンチグリップを使ってフィンガリングの指導も行っていた。「Compétitions/Elite」コースに上がると練習時間が増え、サーキットトレーニングや本格的なフットワーク指導、指導者とのマンツーマンによるレッスン指導が始まる。



【M13：13歳以下コース】

1.5h／週2日

W-UP（道具を使った運動）

体づくり運動（体幹トレーニング、サーキットトレーニング）

フェンシング（複合的なフットワーク指導やレッスン指導、電気ファイティング）

※この段階から少しずつトレーニングが始まってくる。メインで行っていたメニューは多くの種類の運動を短時間でこなしていくサーキットトレーニング。フットワークでは「スピードの緩急」に焦点を当てて指導することが多かった。練習の後半では必ず電気ファイティングが行われるが、日本と違ったのは課題を設けて実施することが多く、今までに習得してきたスキルについての復習の内容が多かった。ファイティングの時間と並行して1人の選手に対して10分間のレッスン指導をし、全選手がバランスよく回数を受けられるようにその都度レッスン指導の記録も取られていた。このカテゴリーから、フレンチグリップからピストル型のビスコンチやベルギアングリップに持ち手を変えて練習するようになる。

【M15M17：17歳以下コース】

2h／週3日

W-UP（各自練習前に実施）

体づくり運動（体幹トレーニング、サーキットトレーニング）

フェンシング（複合的なフットワーク指導やレッスン指導、電気ファイティング）

※自重でのトレーニングの量が増え始める。フットワークや課題を設けた電気ファイティングには「戦術」の要素が加わってくる。攻撃面では「緩急をつけたアタック」、防御面では「セカンドインテンションでのパラードリポスト、コントロールアタック」といった内容が盛り込まれていた。レッスン指導の時間も1人につき15分から20分と長くなり、戦術面だけではなくフェイント動作を伴う攻撃の指導を行うようになる。



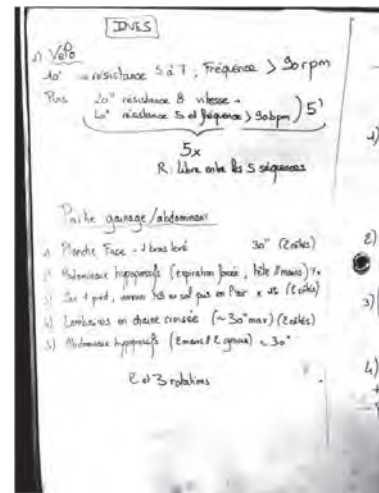
【M17 M20 Senior Elite：20歳以下とシニア・エリートコース】

2.5h / 週3日

W-UP（各自練習前に実施）

フェンシング（フットワーク指導やレッスン指導、電気ファイティング）

※指導者が様子を見て課題ファイティングや全体にフットワークの指導をすることもあるが、このコースのみ他コースとは違い、選手自身が練習メニューを考えて練習を行う。ファイティングは試合形式で行われることが多く、目標としている大会に向けて、自分の課題について指導者と話し合い、フットワーク指導を受けたりレッスン指導を受けたりする。また、強化指定選手が決められており、当該選手は時間外でプライベートレッスンも受けられるようになる。



3) 育成システム

「École d'escrime」から習い事として始めた子供たちは、14歳になった段階で趣味としてフェンシングを続ける「Loisirs」に進むか、競技としてフェンシングを続けていく「Compétitions/Elite」に進むかを選択できる。フランスの1つの育成システムの特徴ともいえるだろう。

11歳以下までは、フレンチグリップで練習が行われ年齢によって剣の長さも適したものを使用することから成長段階に合った育成ができているように感じた。このことにより「剣操作に必要な指使い及び正しいガードポジションの意識付け」が比較的日本人選手に比べて早いように思う。さらに、同カテゴリーの大会でもフレンチグリップのみ使用が決められており、選手は同じ条件下で試合をすることができるとも日本にはない育成の仕掛けになっている。

また、「arbitrage」という15歳以下の年齢でも受けることができる審判の試験があり、筆記試験に合格した選手は13歳以下の大会で実践経験を積んでいくことで、競技規則や得点に関わる「優先権」の理解を深めることができる。1つの大会が終わると記録冊子に実習を受けた印と大会運営側から評価を受け、規定回数をこなすまでに選手は実践とフィードバックを繰り返す。このことは、単に審判育成に留まらず、選手の練習の水準を高めることにも繋がること



が考えられ、育成システムとして日本でも取り入れるべき点だと参考になった。

フランスでは、2ヶ月に1度、2週間のプチバカンスがある（日本でいう春休みのようなもの）。クラブではこの短期休暇を利用して、15歳以下の一週間の合宿が開催され、子供たちを集中的に指導できる機会がある。これも日本の文化として取り入れることは難しいが記録させていただく。

②強豪国の強化システムの調査（CREPS）

1）練習環境

フランスにはシニア代表選手の強化拠点「INSEP」の他に各カテゴリー6種目の強化拠点「CREPS」がサテライト式で地方に配置されている。男子フルーレの場合は「chatenay-malabry」、女子フルーレの場合は「wattignies」。男子フルーレのCREPSは比較的BLR92からも近かったことから週2日、1日4人の選手のレッスン指導をする機会をいただくことができた。U17のランキング上位選手からメインのU20ランキング上位選手まで合わせて約20人で構成されており、選手たちは施設内に下宿または、近くの家から当該施設に通っていた。また、栄養面でのサポートをこの年代から受けられることや、朝や授業の空き時間を利用して指導者からレッスン指導を受けられることから恵まれた環境で代表選手の育成・強化が図れていると感じた。在籍している選手たちのレベルも非常に高く、ユースオリンピック優勝者やU20世界ランキング上位選手など、実践指導から多くのことを学ばせてもらった。

2）U20フランス代表選手と日本代表選手の比較

身体的特徴として、小柄な体格が多い日本人に対して身長が高くフィジカル面で見てもガッチリとした体格をしている選手が多かった。オリンピックで銀メダルを獲得した太田雄貴前会長は小柄ながら相手の懐に潜るためのスピードや手数を増やしたフェンシングスタイルが持ち味だったが、フランス人選手は大きな体格から力強い攻撃と遠い距離から攻撃を仕掛けられるバネの強さが特徴的だと考える。また、1月の日仏合同合宿の際に、大会を想定した朝8時半から11時までの「5本連取の課題ファイティング」において日本人選手は後半高いパフォーマンスを維持することが難しかったが、フランス人選手は最後まで集中力が切れず高いパフォーマンスを維持できていた。このことから、スタミナ面で同カテゴリーの日本人選手と比較しても非常に優れていると感じた。技術的特徴に関しては、細かいフェイント動作など小手先の技術やフットワークのレパートリー、スピードは日本人選手の方が優れているように感じたが、フランス人選手は日本人選手が苦手としている「ノーモーション攻撃」の技術に長けていた。これは、身長の低い日本人選手が攻撃を仕掛ける際にスピードを必要とする傾向が多いことから、最終動作前の後ろ足の引き付けを早くしてしまうことでモーションがついてしまうことが推測される。体格の大きいフランス人選手は日本人選手が1歩加速しなくてはいけない場面で、1歩分遠い距離からバネのあるファントで相手に攻撃を決めることができることからモーションがつかないことに繋がっているのではないかと考えることができた。レッスン指



導の際にも、日本人選手と同じ距離感で指導してしまうと「いつもより近く距離を感じる」「最終動作前に1歩足すことでアタックが窮屈に感じる」といった意見がレッスン指導後のフィードバックで明らかになった。私自身、フランス人にどんな指導をすればいいか日々考えていたが、研修期間の半年間はフランス人選手が得意としない「細かいフットワークとそのタイミング」について焦点を当てて指導を実践していた。また、フランス人選手の力強い突きを可能にしている技術として「呼吸法」がある。フランス人選手は攻撃時に息を瞬間細く強く吐き出して攻撃することを意識していることがわかり日本人選手を指導する際には参考になると感じた。

3) U20フランス及び日本代表選手の課題

この半年間の研修期間で特に勉強になったのは、U20男子フルーレヘッドコーチAmier氏との定期的なディスカッションである。日頃の指導内容についてフィードバックするだけでなく、国際大会の度に両国選手の課題抽出について話し合ったり、課題へのアプローチについて指導者間でレッスン指導を取り合ったりしながら確認をすることもあった。その際の内容を以下2点にまとめる。

▶日本人から見たフランス人の課題

スピードのある選手に対して下がり遅れてアタックをもらってしまう。原因として、不用意なプレパレーション（準備動作）から相手に対して反応が遅れ、後ろに大きく下がって攻撃を回避しようとする傾向があることが考えられる。しかしながら、この行動はかえって相手にスピードを活かせる助走距離を与えてしまうことから、望んでいた結果に結びつかないケースが多く見られた。そこで、課題への共通アプローチとして「相手が加速してきても、慌てて下がらずあえてその場や前で処理するディフェンス」に焦点を当てて指導を行なった。また、「ノーモーションのサンプルアタック」が長所として挙げられることから、コンポーゼアタックの練習ではなく、「ステップのレパトリーと精度を上げる」ことで長所をより磨いていこうと考え、レッスン以外にも選手へのフットワーク指導を行った。フランス人選手へのフットワーク指導は、体格が大きく日本人よりも体の使い方が硬いことから非常に難しかった事を覚えている。

▶フランス人から見た日本人選手の課題

Amir氏から見た日本人選手の課題は大きく3つあるという。1つ目は「コンポーゼやステップを入れたアタックが多い」ことである。私自身日本人選手を指導する中で、体格差のある外国人選手にアタックを成功させるために日本人選手の長所であるフットワークのスピードと細かいフェイント動作を活かして指導することが多かった。しかしながら、話していく中で日本人選手が長所としている2点が逆に最終動作前に相手に情報を与えてしまうことに繋がり、相手にディフェンスをしやすくさせる原因になっていることに気付いた。また、2つ目の「ルミース（攻撃後の反撃）が多い」という課題に関しても、ステップアタックによる加速から攻撃後にリセットすることが難しく、ルミースを仕掛けることによって相手の懐に潜れることができ、選手はチャンスだと瞬時に判断してしまう傾向があると考えられる。この2つの課題に対しては「サンプルアタックと、ステップを使わないコン

ポーゼアタック」の習得が重要だと考え、結果的にスピードを制御できることから2つ目の課題にもアプローチができる。最後に「セカンドインテンションが多い」ことが挙げられた。日本では、攻撃の優先権がないコントロールアタックをすることがよくない事だという指導が古くから根強くあるように感じる。私自身選手の頃にコントロールアタックをすると指導者に怒られ、もっと足を使って後ろに下がりなさいと指導されることが多かった。このことからセカンドインテンションで1つ目にコントロールアタックのフェイント、2つ目にパラード・リポストを狙っても、そもそも相手にコントロールアタックの脅威が伝わっていないのでこの技の精度は低いことがわかる。また、相手の攻撃に対して足を使って後ろに下がることばかりしていると、相手の攻撃を意図して引き出すことができなくなることも懸念される。そこで、日本人選手を指導する際に「ファーストインテンションでのコントロールアタックの指導」が重要だと考えられる。コントロールアタックが成功する正しい距離やタイミングを覚えることで、セカンドインテンションに必要なフェイントの向上にも繋がることが考えられる。

4) CREPSでの気づき

Amir氏とのレッスンで、日本では経験してこなかったことや新しい発想について気づきを得ることができたので、以下にまとめる。

▶フランス人選手は剣が強く、日本人選手の剣が競り負けてしまう

アームワークで、「クヴェール」しながら突く指導を取り入れていた。「空いていないスペースを強引に突きにいく」という発想は日本では珍しいように感じ、日本人選手は「偶然」相手の剣に自分の剣が邪魔されたように感じているが、このことからフランス人選手は意図して相手の剣を自分の剣で邪魔することができているのだと知ることができた。指導者側の取り方として、選手の剣に重ねたポジションで構え、ストレート・ディガー・クヴェールを選手自身に選択させて突かせる。

▶プレッセを使ったフェイント

プレッセ（相手の剣を押す接触動作）を伴ったサンプル（ディガー・クヴェール）とコンポーゼ（ユヌ・ドゥ）には正しいタイミングがあり、日本では同じようなレッスン指導を見ることがなかったことから興味を持った。指導方法は、選手が相手の剣を押し込む動作を「1」、相手の剣に押し戻される動作を「2」とし、最終的にサンプルを選択する際には「2」のタイミングまで相手の剣を引き込ませてからサンプルで突かせ、コンポーゼを選択した際には瞬間的に「1」のタイミングですぐコンポーゼに移行させることが最終的に選択したフェイント動作を伴う攻撃が決まる正しいタイミングだと教わった。相手の剣を押してすぐにサンプルをしてしまうと突く直前に相手の防御してくる剣に避けられてしまうことが実際に体験してみても体感し、理解することができた。

▶不規則なタイミングのフェイント

日本では基本的にディフェンス時に用いるフェイント動作を行う際に「前脚を出すタイミングで剣を持った腕でフェイントを出す」。この場合、「実際のコントロールアタックだと相手に思わせる」狙いがあるので正しいタイミングのフェイント動作に



はなっている。しかし、同じタイミングとフェイントの種類だと相手からすると脅威に感じず、逆にフェイントを出すタイミングで隙を与えてしまうことに繋がると指摘を受けた。Amir氏のレッスンでは、剣でフェイントを出してから下がらせたり、相手にタイミングを図られないよう工夫を加えていた。

③フェンシング競技の普及等の調査

日本ではマイナースポーツとされているフェンシング競技だが、フランスではメジャースポーツの1つとして位置付けられている。日本のフェンシング競技人口は6,000人、太田雄貴前会長の目標では5万人の競技人口にすることを目標設定にしていることは、競技力向上の他に本国でのフェンシング競技のスポーツの価値を上げることが推測される。残念ながら、新型コロナウイルスの影響により半年間の研修期間では本問題を調査することはできなかったが、研修期間に感じた競技普及についてフランスと日本の相違点を報告する。

1) フランス国内大会

フランスでは毎週末何かしらのカテゴリーの大会が開催される。これはフランスの国技でもあるフェンシングの大会が行われることにより、地域住民の関心や応援を得ることにも繋がると考えられる。

2) フェンシングの分岐選択

日本では、ジュニア期に始める選手はフランスに比べると決して多くはない。高校の部活動から競技をスタートする選手も2年半という短い期間で成績を残さなければ、大学に進み競技を続けることが難しくなる。大学卒業後競技を続ける道は少なく、ここを分岐点として競技から離れる人が大半であろう。しかし、フランスでは各クラブに競技者コースと趣味コースが設けられており、フェンシングを「好きな時に楽しむツール」として続けることができるのはフェンシング人口の減少を抑えることに繋がっていると感じる。また、フランス各所にはクラブが点在し、各種目に特化して運営していることやクラブ主催の国内・国際大会を開くことが競技の普及や人口の拡充の要因として考えられる。

3) 地域貢献活動

フランスフェンシング協会の主催する「escrime senior EHPAD」という取り組みに研修先であるBLR92が協力していた。「EHPAD」とは、自立できない高齢者が住む施設の事を指し、日本では高齢者施設にあたる。BLR92から2名の指導者が施設に出向いて、高齢者にフェンシングの体験をしてもらい、「フェンシングを始めるのに年齢は関係ない」という国とフェンシングの密接な関係を知り、フェンシングが生涯スポーツとして成り立つ仕組みを知ること



ができた。この他にも、障害者支援施設での体験教室も行われていた。

(4) 研修成果の活用計画（研修を終えて）

半年という予定よりも短い研修期間となってしまったが、その中でも多くの指導者と言葉や剣を交わし、フランスのフェンシングについて学び、知ることができたと感じている。今後指導者としてはU20のカテゴリーからシニアへと指導対象が変わるが、「選手に主体性を持たせること」に気をつけて指導していきたい。また、フランスの考え方や技術が日本人選手に適しているかは、体格差や特性により異なると考えている。今後、指導をしていく中でフランスで学んだ事を活かしながら「より日本人にあった指の技術や戦術、指導方法」を見出せるよう日々の指導に努めていきたい。

そして、日本のフェンシング競技をより発展させるために「選手の育成・強化システム」「指導者養成システム」について特に力を注ぎたいと考えている。

(5) その他

今回の研修では、VISAの取得について日本オリンピック委員会のご指摘やご協力もいただきスムーズに準備することができた。私の場合、渡仏後にいくつか問題が生じ、家を決めるまでに2ヶ月ほどかかってしまったことや現地銀行口座の開設、保険等受けるための手続きなど1人では難しく、前もって調べ準備する必要があったと感じた。

しかしながら、クラブのコーチや語学学校の方々の協力があり、研修をスムーズに進めることができたと感じている。貴重な経験をさせていただけたことに、日本スポーツ振興センター、日本オリンピック委員会、日本フェンシング協会、関わっていただいた全ての方々にこの場を借りて感謝の気持ちをお伝えさせていただきます。本当にありがとうございました。今後の、日本のスポーツ発展のために尽力していきたいと思ひ、自己研鑽に励んでいきたいと思っております。

研修員報告〈トライアスロン 福井 英郎〉



令和元年度・長期派遣（トライアスロン）



I. 研修題目

フランスにおけるトライアスロン競技の仕組みと環境を学ぶ。
2024年パリオリンピックに向けた準備や若手育成・強化方法を視察し学ぶ。

II. 研修期間

2019年6月28日～2021年9月30日（新型コロナウイルスによる中断期間含む）

III. 研修地及び日程

（1）主な研修先

Orléans CRE
INSEP (Paris)
CREPS PACA
CREPS Montpellier
CREPS Font-Romeu

（2）受入関係者

Cedric Gosse (President FFtri)
Benjamin Maze (Directeur National)
Alexandre Dodu (Directeur National Adjoint)
Philippe Fattori (National Paralympique)
Mathieu Badelier (Regonal Directeur)
Vincent Huel (Oleams Natation)

（3）研修日程

①通常研修

	期 間	研修先	内 容
①	2019年10月28日～2021年9月30日	Orléans CRE (Regional)	14歳～18歳 選手育成・強化活動の帯同

②特別研修

	期 間	研修先	内 容
①	2019年6月30日～2019年7月19日 2021年1月20日～2021年1月27日	CREPS FontRomeu CREPS PACA	Jr/U23 ナショナルチーム合宿視察
②	2019年7月19日～2019年7月28日	CREPS Montpellier	女子ナショナルチーム拠点視察
③	2019年7月29日～2019年8月28日	Stage Vittel	Min/Cad/Jr/U23 選抜&ナショナル合宿視察

④	2020年7月23日～2020年7月30日 2021年4月16日～2021年4月25日	CREPS Vichy Stage Cannes	Para Triathlonナショナルチーム 合宿視察
⑤	2021年8月23日～2021年9月9日	Orleans日本チーム海外 拠点	JAPANナショナルチーム海外拠点 活動サポート

Ⅳ. 研修概要

(1) 研修題目の細目

- ①France Triathlon
- ②Regionalによる育成・強化方法を学ぶ
- ③次世代カテゴリー活動の視察
- ④2024年に向けた大会や環境の調査



フランス国内ナショナル拠点

フランス国内に設置されるスポーツ施設。各所様々な環境に設営され目的により環境を選択し各競技練習に取り組む事が出来る。 * 国外選手の受け入れ可能。

競技人口	登録人口	競技大会	クラブ数
103,000	60,000	2,000	870

France Triathlon基本データ (2021年10月付)

1989年に国際トライアスロン連合がフランス・アビニオンにて設立され、その年に第1回世界選手権も同市で開催された。このようにフランスにはいち早くトライアスロンの普及・強化に向けた歴史がある。そして独自のスタイルを築き続けている。競技者だけでなくスポーツを楽しみたい全ての人々と共有し、挑戦を続けている姿勢を全身で感じる事が出来た。新型コロナにより2019年～2021年の上記数値は激変したが、2024年に自国で迎えるオリンピック（以下「パリ2024」と言う）まで更なる盛り上がりを見せる事だろう。

(2) 研修方法

毎年、強豪選手(特に男子)を輩出するフランス独自の強化の仕組みを見る為に、トップ選手の強化方法に特化するのではなく、フランスにおける普及・育成・強化の仕組み、パリ2024に向けた次世代選手の取り組み・環境の視察を中心とした研修を軸とした。フランス連盟との繋がりや、頼れる人脈は個人的に殆ど無かった事から、受け入れ先決定までの道のりも研修の一環であった。受け入れ先や研修計画、ビザ取得には想像以上の苦戦を強いられたが、沢山の関係者に支えられ人・社会を知る貴重な経験となった。そして、NF・研修先の方との信頼関係を構築し幅広い学びの研修を目指した。研修初めはビザ取得の関係もあり特別研修(合宿帯同)、受け入れ拠点視察として渡仏した。その後、一時帰国しビザを正式に取得しRegional拠点での研修を開始した。

*2019年6月末に渡仏し研修は順調にスタート。一時帰国しビザ取得、拠点活動までは計画通りだった。しかし、年明け2020年からは新型コロナウイルスによる影響で制限内での活動をするに留まった。その後、約3ヵ月間(3~5月)は全く活動が出来ない状況となった。また、このシーズンのレースや合宿はもちろん、学校や外出までもが厳しく制限された。このような状況下で当初の計画とはならない部分が多かった。その中でもコーチ資格の研修参加やアプリを使ったコミュニケーション等の経験も出来た。本国との情報交換も活用し研修後の強化への関わり方をじっくりと考える事が出来た。2021年も厳しい制限下での活動となったが、最後まで全うし自分に出来る事に集中して取り組む事とした。

令和元年度・長期派遣(トライアスロン)



D1 男子	
Poissy Triathlon	Triathl'aux
Triathlon Club de Liévin	Triathlon Toulouse Métropole
St Jean-de-Monts-Vendée Triathlon	Montpellier Triathlon
Metz Triathlon	Chambéry Triathlon
Valence Triathlon	Sainte Geneviève Triathlon
Les Sables Vendée Triathlon	Evreux A.C. Triathlon
Montluçon Triathlon	Tri Val De Gray
Vitrolles Triathlon	Versailles Triathlon

D1 女子	
Poissy Triathlon	Vallons de La Tour Triathlon
Metz Triathlon	La Rochelle Triathlon
Tri Val de Gray	Stade Poitevin Triathlon
Issy Triathlon	Groupe Triathlon Vesoul Haute-Saône
Triathlon Club de Liévin	Sardines Triathlon
Les Tritons Meltois	Brive Limousin Triathlon
Triathlon Club Chateauroux Métropole 36	Tri Saint Amand Dun 18
T.C.G. 79 Parthenay	Triathlon Toulouse Métropole

D2 男子	D3 男子
M.S.A. Triathlon 81	CAEN TRIATHLON
Vallons de la Tour Triathlon	TEAM NISSA TRIATHLON
Issy Triathlon	LES TRITONS MELDOIS
La Rochelle Triathlon	A. L. ECHIROLLES TRIATHLON
C.R.V. Lyon	SAINT RAPHAEL TRIATHLON
Les Girondins de Bordeaux Triathlon	BOURG EN BRESSE TRIATHLON
Mach 3 Triathlon	LES ALLIGATORS ANNECY TRIATHLON
Besançon Triathlon 36	GRAVELINES TRIATHLON
Triathlon Club Châteauroux Métropole	COTE D OPALE TRIATHLON CALAIS SAINT OMER
U.S. Palaiseau Triathlon	TRIMOVAL MOLSHEIM
Tricastin Triathlon	RENNES TRIATHLON
Pontivy Triathlon	ASPTT TRIATHLON ORLEANS
A.S.M. Saint-Étienne Tri	CAMBRAI TRIATHLON
14-Sardines Triathlon	ERNEENNE SPORTS TRIATHLON
Autun Triathlon	VILLENEUVE D ASCQ TRIATHLON
Le Mans Triathlon	FAST GUEBILLER
	A.S. MURET TRIATHLON

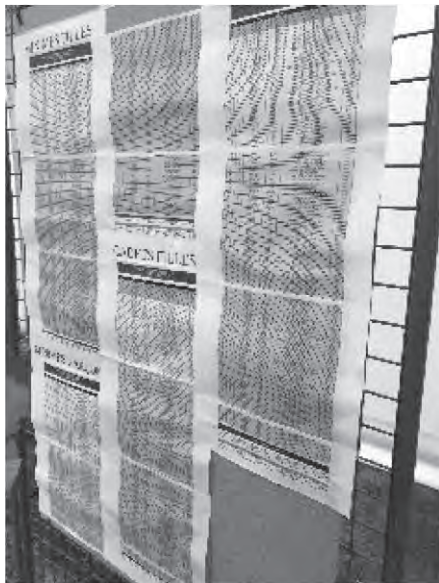
D2 女子	D3 女子
Montpellier Triathlon 84	LES SABLES VENDEE TRIATHLON
Valence Triathlon	STADE FRANCAIS
Saint-Avertin Sports Triathlon 37	GRAVELINES TRIATHLON
Pontivy Triathlon	EVREUX AC. TRIATHLON
Lys Calais Triathlon	LES ALLIGATORS ANNECY TRIATHLON
A.S. Muret Triathlon	MYTRIBE
A.S.M. Saint-Étienne Tri 42	TEAM NISSA TRIATHLON
Rennes Triathlon	COTE D OPALE TRIATHLON CALAIS SAINT OMER
Tricastin Triathlon Club	MSA TRIATHLON
Chambéry Triathlon	ASPTT STRASBOURG TRI
Les Girondins de Bordeaux Triathlon	MACH 3 TRIATHLON
C.R.V. Lyon	CAEN TRIATHLON
Versailles Triathlon	PAU TRIATHLON
Le Mans Triathlon	COMPIEGNE TRIATHLON
La Grande Motte Triathlon	ASVEL TRIATHLON
Red Star Club Champigny	TARBES TRIATHLON

上記はフランスエリートクラブの仕組みで、日本で言うサッカーリーグと同じ仕組みである。D1～D3部（男女各16クラブ）に分けられている。リーグは年間チームポイントで争い毎年上位・下位（3クラブ）が入れ替わる仕組みだ。毎年約6レースが行われ、D1上位チームには国内強豪選手に加え海外選手が加入する。

海外選手招聘に力を入れているクラブもあり世界からも選手が集まる。前述したように、自国の力があるからこそ他国ライバルを増やし自国強化も図れているのだろう。日本人選手も挑戦出来る方法の検討が急務だ。D2にはジュニアカテゴリーまでの若手選手が揃い常に競い合う環境となっている。世界に出るには、ここで勝ち上がる仕組みとなっている。

さらに下の世代になると、各ブロックで勝ち上がる仕組みとなる。選手権では各カテゴリーで150人近い参加者が競い合う。総勢700人以上の選手達が上記クラブでの出場を目指してくるので、ここから選出された選手が簡単には勝てない事は明らかである。

日本のメリットを活かす事として、新しい事を増やすのではなく横の繋がり、今ある物・事・人をフル活用することだ。もしくは若いうちに海を渡る、情報・方法を常に共有する、これこそが研修を最大限に活用出来る事だと感じた。



ジュニア以下の各スタートリスト



子供たちの大会も盛んに行われる

安全で親しみやすいスポーツである事と、大会出場も簡素で有る事が最大のメリットになるのではないだろうか。また、多様な自然で取り組めるスポーツとしてトライアスロンは子供の心を掴んで止まないものである。

研修報告

期 間	研修先	内 容
2019年10月28日～2021年9月30日	Orléans CRE (Regional)	14～18歳 選手育成・強化活動の帯同

Regionalでの活動は、フランスシステムの仕組みを細かく知るために大変重要な活動となった。

【通常練習】写真①（下）で見られるように、スケジュールで特別な事はない。選手達は月～金曜日は寮に入り学業と練習に集中する（水曜日は午後練習）。土日は自宅に帰りクラブで練習し、水曜・土曜・日曜日は競技会に積極的に参加する。休暇の多いフランスは自分の進む道を考える機会や時間を大切にしている。そして、競技に対して過度な訓練は行わない。夏はプール練習よりも湖等でのOSWを取り入れ、実践に慣れる。冬季練習（10月～12月）はバイク＝MTB、シクロクロス・ラン＝クロスカントリーに移行し練習の基本となる。冬休みにはそれぞれがウインタースポーツ等に取り組み、1つの種目に捕らわれずスポーツと向き合っている。

【カテゴリー】写真②（下）のように、カテゴリーは2歳刻みで区分されている。ジュニア期までは、飛び級や過度な活動がないよう練習指標も設定されている。高校生は主にMinim-Cadet-Jrカテゴリーとなる。トライアスロンでの競技距離もオリジナルで設定されておりスプリントディスタンス以上は実施していない。

こうした独自強化方法のメリットとして、成長期に当たる世代への怪我・過度な疲労をさせない点がある。テクニック習得とレース経験の重要性に重点を置いている。

【①通常の練習計画】

Weekly Schedule						
Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday	Saturday	Sunday
OFFICE 14h-16h	Swim 7h30-9h	OFFICE 10h-12h	Swim 7h30-9h		Club Training Sessions	Competition or Recovery
Swim 16h30- 18h30	Run 16h15- 18h30	Bike/Run Fitness 14h-18h	Run 16h15- 18h30	Swim 16h30- 18h30		About 10times a year



【②カテゴリー別・練習指標】

	Natation		Cyclisme		Course-Pied		Volume Hedbomadaire
	Nobre séance	Km Hedbo	Nobre séance	Km Hedbo	Nobre séance	Km Hedbo	
Benjamin 1	2-5	6-20	0-1	15-25	1-2	5-10	08-10h
Benjamin 2	3-6	12-25	0-1	15-25	1-2	5-15	10-12h
Minime 1	4-7	14-30	0-1	25-40	1-3	10-25	12-14h
Minime 2	4-7	14-30	0-1	30-50	1-3	10-30	12-16h
Cadet 1	4-7	16-35	1-2	50-100	2-3	20-50	12-18h
Cadet 2	4-7	16-35	1-2	50-120	2-4	20-60	12-20h
Junior 1	4-7	16-35	1-3	50-200	3-5	30-80	15-22h
Junior 2	4-7	16-35	1-4	50-250	3-6	30-100	15-25h
Senior	4-5	16-25	4-6	300-500	5-8	70-150	20-35h

【医科学・測定】

トレーナー（KINE）からは練習後施術を受ける体制が出来ている。スポーツ専門医との連携もあり定期測定・栄養学も専門医からの説明や指導を受ける。



専門スタッフによる測定



MTGは重点を簡潔に

【スタッフの役割】

トレーニングは3種目あり、各種目の専門コーチ又はトライアスロンコーチの指導を受ける。全体を総合統括するディレクター、アシスタントコーチ、各専門スタッフのサポートも受ける。スタッフ間での情報共有や無理の無い指導により練習の雰囲気、指導者のコンディションも良い状態を保つ事を大事にしている。こうした活動も各Regionalによって異なり、それぞれがオリジナルな体制で活動している。フランスでは現場コーチと組織の役職は混合していない。現場はコーチ、スタッフが責任を持つ。そうする事でバランスを取りきちんとした議論の場が出来るという事だ。良いバランスのまま長く続く要因は、各役割がはっきりしているという事だ。



【所感】

このような環境で選手は選択と自立を繰り返し教育を受ける。そして競技を通じて自らの道を切り開いて行く。それでもトップアスリートとしての道は険しい。それを各選手は理解している。多くの選手に尋ねても「オリンピック」「プロ選手」という言葉は簡単に出てはこない。頂点は高い為、本気になった選手だけが次のステップへ進んでゆく。



2019年CREメンバー



2021年CREメンバー

特別研修①

期 間	研修先	内 容
2019年 6 月30日～2019年 7 月19日	CREPS FontRomeu	Jr/U23 ナショナルチーム合宿視察
2021年 1 月20日～2021年 1 月27日	CREPS PACA	Jr/U23 ナショナルチーム合宿視察

研修の最初に次世代ナショナルチーム合宿へ合流した。場所はピレネー山脈麓・標高1300～2100M/CREPS FontRomeu。2024～2028年世代の中心選手達の合宿視察で、目的は9月世界選手権に向けた高地準備トレーニングであった。若手でも大柄な選手が多く圧倒された。日本との文化の違いや言葉の壁に苦戦しながらも、スタッフが言ってくれた一声は「フランス選手も英語を話す練習が必要だ」という事だった。いわゆる彼らもフランス語という言葉の壁を越えなければ国際的な選手にはなれないという思いを持っていた。

現地での理解と分析を深めると、練習・種目別タイムにおいては日本人が勝る事が分かって来た。練習量・強度・食事の量において特別驚く程の内容は無かったが、強度管理（心拍数管理）はコーチから説明を受けこまめに行われていた。その他、補強・サーキットトレーニングを多く取り入れていた。練習環境やサポート体制に納得する部分はあったが、スタッフに聞き込んでもデータ上も強豪国と思える程の突出した物を見出す事はまだ出来なかった。



2019年次世代ナショナルメンバー



素晴らしい環境は溢れている

特別研修②

期 間	研修先	内 容
2019年7月19日～2019年7月28日	CREPS Montpellier	女子ナショナルチーム拠点視察

次に視察を行ったのはナショナルチーム女子の拠点である。在住している選手3名+候補選手が限定で練習に来る。フランス南部CREPSモンペリエにあり、比較的温暖な気候とピレネー山脈に近いのもメリットのようだ。スタッフ3名（男子1・女子2）が役割分担でコーチングを行っている。フランス男子は個別強化活動を行っているのに対し、女子はナショナルチームで活動を行っている。東京オリンピック選考前という事もあり実践練習や暑熱対策練習などを視察する事が出来た。ここでもサーキットトレーニングは集中的に行っており、練習量や強度+身体（体幹）の強さを重要視したプログラムである事を感じた。後に東京五輪でこの2名が銅メダルを獲得した。



実践練習



実践練習



CREPS モンペリエ



ウエイトルーム

特別研修③

期 間	研修先	内 容
2019年7月29日～2019年8月28日	Stage Vittel	Min/Cad/Jr/U23 選抜&ナショナル合宿視察

次に長期に渡り滞在したのはフランス中東部に位置するVittel。ここでは次世代各カテゴリーの合宿風景を視察する事が出来た。選ばれた選手・スタッフが全国から集まり各グループで1週間程度のトレーニングを行う。グループリーダーによって取り組む内容も違い招聘スタッフも異なる（バイクコーチ・ランコーチ・メンタル・トレーナー等）。情報共有を活用しそれぞれのグループに集中した風景は、発掘・育成の観点から合理的であり選手・指導者共に成長して行ける環境を作り上げている。特に若い世代には栄養素の重要性、日常生活のリズム（携帯電話は夜間は回収）等の指導が多かった。また、食事後の時間の使い方（サッカー・卓球・バトミントン等で軽く遊ぶ）、夕方の空腹状態を作らない為の補食時間（Gouter）がある。とにかく皆仲が良く、日本とは違った合宿時間の過ごし方に驚いた。



Minime



Cadet



クラシックな朝食



特に特別な物はない

特別研修④

期 間	研修先	内 容
2020年7月23日～2020年7月30日 2021年4月16日～2021年4月25日	CREPS Vichy Stage Cannes	Para Triathlonナショナルチーム合宿 視察

コロナの影響から国内で一早く動き出したのがパラチームだった。幸いにもこの合宿の視察に帯同可能となった。研修目的とは異なる分野ではあったが、先の見えない状況から自分に出来る事に挑戦しようとトライアスロン競技の新たな繋がり構築を目指して経験する事を決めた。パラ競技については、ガイドと言う役割の選手・スタッフが必要となる。スタッフも多くの体制で臨んでいる。カテゴライズされた競技特性から、全体での強化と言うよりは個々やカテゴリー別での取り組みが重要視されており合宿の開催方法や選手サポートの方法等様々な点でサポート方法や練習方法を勉強させて頂く事が出来た。そして新たなコーチとの関係構築も行う事が出来た。この経験から2021年6月にフランスで行われたWC日本チーム選手サポートの機会も生まれ、日本チームのサポートも行う事が出来た。



東京で金メダルを獲得した



パラ日本チームも初の銀・銅メダル

特別研修⑤

期 間	研修先	内 容
2021年8月23日～2021年9月9日	Orleans日本チーム海外拠点	JAPANナショナルチーム海外拠点活動サポート

この研修の集大成として迎える事が出来たのは特別研修⑤である。海外研修で学んだ私の答えは、若い世代から力の拮抗した中で数多くの大会を経験し戦い抜いて行く事だ。これが基本。そしてこれを経験できる場を提供するべく日本チームのサポートを迎え入れる事になった。練習環境や宿泊施設の準備はもちろんだが、フランス選手権への日本人選手初出場の機会を創出し、次世代選手の経験・挑戦の場として身をもって異国の雰囲気を感じてもらう事が出来た。慣れた環境で準備され行う大会とは違い、慣れない環境で調整しスタートの準備をする。忘れ掛けていた気持ちや、現地での過ごし方、モチベーションをコントロールすることで、改めて色々な事に気付くきっかけにする。自分の挑戦と彼らの挑戦に十分な可能性を感じ、自分の研修で学んでいる事が間違いではない事を確信した。こうした活動を確認たる形にする事が私の研修成果であり、役割である。



France選手権出場を果たす



若いうちに世界で戦う



【パスウェイ調査】

各合宿や拠点・大会で出会ったスタッフやコーチを尋ね、パスウェイ調査の聞き込みを行った。トップ選手も1競技に捕らわれず、様々な取り組みをしていた事が伺える。

エリート			
名前	生年月日	開始年齢	出身競技
Vincent Luis	1989	12	水泳
Pierre Le Corre	1990	19	Breakdance・Swim・Artsmartiaux
Dorian Coninx	1994	17	Swim・MTB・HandBall・Cirque
Cassandre Beaugrand	1997		
Leonie Periault	1994	12	水泳・ダンス・サーカス
Emilie Morier	1997	7	MTB・Judo・Gym・Tennis・Bmx・Hockey
Sandra Dodet	1996		
次世代			
Leo Bergere	1996	13	体操・自転車・犬クロス
Arthur Berland	1999	10	カヤック・サッカー・陸上
Boris Pierre	2000	11	陸上・テニス・サッカー
Paul Georgenthum	2000	7	サッカー・水泳
Guillaume Hay	2000	6	トライアスロン
Valentin Morlec	1999	11	体操
Baptiste passemard	2001	10	近代五種
Emma Lombardi	2001	15	水泳
Para			
Ahmed Andaloussi	1972	42	バスケット・フェンシング
Alexandre Paviza	1971	41	無し
Alexis Hanquingant	1985	28	バスケット・キックボクシング
Jules Ribsteth	1986	15	サッカー
Thibaut Rigaudeau	1990	23	サッカー・陸上
Gide	1982	12	体操
Antoine Perel	1986	35	陸上（走り幅跳び）
Gide	1980	14	自転車
Mona Francis	1990	26	海上救助・水泳
Gwladys Lemoussu	1989	22	バスケット・ラグビー・チア
Elise Marc	1987	25	水泳
Annouck Curzillat	1992	22	合気道・水泳
Gide	1977	36	マラソン・水泳

（４）研修成果の活用計画（研修を終えて）

*本研修を通じ、JOCスポーツ指導者海外研修員として特別な支援とご協力のもと FranceTriathlonの育成・強化の仕組みを学び活動させて頂く事が出来ました。

トライアスロン競技がオリンピックに採用された2000年当初からも強豪国の一国として常に欧州・世界の上位選手を輩出するフランス。独自の強化の仕組み、環境は現役当時の私も常に気になる存在でした。当時、私自身が挑戦する事が出来なかった一番の要因としては語学の壁、文化の違い、情報の不足による個人的な欧州圏への壁の高さを感じていたからです。

現役を退き、指導者としての経験を積んだ時、選手（人）を育てる難しさを知りました。と同時に自分自身の知識と経験不足に気付きました。日本代表として世界で戦う為の人脈や知見についても無力でした。欧米の競技力が先行して行く今、トライアスロン競技で日本のメリットを活かし、欧米のメリットも最大限活用する、これこそが選手個々、日本チーム強化の方法だと考えました。勇気を持って、自分の出来る事に挑戦していきます。

フランス研修の軸は2024-2028年を見据えた次世代層の活動を中心に研修を行った事です。次世代合宿・トレーニングでは、スタッフがトレーニング活動出来る事、安全確保・指示・コンタクトが瞬時に取れる状況を作る事で私自身の研修をより濃厚な物にしてくれました。言葉の壁を越え、現地スタッフ・選手とも人間関係構築に活か

す事が出来たと確信しています。スポーツを愛し、健康の大切さや選手と共感する喜びを感じる事がこの世代の育成・強化の根源だと学びました。どこに行っても笑顔と会話の絶えないフランススタッフでした。



CREPS VICHY PARA合宿



CREPS PACA・U23スタッフ

そして、研修期間半ばにはこの研修の成果をどのように日本の強化に活かす事が出来るかを並行して考えました。語学の壁、文化の違い、コロナによるロックダウン等、2年とは言え道半ばの知識を持ち帰る事より、2024-2028年に向け現地で日本選手の活躍できる場を創出する事や、海外転戦・強化練習の目的を欧州で実現できる拠点の必要性、コーディネーター的役割を担うスタッフの必要性にも着目しました。これこそが研修成果の最大の活用だと考えました。コロナ規制が緩和して行く中でその様な準備も同時に進めました。そして、研修終了間際には2024年に向けた日本チームを迎え入れフランスでのサポートを実現させました。地元の協力を得る事で、環境面での快適性や語学の壁もよりストレスの少ない状況から挑戦できるようになります。そして個々に合わせた目標設定と現地での目的に合わせた計画を遂行する事が可能になります。そして、何よりも現地での選手・チームと関わりを持ち日本人が現地レースに参戦し活躍してゆくシステム構築を目標としています。



日本チーム欧州拠点活動 Orléansにて

令和元年度・長期派遣（トライアスロン）



資 料

1. スポーツ指導者海外研修事業実施要項
2. スポーツ指導者海外研修事業 研修員一覧
3. スポーツ指導者海外研修事業 研修員名簿

スポーツ指導者海外研修事業実施要項

1. 趣旨

本会加盟団体に所属している新進気鋭の若手指導者をスポーツ指導者海外研修員（以下「海外研修員」という）として海外に派遣し、その専門とする競技水準の向上に関する具体的な方法等について研修させるとともに、海外の選手強化対策、指導者養成の実態等について調査・研究に当たらせ、将来我が国のスポーツ界を担う指導者を育成する。

2. 海外研修員の種類と研修期間

- (1) 海外研修員は長期派遣者（研修期間2年以内）と短期派遣者（同1年以内）とする。
- (2) 海外研修員は、原則として1ヶ所において集中的に研修するものとする。

3. 海外研修員としての条件

海外研修員は、次の条件を全て満たしている者でなければならない。

- (1) 研修先の受け入れの保証があること。
- (2) 勤務先等の所属長より本研修の承諾を受けていること。
- (3) 外国での研修に堪えうる語学力を有すること。
- (4) 当該年度の8月末日までには渡航先に出発できる見込みがあること。
- (5) 原則、帰国後、本会の強化スタッフまたは競技団体における指導者として活動できること。

4. 海外研修員の募集人数

募集人数については、若干名。

5. 海外研修員候補者の選考

- (1) 本会は本会ならびに本会加盟団体を対象に、海外研修員にふさわしい者（以下「候補者」という）を募集する。
- (2) 前項により当該団体（本会含む）が候補者を推薦する場合には、別に細則で定める海外研修員候補者推薦書を本会に提出するものとする。
- (3) 本会は、ひとりでも多くの「指導者」を、ひとつでも多くの団体（研修員派遣中の団体も含む）から派遣するよう選考する。同一団体から複数名の推薦を行う場合は、団体内で優先順位を付ける。

6. 海外研修員の決定

- (1) 本会は前項の推薦書に基づき書類選考ならびに面接の上、海外研修員を正式決定するものとする。
- (2) 海外研修員は、別に細則で定める誓約書及び研修計画書を本会に提出しなければならない。
- (3) 出発まで各自語学研修を行う。

7. 海外研修員に支給する経費

海外研修員に対する経費は、別に細則で定める要領で支払うものとする。

8. 海外研修状況の報告

海外研修員は3ヶ月毎に別に細則で定める研修状況報告書を本会に提出しなければならない。

9. 海外研修の中止

本会は海外研修員が本要項に違反したり、不適当な行為があったときは、その研修をとりやめ、帰国を命じることができるものとする。当該者は、その指示に従うものとする。

10. 海外研修報告書の提出

海外研修員は、帰国日より1ヶ月以内に別に細則で定める研修報告書を提出しなければならない。

11. その他

- (1) 海外研修員は帰国後、本会の開催する諸事業において研修報告を行う。
- (2) その他、海外研修員の派遣に関し必要な事項については別に細則で定めるものとする。

*平成12年4月1日	一部改訂
*平成14年4月1日	一部改訂
*平成16年4月1日	一部改訂
*平成18年11月1日	一部改訂
*平成22年12月22日	一部改訂
*平成27年1月20日	一部改訂
*平成28年4月1日	一部改訂
*平成30年4月1日	一部改訂
*令和2年3月31日	一部改訂（令和2年4月1日より適用）

スポーツ指導者海外研修事業 派遣者一覧

競技／年度	昭和54	昭和55	昭和56	昭和57	昭和58	昭和59	昭和60	昭和61	昭和62	昭和63	平成元	平成2	平成3
陸上	澤木啓祐	宮川千秋	鬼塚純一	村木征人	室伏重信		永井 純		宮下 憲		吉田雅美		
水泳	*田口信教	松井 守	宮原利幸 二木広幸				元好三和子			高橋繁浩 高橋繁浩 坂本 弘	中森智佳子	*田中 京	
サッカー	森 考慈		松本育夫			田村 脩		山口芳忠					田嶋幸三
スキー	*笠谷幸生 *富井澄博					古川年正				*八木弘和			北島光則
テニス		本村 行									田村伸也		
ボート													
ボクシング									荻原千春				
バレーボール			古沢久雄		荒木田裕子	荒木田裕子							
体操		監物永三		北川淳一					*具志堅幸司		加納弥生	秋山エリカ	
バスケットボール	西尾末広	田中徹雄											
スケート					入沢孝一								
アイスホッケー													
レスリング	*市口政光			藤本英男		富山英明				高田裕司	宮原厚次		
セーリング		松山和興											
ウエイトリフティング	福田 弘		*山下 修			*細谷治朗					三宅義信		
ハンドボール	早川清孝		樫塚正一										
自転車													
卓球										須賀健二			前原正浩
相撲													
馬術									石黒健吉				
フェンシング			*藤沢義彦										
柔道	中村良三		重岡孝文		柏崎克彦			山下泰裕			細川伸二		松岡義之
バドミントン				関根義雄							蘭 和真		
ライフル射撃	栗田俊昭		*香西俊輔					市村 忠					
剣道	巽 申直	志沢邦夫											
近代五種			富安一朗										
ラグビー				水谷 真									
カヌー		本田宗洋					福里修誠						
空手道			真野高一									西村誠司	佐久本嗣男
なぎなた	田中ミヤ子												
ボブスレー・リュージュ			市橋善行								鈴木省三		
野球													
武術太極拳													桑原典子
トライアスロン													
テコンドー													
バイアスロン													
合計	13	8	13	5	4	5	3	3	4	3	10	3	8

※合計数は延人数

*印は長期(2年)派遣者

平成4	平成5	平成6	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16	平成17
		青戸慎司		内田孝男		*土江寛裕				吉田孝久	近野義人		今村文男
		緒方茂生	緒方茂生		鈴木大地					岩崎恭子	林 享		*立花美哉
	野地照樹										木村孝洋		
			*佐藤 晃				菅野範弘		斗澤由香子	斗澤由香子			
				西野真一		米沢 徹				*植田 実			
			杉藤洋志	杉藤洋志									
						本 博国							
*田中幹保					佐藤浩明							山田晃豊	
			梶谷信之		瀬尾京子	瀬尾京子	三浦華子	*畠田好章		菅原リサ	*松永里絵子	橋口美穂	原田睦巳
								青柳 徹	青柳 徹	和田貴志	和田貴志		
	清野 勝										坂井寿如		
		*佐藤 満			赤石光生					嘉戸 洋			
							松本真也						
田口 隆			東根明人		松井幸嗣		玉村健次		*田中 茂			*山田永子	
			大門 宏										
								渡辺理貴			河野正和		
	齋藤一雄												
	*後藤浩二郎												
山口 香	中西英敏			田辺陽子	岡田弘隆	持田達人	増地千代里	金野 潤	長井淳子	中村行成	檜崎教子	中村兼三	阿武教子
	金坂広幸						*藤井 彌		三野卓哉				
			勝田 隆				山本 巧						
	成田寛志												
		栗山浩司											
筒井大助								小島啓民					
					二宮秀夫				神庭裕里				
									佐藤吉朗				
4	7	4	7	4	7	5	7	5	7	8	8	4	4

競技／年度	平成18	平成19	平成20	平成21	平成22	平成23	平成24	平成25	平成26	平成27	平成28	平成29	平成30
陸上			山崎一彦		高岡寿成	柳澤 哲	杉林孝法	今井美希	谷川聡	岩水嘉孝			
水泳		*稲田法子				原田早穂		中村真衣	*塩田義法	*三木二郎			
サッカー			猿澤慎治			今泉守正	廣山 望	田村奈津枝	山尾光則 坂尾美穂	広瀬統一		小川秀樹	*須藤啓太
スキー	*工藤昌巳	佐々木耕司								安食真治		久保貴寛	*河野恭介
テニス	谷澤英彦								土橋登志久	*岩渕聡			近藤大生
ボート				中村さなえ				*大戸淳之介		*白井祐介			
ボクシング													
バレーボール	松本洋			*中垣内祐一 小林 敦				*菅野幸一郎		荻野正二	大久保茂和		山村宏太
体操			*村田由香里	上村美揮			原 千華	黒田真由	*鹿島丈博 大島杏子	*遠藤由華 *森起人		桑原俊	古城梨早
バスケットボール													
スケート			白幡圭史	神野由佳					*出島茂幸				*小原英志
アイスホッケー													
レスリング							*笹本 睦			*米満達弘			
セーリング				中村健一		橋元郷							
ウエイトリフティング													
ハンドボール								*高橋豊樹		*舍利弗学			
自転車				沖 美穂				*福島晋一 *小田島梨絵					
卓球					三原孝博		*梅村 礼						
相撲													
馬術													
フェンシング	岡崎直人						*和田武真		長良将司				
柔道			*井上康生			*塚田真希	*谷本歩実					金丸雄介	
バドミントン													
ライフル射撃													
剣道													
近代五種													
ラグビー													
カー				上原茉莉		*栗本宣和							
空手道													
なぎなた													
ボブスレー・リュージュ													
野球													
武術太極拳													
トライアスロン													
テコンドー													中川貴哉
バイアスロン					小舘 操					進藤隆			
合計	4	2	5	8	3	6	7	9	9	12	1	4	7

令和1	令和2	令和3	令和4	計
*松岡佑起				22
				21
松原英輝	*見汐翔太	片桐央視		19
			金城芳樹	14
				9
				5
				2
*塚田圭裕			*青木晋平	15
				24
				2
				9
*山中武司				3
		*湯元進一		10
				5
				5
		*嘉数陽介		11
				4
				6
				1
				2
*松岡慧				5
			*海老沼匡	22
				2
				6
				2
				1
				3
				4
				4
				1
				3
				2
				3
*福井英郎			*忽那静香	3
				1
				2
6	1	3	4	254

スポーツ指導者海外研修事業 研修員名簿

発行日現在

	氏 名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研 修 内 容
1	田口 信教	54年長期	水泳(競泳)	昭和54年10月24日 ～昭和56年10月31日	アメリカ インディアナ州 ブルーミントン	インディアナ大学 ジェームズ・E・カンシルマン	競泳の指導技術の理論と実践
2	市口 政光	54年長期	レスリング (グレコローマン)	昭和54年9月20日 ～昭和56年9月18日	アメリカ ウィスコンシン	ウィスコンシン大学 ウィリアム・P・モーガン	レスリング競技の運動構造と 技術分析に関する比較研究
3	笠谷 幸生	54年長期	スキー(ジャンプ)	昭和54年11月29日 ～昭和56年12月3日	オーストリア インスブルック	オーストリア国家検定 ジャンプコース 養成コース	ジャンプ競技におけるコーチング トレーニング法の修得
4	富井 澄博	54年長期	スキー(アルペン)	昭和54年9月5日 ～昭和56年5月15日	オーストリア インスブルック	オーストリア国家検定 アルペンコーチ 養成コース	滑降競技における運動機能技術 分析に関する比較研究
5	森 孝慈	54年短期	サッカー	昭和54年11月21日 ～昭和55年11月20日	ドイツ ケルン	西ドイツ ブンデス フットボールリーグ IFCケルン	ナショナルコーチにふさわしい 知識の習得、指導実践の現地研修
6	沢木 啓祐	54年短期	陸上競技(中・長距離)	昭和54年9月16日 ～昭和55年7月7日	アメリカ オレゴン州	オレゴン大学 オレゴントラッククラブ	米国における中・長距離 コーチング法の修得
7	早川 清孝	54年短期	ハンドボール	昭和54年10月11日 ～昭和55年9月25日	ドイツ ケルン	ケルン ドイツ体育大学 (D・S・H・S)	西ドイツハンドボール組織のあり方 選手育成・ナショナルチームの指導体制
8	西尾 末広	54年短期	バスケットボール	昭和54年9月18日 ～昭和55年9月15日	アメリカ レキシントン	ケンタッキー大学 ジョー・B・ホール	バスケットボールについての コーチング論の研修
9	福田 弘	54年短期	ウエイトリフティング	昭和54年11月5日 ～昭和55年10月30日	アメリカ ロサンゼルス	ロサンゼルス マーベリッククラブ他	ウエイトリフティングの理論 育成コーチ・システム
10	栗田 俊昭	54年短期	ライフル射撃	昭和54年12月5日 ～昭和55年11月24日	ドイツ ヴィスバーデン	西ドイツ ヴィスバーデン射撃学校	射撃技術の修得・コーチ学 トレーナー課程の研修
11	中村 良三	54年短期	柔道	昭和54年10月6日 ～昭和55年10月30日	フランス パリ	フランス柔道連盟	外人選手の特性への対応策 コーチング学の研修
12	巽 申直	54年短期	剣道	昭和54年10月18日 ～昭和55年9月10日	イギリス ロンドン	ネンリキ道場 英国剣道連盟	英国人の剣道観に関する実態調査
13	田中 ミヤコ	54年短期	なぎなた	昭和54年10月18日 ～昭和55年10月18日	アメリカ ロサンゼルス	アメリカ なぎなた連盟他	アメリカにおける武道(スポーツ)の 動向等調査
14	監物 永三	55年短期	体操	昭和55年10月30日 ～昭和56年10月24日	アメリカ カリフォルニア	カリフォルニア大学 ロサンゼルス校	体操競技のコーチング 体操競技国際公認用語の習得
15	松井 守	55年短期	水泳(水球)	昭和55年10月17日 ～昭和56年10月16日	ハンガリー ブタペスト	ハンガリー ブタペスト B. V. S. Cクラブ	水球の技術研修
16	松山 和興	55年短期	ヨット	昭和55年11月15日 ～昭和56年11月12日	イギリス ワイト島	英国ナショナル・ セイリングセンター 王立ヨット協会	ヨット・コーチ学の研修・選手強化 施設、方法の調査
17	本田 宗洋	55年短期	カヌー	昭和55年11月11日 ～昭和56年12月10日	ドイツ デュイスブルグ	西ドイツスポーツシュレー 西ドイツカヌー協会	カヌーの漕法および指導法
18	田中 徹雄	55年短期	バスケットボール	昭和55年10月15日 ～昭和56年10月15日	アメリカ ケンタッキー	ケンタッキー大学 ジョー・B・ホール	バスケットボールコーチ指導法 ウエイト・トレーニング他
19	宮川 千秋	55年短期	陸上競技(短距離)	昭和55年11月8日 ～昭和56年9月20日	アメリカ カリフォルニア	カリフォルニア大学 ヘイワード	陸上競技における指導法 (特に短距離走について)
20	本村 行	55年短期	テニス	昭和55年11月5日 ～昭和56年11月4日	アメリカ カリフォルニア	カリフォルニア大学 ロサンゼルス他	テニス指導法(特にジュニアの指導法)
21	志澤 邦夫	55年短期	剣道	昭和55年12月26日 ～昭和56年12月27日	オーストラリア シドニー他	オーストラリア剣道連盟	オーストラリアの剣道実態調査 コーチ法の研修
22	香西 俊輔	56年長期	ライフル射撃	昭和56年11月15日 ～昭和58年11月15日	アメリカ テキサス	ラニー・パシヤム射撃学校	射撃技術の研修 メンタル・マネージメント・プログラムの研修
23	藤澤 義彦	56年長期	フェンシング	昭和56年8月2日 ～昭和58年8月1日	フランス パリ	国立スポーツ研究所 (I. N. S. E. P)	フェンシング基礎技術、競技規則 審判技術指導法等の研修
24	山下 脩	56年長期	ウエイトリフティング	昭和57年1月29日 ～昭和59年1月28日	ドイツ ミュンヘン	ナショナルスポーツセンター バイエルン州ウエイトリフティング連 盟	ウエイトリフティング理論、育成システム クラブ組織、コーチングシステム
25	古沢 久雄	56年短期	バレーボール	昭和56年12月15日 ～昭和57年10月13日	ブルガリア ソフィア	ソフィア体育大学 ブルガリアバレーボール連盟	バレーボール指導法の体系とスポーツ 社会学理論およびゲーム分析
26	鬼塚 純一	56年短期	陸上競技 (混成競技)	昭和56年9月10日 ～昭和57年9月11日	アメリカ カリフォルニア州	カリフォルニア州立大学 ロングビーチ校	混成競技における技術水準および競技水準向上に関す る具体的方法論の研修
27	宮原 利幸	56年短期	水泳(水球)	昭和56年10月25日 ～昭和57年10月31日	アメリカ カリフォルニア州	アメリカ水球 ナショナルチーム	水球競技におけるコーチ学の研修と技術の研修
28	二木 廣幸	56年短期	水泳(飛込)	昭和56年10月13日 ～昭和57年10月2日	アメリカ カリフォルニア州	ミッションビエホ・スイム・クラブ マイアミ大学	飛込技術の修得およびエーजी・グループの指導法の研修
29	松本 育夫	56年短期	サッカー	昭和56年10月9日 ～昭和57年10月8日	ドイツ ケルン	西ドイツサッカー協会 I. F. C. ケルン	西ドイツにおけるジュニア選手の育成とその方法
30	壺塚 正一	56年短期	ハンドボール	昭和56年10月13日 ～昭和57年9月9日	ドイツ ケルン	ケルン・ドイツ体育大学 (D・S・H・S)	ナショナルプレーヤーの指導内容と指導体系、クラブチー ムシステム等研修
31	富安 一郎	56年短期	近代五種	昭和56年9月1日 ～昭和57年8月31日	アメリカ テキサス州	サンアントニオ近代五種トレーニ ング・センター	選手強化策の現状把握、ジュニア底辺の普及対策 指導者養成の実態調査
32	真野 高一	56年短期	空手道	昭和56年11月25日 ～昭和57年11月25日	アメリカ ニューヨーク州	コロンビア大学体育学部 全米空手道連盟	競技力向上に関する研究(体力・技術) 空手におけるパ ワー、体力向上のための理論と実践
33	市橋 善行	56年短期	ボブスレー	昭和56年11月10日 ～昭和57年11月10日	スイス サンモリツ他	スイスボブスレー連盟 イタリア・コルチナ ボブスレー製造メーカー	ボブスレー競技、技術向上のための実技研修 ボブス レー機の修理調整研修

	氏 名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研 修 内 容
34	重岡 孝文	56年短期	柔道	昭和56年12月3日 ～昭和57年12月2日	ドイツ ケルン	西ドイツ柔道連盟 ドイツ体育大学 (D. S. H. S)	ヨーロッパ各国の指導体制、トレーニング方法の研究、選手強化対策・ヨーロッパ選手権大会の研修と分析
35	村木 征人	57年短期	陸上競技(跳躍)	昭和57年10月21日 ～昭和58年10月14日	アメリカ サンティエゴ	カルフォルニア州 サンティエゴ大学	跳躍競技の技術研修
36	北川 淳一	57年短期	体操	昭和57年9月1日 ～昭和58年9月2日	カナダ トロント	ヨーク大学 カナダ体操協会	体操競技の技術水準向上のための指導法研修
37	藤本 英男	57年短期	レスリング (グレコローマン)	昭和57年10月14日 ～昭和58年10月15日	ハンガリー ブタペスト	ハンガリー レスリング協会	グレコローマンスタイルの高等技術の修得技術分析と実践での応用トレーニング法の研究
38	関根 義雄	57年短期	バトミントン	昭和57年12月1日 ～昭和58年11月29日	イギリス ロンドン	ウインブルドン スカッシュ&バトミントンクラブ	世界トッププレイヤーの強化方法およびジュニア対策についての調査研究
39	水谷 眞	57年短期	ラグビー	昭和57年9月2日 ～昭和58年10月29日	イギリス ロンドン	イングランド ラグビー協会	戦法、技術論、およびコーチ学
40	入澤 孝一	58年短期	スケート(スピード)	昭和59年2月20日 ～昭和60年3月19日	ノルウェー オスロ	ノルウェースケート連盟 オスロ大学	ヨーロッパスピードスケートの強化体制およびコーチングの研修
41	柿崎 克彦	58年短期	柔道	昭和58年5月1日 ～昭和59年4月7日	イギリス ロンドン	BUDOKWAI イギリス柔道連盟	イギリスを中心としたヨーロッパ柔道技術およびトレーニング研究
42	室伏 重信	58年短期	陸上競技(投てき)	昭和58年10月16日 ～昭和59年10月4日	アメリカ ロサンゼルス	カリフォルニア大学 ロサンゼルス	アメリカ投てき選手を中心としたトレーニングおよび技術研究
43	荒木田 裕子	58年短期 59年短期	バレーボール	昭和58年10月12日 ～昭和60年10月30日	スイス ドイツ	スイスバレーボール連盟 西ドイツバレーボール連盟	ヨーロッパ諸国のバレーボール戦術 技術研修と情報収集
44	細谷 治朗	59年長期	ウエイトリフティング	昭和60年1月15日 ～昭和62年1月10日	ハンガリー ブタペスト	タタニアスポーツクラブ ハンガリーナショナルチーム	ウエイトリフティング理論、クラブ組織論、育成システム、コーチシステム
45	富山 英明	59年短期	レスリング (フリースタイル)	昭和59年12月16日 ～昭和60年12月15日	アメリカ アイオワ州	アイオワ州立大学	レスリング競技のコーチ学
46	田村 脩	59年短期	サッカー	昭和59年9月19日 ～昭和60年9月24日	ハンガリー ブタペスト	ハンガリー大学他	サッカーの指導方法および実践
47	古川 年正	59年短期	スキー(アルペン)	昭和59年10月25日 ～昭和60年10月21日	アメリカ バーモント	アメリカ・スキー ナショナルチーム	アルペン競技における運動構造と技術分析
48	本間 三和子	60年短期	水泳 (シンクロナイズドスイミング)	昭和60年8月15日 ～昭和61年8月23日	カナダ カルガリー	アクア・ベル スイミングスクール カルガリー大学	シンクロナイズドスイミングのコーチ法
49	永井 純	60年短期	陸上競技(中距離)	昭和60年11月16日 ～昭和61年11月15日	オーストラリア メルボルン	メルボルン大学	陸上競技のコーチング法
50	福里 修誠	60年短期	カヌー	昭和60年10月8日 ～昭和61年10月3日	ドイツ デュセルドルフ	西ドイツカヌー協会	カヌーの指導法と双方漕法
51	山下 泰裕	61年短期	柔道	昭和61年8月25日 ～昭和62年8月26日	イギリス ロンドン	イギリス柔道連盟	英国及びヨーロッパ各国の柔道強化対策と指導法
52	山口 芳忠	61年短期	サッカー	昭和61年10月24日 ～昭和62年10月30日	ドイツ ミュンヘン	西ドイツサッカー協会 F. C. バイエルン ミュンヘン	西独プロサッカーにおける指導方法及びゲームの戦い方
53	市村 忠	61年短期	ライフル射撃	昭和61年11月9日 ～昭和62年11月8日	ドイツ ヴイスバーデン	西ドイツ射撃協会 国立射撃学校	ライフル射撃における力学及び心理学的要素についての個人間の差異の解析に関する研究
54	具志堅 孝司	62年長期	体操	昭和62年9月17日 ～平成元年9月4日	ドイツ チュービンゲン	チュービンゲン大学	体操競技の指導方法
55	萩原 千春	62年短期	ボクシング	昭和62年10月1日 ～昭和63年10月5日	アメリカ クラマスフォール	オレゴン工科大学	アメリカにおけるボクシングのトレーニング法
56	宮下 憲	62年短期	陸上競技(障害)	昭和62年8月26日 ～昭和63年8月29日	ドイツ ケルン	ケルン・ドイツ体育大学	ハードル種目に関する技術・トレーニング方法論の研究
57	石黒 建吉	62年短期	馬術	昭和62年11月12日 ～昭和63年11月12日	イギリス ウィストン	アッシュロープファーム トレーニングセンター	人馬の育成・審判員、翻訳、乗馬育成に関する研修・調査
58	高橋 繁浩	63年短期 元年短期	水泳(競泳)	昭和63年10月14日 ～平成2年9月16日	アメリカ コロラドスプリングス	コロラドスプリングス スポーツ科学研究所	運動生理学を中心に水泳の科学的トレーニング及びコーチングについて
59	須賀 健二	63年短期	卓球	昭和63年10月13日 ～平成元年10月8日	イギリス ヘスティング	国際卓球連盟	卓球コーチ学研修及び国際卓球連盟について
60	高田 祐司	63年短期	レスリング (フリースタイル)	昭和63年11月5日 ～平成元年10月26日	アメリカ ペンシルバニア	ペンシルバニア大学	レスリングのトレーニング方法、指導法及び科学性について
61	八木 弘和	元年長期	スキー	平成元年11月11日 ～平成3年9月18日	オーストリア ザールフェルデン	オーストリア スキー連盟	ジャンプ一流国の強化システムとトレーニング方式の研修
62	吉田 雅美	元年短期	陸上競技(やり投)	平成元年9月15日 ～平成2年9月14日	アメリカ シアトル	ワシントン大学	投てき競技者に必要な基礎的トレーニング法、栄養学、素材発掘の要点等の研修
63	坂本 弘	元年短期	水泳(競泳)	平成元年10月25日 ～平成2年10月24日	アメリカ コーバリス	オレゴン州立大学	競技者の指導テクニック及びに泳法テクニック
64	田村 伸也	元年短期	テニス	平成元年10月3日 ～平成2年10月2日	アメリカ フロリダ	Harry Homman Tennis Camp	テニスコーチ学の全般についての研修
65	宮原 厚次	元年短期	レスリング	平成元年11月1日 ～平成2年10月31日	ドイツ フランクフルト	西ドイツ レスリング協会	グレコローマンスタイル技術研修及びコーチ学研修
66	三宅 義信	元年短期	ウエイトリフティング	平成元年11月6日 ～平成2年11月2日	アメリカ サンフランシスコ	アメリカ ウエイトリフティング協会	ウエイトリフティングのコーチ学、スポーツクラブ組織におけるシステムと指導方法、軍隊における選手指導とそのシステム

	氏 名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研 修 内 容
67	細川 伸二	元年短期	柔道	平成元年11月4日 ～平成2年11月3日	フランス パリ	フランス柔道連盟	フランスを中心としたヨーロッパにおける科学的トレーニングの理論を含む選手強化の対策の現状と比較検討及び社会体育としての普及発展状況とその指導方法について
68	蘭 和真	元年短期	バトミントン	平成元年10月10日 ～平成2年10月9日	イギリス ロンドン	英国バトミントン協会	イギリスを中心としたヨーロッパ各国の選手強化策、特にオリンピック対策(体制、組織、方法)の調査
69	鈴木 省三	元年短期	ボブスレー	平成元年12月10日 ～平成2年12月9日	カナダ カルガリー	カルガリー大学	医・科学的サポートの現状、選手育成システム、トレーニング計画と年間計画
70	加納 弥生	2年短期	体操	平成2年9月26日 ～平成3年9月19日	アメリカ	ユタ大学	体操競技の指導方法(コレオグラフィ)と選手育成システム
71	西村 誠司	2年短期	空手道	平成2年11月1日 ～平成3年10月31日	アメリカ シアトル	アメリカ空手道連盟	アメリカ大陸の空手道近代技術の研究
72	水野 智佳子	2年短期	水泳(競泳)	平成2年10月27日 ～平成3年10月26日	アメリカ コロラドスプリングス	USOCスポーツ科学研究所	競技者の泳法及び指導法
73	田中 京	3年長期	水泳 (シンクロノイズドスイミング)	平成3年9月12日 ～平成5年9月11日	アメリカ	Walnut Creek Aquanuts Synchronized Swimming・Club	ウォールナットクリークでの実践トレーニング方法及びコーチング研修他
74	秋山 エリカ	3年短期	体操(新体操)	平成3年10月5日 ～平成4年8月15日	ロシア	Р е т и о й В о к з а л (Д и н а м о) М о с к в а	新体操の指導方法とソビエトにおける選手育成システムの研修
75	田嶋 幸三	3年短期	サッカー	平成3年10月7日 ～平成4年9月27日	ドイツ イタリア	サンブドリア ジェノバ他	サッカー選手の一貫指導、特に10～18歳迄のトップ選手の指導システムの研修
76	松岡 義之	3年短期	柔道	平成3年11月8日 ～平成4年11月7日	アメリカ	アメリカ柔道連盟(VSJF)他	アメリカにおける科学的トレーニング理論・方法を含む選手強化対策の現状と比較検討。社会体育としての柔道の普及発展状況とその指導方法について研修
77	前原 正浩	3年短期	卓球	平成3年9月16日 ～平成4年9月15日	イギリス	国際卓球連盟	イギリスを中心としたヨーロッパ各国卓球協会の指導体制、強化体制、トレーニング方法の研修
78	勝部 典子	3年短期	武術太極拳	平成3年11月27日 ～平成4年11月26日	中国 北京	北京体育学院	武術競技「南拳」の競技技術及びコーチングメソッドを北京市、中国武術研究会にて研修
79	佐久本 嗣男	3年短期	空手道	平成3年11月3日 ～平成4年11月2日	ドイツ	ドイツ トレーナーアカデミー他	ヨーロッパにおける空手道近代トレーニングの実態を視察調査、研究するとともにその指導法の研修
80	北島 光則	3年短期	スキー(コンバインド)	平成3年6月20日 ～平成4年6月19日	ノルウェー	ノルウェー スキー連盟他	ノルデックコンバインド競技指導技術の研究とコーチングをノルウェーナショナルチームにおいて研修
81	田中 幹保	4年長期	バレーボール	平成4年9月20日 ～平成6年8月15日	アメリカ イタリア	アメリカ ナショナルチーム イタリアプロリーグ他	世界最強イタリアチームの技術、戦術の研究と修得 イタリアリーグの運営システムの研究、アメリカのスポーツ医学から見た選手強化策
82	田口 隆	4年短期	ハンドボール	平成4年11月16日 ～平成5年11月15日	ドイツ	ケルン体育大学他	ヨーロッパでのトレーニング指導方法、理論の研修及び新戦術の研究
83	山口 香	4年短期	柔道	平成5年2月15日 ～平成6年2月14日	イギリス	ハイウェイカム柔道センター	イギリス柔道の強化の実態他
84	筒井 大助	4年短期	野球	平成4年8月31日 ～平成5年8月30日	アメリカ	ジョージア南大他	アメリカベースボールの考察
85	野地 照樹	5年短期	サッカー	平成5年12月8日 ～平成6年12月7日	イギリス	イプスウィッチ フットボールクラブ	イングランドサッカーのコーチング イングランドサッカーの指導者養成
86	齋藤 一雄	5年短期	相撲	平成5年10月3日 ～平成6年10月2日	オーストラリア	オーストラリア相撲連盟	オーストラリアのタレント発掘方法とジュニアからトップまでの選手育成システム、および体力強化の実情等についての研修
87	中西 英敏	5年短期	柔道	平成5年12月21日 ～平成6年12月20日	イギリス	エジンバラクラブ	英国および欧州を中心に欧州柔道の技術と指導法の研究および指導体制、強化体制ならびにトレーニング方法の研修(強化現状把握・指導体系・練習体系・強化システム)
88	金坂 広幸	5年短期	ライフル射撃	平成5年10月31日 ～平成6年10月30日	ドイツ	U. Sオリンピック シューティングセンター	エア・ライフル、スモール・ライフル射撃の指導技術およびメンタルトレーニング
89	成田 寛志	5年短期	空手道	平成5年10月23日 ～平成6年10月22日	アメリカ	ジョージタウン大学	選手強化法を含むスポーツ医学全般の研修 空手道における動作の分析 脊椎のスポーツ傷害の診断と治療の研修
90	清野 勝	5年短期	アイスホッケー	平成5年8月26日 ～平成6年8月25日	カナダ	カルガリー・フレイムス(NHL)他	カナダナショナルチームのスタッフとして、アイスホッケーのコーチ学、心理学、技術の習得
91	後藤 浩二郎	5年長期	馬術	平成5年11月18日 ～平成7年11月17日	フランス ル・マン	ル・マン乗馬クラブ他	総合馬術競技に係わる選手の育成と競技馬匹の調教
92	青戸 慎司	6年短期	陸上競技	平成6年11月7日 ～平成7年11月6日	アメリカ コロラド	コロラド大学 ボルダーク校	陸上競技、主として短距離走のトレーニングについて研修し実践的にトレーニングを積み競技力向上のための指導法を研究する
93	栗山 浩司	6年短期	リュージュ	平成6年10月16日 ～平成7年10月15日	ドイツ	ドイツ ボブスレー・リュージュ連盟 (DBSV)	リュージュ競技の科学的なトレーニングシステムの現状、ジュニア選手の発掘および選手育成プログラムについて
94	緒方 茂生	6年短期 7年短期	水泳	平成6年11月14日 ～平成8年11月22日	アメリカ ミシガン州他	ミシガン大学 アメリカ水泳連盟他	アメリカの水泳とコーチングの実習
95	佐藤 満	6年長期	レスリング	平成6年11月17日 ～平成8年11月16日	アメリカ ペンシルバニア	ペンシルバニア州立大学	アメリカレスリング協会のシステムの研究トレーニング指導法及び処方の研究 レスリング技術の研究
96	梶谷 信之	7年短期	体操	平成7年9月1日 ～平成8年8月29日	アメリカ サンフランシスコ	スタンフォード大学	体操競技の指導方法について 選手育成システムについて
97	東根 明人	7年短期	ハンドボール	平成7年8月30日 ～平成8年8月29日	ドイツ ライプチヒ	ライプチヒ大学	ハンドボール競技におけるトレーニングコーチ方法全般について
98	大門 宏	7年短期	自転車	平成8年2月2日 ～平成9年2月1日	イタリア	スポーツグループエキップ93	ロードレースの新しい技術、高度な指導技術の研究開発 諸外国の競技力の分析・戦術・戦法について
99	勝田 陸	7年短期	ラグビー	平成7年9月25日 ～平成8年9月24日	イギリス	イングランド・ラグビー フットボール・ユニオン	最新ラグビーとコーチングの理論と実際について ラグビー先進国の強化システムと内容について

	氏 名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研 修 内 容
100	佐藤 晃	7年長期	スキー (スペシャルジャンプ)	平成7年10月25日 ～平成9年10月25日	フィンランド	クオピオ市 プイヨスキークラブ	フィンランドジャンプトレーニング内容指導法(ジュニア含む)
101	内田 孝男	8年短期	陸上競技	平成8年9月30日 ～平成9年9月25日	オーストラリア	オーストラリア 国立スポーツ研究所(AIS) キャンベラ	各種測定、トレーニングの研修 コーチングの実施研修
102	西野 真一	8年短期	テニス	平成8年10月31日 ～平成9年10月30日	アメリカ	ウィローツリーテニスクラブ他	アメリカのジュニア育成システムの環境医療とデータの重要性 アメリカのテニス界について
103	杉藤 洋志	7年短期 8年短期	ボート	平成7年9月1日 ～平成9年8月31日	カナダ 他	カナダ国立コーチング研修所	コーチングの実践研修
104	田辺 陽子	8年短期	柔道	平成8年11月24日 ～平成9年11月25日	イギリス スコットランド	クサック柔道クラブ	イギリスの柔道強化策及び環境について
105	佐藤 浩明	9年短期	バレーボール	平成9年10月1日 ～平成10年9月28日	オーストラリア キャンベラ市	The Australian Institute of Sport(AIS)	オーストラリア・スポーツ研究所の心理的支援体制の調査
106	赤石 光生	9年短期	レスリング	平成9年10月23日 ～平成10年10月30日	アメリカ アリゾナ州テンピー市	ARIZONA STATE UNIVERSITY	アメリカ合衆国が、世界へ向けたコーチングの実習
107	松井 幸嗣	9年短期	ハンドボール	平成9年10月23日 ～平成10年10月22日	ドイツ ケルン	ドイツスポーツ大学ケルン	ドイツにおけるチーム強化の為に練習法・指導法と強化対策の実態及び指導者の育成
108	岡田 弘隆	9年短期	柔道	平成9年10月6日 ～平成10年9月30日	イギリス ロンドン	武道会	ヨーロッパ柔道のトレーニング方法及びコーチングについて
109	二宮 秀夫	9年短期	武術太極拳	平成9年9月26日 ～平成10年9月25日	中国 北京	北京体育大学	長拳三種目・武術全般のトレーニング法
110	鈴木 大地	9年長期	水泳	平成10年2月4日 ～平成12年2月3日	アメリカ マサチューセッツ州	ハーバード大学 アメリカ水泳連盟 他	アメリカにおける競泳のコーチングの実習
111	米沢 徹	10年短期	テニス	平成10年10月31日 ～平成11年10月30日	フランス アキテーヌ州 アルカッション市	アルカッションテニスクラブ	フランスの指導法と練習内容の把握、フランスシステムの把握、世界レベルのテニス研究、ヨーロッパテニスの研究
112	瀬尾 京子	9年短期 10年短期	体操	平成9年10月5日 ～平成11年10月4日	アメリカ オクラホマ州 オクラホマ市	Dynamo Gymnastics Club	アメリカでの体操競技における指導方法
113	本 博国	10年短期	ボクシング	平成10年9月8日 ～平成11年9月6日	ウズベキスタン タシケント市	"DINAMO"STADIUM PUSHKIN SQUARE 他	科学的トレーニング、指導法、栄養管理
114	持田 達人	10年短期	柔道	平成10年11月10日 ～平成11年10月31日	フランス パリ	INSEP(国立スポーツ体育研究所)	フランスの国立スポーツ、体育研究所の指導体系
115	土江 寛裕	10年長期	陸上競技	平成11年1月15日 ～平成13年1月13日	オーストラリア シドニー・キャンベラ	NSW Institute of Sport, Australian Institute of Sport(AIS)	オリンピック地元開催に向けた強化体制と、競技力向上のためのトレーニング方法の習得
116	藤井 彌	11年長期	ライフル射撃	平成11年10月29日 ～平成13年10月27日	フランス パリ	フランス射撃協会	ジュニア期からの一貫指導システムの研究
117	菅野 範弘	11年短期	スキー(ジャンプ)	平成11年10月3日 ～平成12年10月2日	スロベニア ブレッド市 他	SLOVENIA SMUCARSKI KLUB TRIGLAV KRANJ	スロベニアにおけるスキージャンプの強化システム、トレーニング指導方法、転戦におけるコンディショニング
118	三浦 華子	11年短期	体操	平成11年8月10日 ～平成12年8月8日	アメリカ ボイシー市	Bronco Elite Gymnastics Club Boise State University(BSU)	アメリカ体操競技におけるジュニア、大学生の指導方法
119	松本 真也	11年短期	セーリング	平成11年12月20日 ～平成12年12月18日	アメリカ アナポリス	United States Naval Academy	セーリング先進国のアメリカ合衆国におけるコーチング研修及び実態調査
120	玉村 健次	11年短期	ハンドボール	平成11年10月12日 ～平成12年10月10日	スウェーデン イエウネボリ市	IK Savehof Tus Shutterwald	北欧のハンドボール技術におけるチーム強化のための練習法・指導法、コーチング全般
121	増地 千代里	11年短期	柔道	平成11年9月11日 ～平成12年9月12日	イギリス ロンドン	武道会、ハイウィカム柔道センター キャンベラ柔道クラブ	イギリスを中心としたヨーロッパ柔道のトレーニング方法及びコーチングについて
122	山本 巧	11年短期	ラグビー	平成11年6月14日 ～平成12年6月10日	イギリス ケンブリッジ	Cambridge University Rugby Union Football Club 他	ラグビー先進国の強化体制及びコーチングに関する研修
123	畠田 好章	12年長期	体操	平成12年10月28日 ～平成14年10月27日	アメリカ カリフォルニア	スタンフォード大学	アメリカにおけるトップ選手への指導法及び練習環境や強化育成方法の研究
124	青柳 徹	12年短期 13年短期	スケート(スピード)	平成12年8月27日 ～平成14年9月12日	オランダ ブローニンゲン市	オランダスケート連盟	スピードスケート王国・オランダにおけるコーチングスキルの習得及び選手強化体制の見極め
125	渡辺 理貴	12年短期	卓球	平成12年9月14日 ～平成13年9月9日	イギリス ノッティンガム	イギリス卓球協会 他	ヨーロッパのクラブシステムとコーチング
126	金野 潤	12年短期	柔道	平成12年9月10日 ～平成13年9月9日	アメリカ コロラドスプリングス	アメリカ柔道連盟	USOCでの格闘技グループのコーチング方法 アメリカ柔道連盟の強化システム
127	小島 啓民	12年短期	野球	平成12年10月13日 ～平成13年10月10日	アメリカ キューバ	スタンフォード大学 サンタクララ大学 他	アメリカ大学野球トップのスタンフォード大学チーム、キューバのナショナルチームのコーチング
128	田中 茂	13年長期	ハンドボール	平成13年8月18日 ～平成15年8月7日	スペイン バルセロナ	カタルーニャハンドボール協会	スペインのハンドボール技術及び練習法、指導法の習得
129	長井 淳子	13年短期	柔道	平成13年9月24日 ～平成14年9月23日	イギリス バックキンガムシャー	National Judo Academy, Cambely Judo Club, High Wycombe Judo Centre	イギリスを中心としたヨーロッパ柔道の現状と選手強化の体制、指導法について
130	三野 卓哉	13年短期	ライフル射撃	平成13年9月17日 ～平成14年8月11日	ドイツ ウィスバーデン	ドイツ射撃協会 ブルガリア射撃協会	仕事と競技を両立することができるシステムの調査、ならびにそのシステムによる選手への指導方法
131	神庭 裕里	13年短期	武術太極拳	平成13年10月19日 ～平成14年10月18日	中国 北京	北京体育大学	長拳三種及び武術全般のコーチ研修
132	佐藤 吉朗	13年短期	トライアスロン	平成14年1月19日 ～平成15年1月20日	オーストラリア キャンベラ	Australian Institute of Sport	ASIをトレーニング拠点として活動しているジュニアナショナルチームに帯同

	氏 名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研 修 内 容
133	斗澤 由香子	13年短期 14年短期	スキー	平成13年8月14日 ～平成14年8月28日 平成14年11月5日 ～平成15年12月27日	カナダ ヴィクトリア	National Coaching Institute(B.C)	フリースタイルスキーに関するコーチングの実戦研修
134	植田 実	14年長期	テニス	平成14年12月9日 ～平成17年1月23日	スペイン バルセロナ	サンチェス&カサル テニスアカデミー	コーチングの実践研修
135	吉田 孝久	14年短期	陸上競技	平成14年7月27日 ～平成15年7月26日	イギリス レスターシャー	ラフバラ大学UK陸連ハイパフォー マンスセンター (HiPC)	跳躍種目コーチング技能の修得
136	岩崎 恭子	14年短期	水泳	平成14年10月4日 ～平成15年9月30日	アメリカ ロサンゼルス	ミッションビエホ・ナダドーズ・スイミ ングクラブ	ジュニアコーチングの実戦研修
137	菅原 リサ	14年短期	体操	平成14年8月31日 ～平成15年8月31日	オーストラリア キャンベラ	Australian Institute of Sport	コーチングの実践研修
138	和田 貴志	14年短期 15年短期	スケート(スピード)	平成14年7月25日 ～平成15年7月24日 平成15年9月1日 ～平成16年8月31日	アメリカ ソルトレークシティ	ユタ・オリンピックオーバル	コーチング及び強化システム研修
139	嘉戸 洋	14年短期	レスリング	平成14年8月16日 ～平成15年7月21日	ウクライナ キエフ	ウクライナ国立スポーツ専門大学	コーチングの実践研修
140	中村 行成	14年短期	柔道	平成14年8月18日 ～平成15年8月17日	イギリス エジンバラ	イギリス柔道連盟及びEdinburgh Club	ヨーロッパ柔道のトレーニング方法及び コーチングについて
141	松永 里絵子	15年長期	体操(新体操)	平成15年10月5日 ～平成17年10月4日	カナダ バンクーバー	War Memorial Gymnasium	選手強化育成システム及びコーチングの 実戦研修
142	林 享	15年短期	水泳	平成15年10月16日 ～平成16年10月15日	アメリカ パークレー	カリフォルニア大学パークレー校	コーチング及びトレーニング理論の研修
143	檜崎 教子	15年短期	柔道	平成15年9月19日 ～平成16年9月18日	アメリカ オマハ	Offutt Air force Base Judo Team	コーチング及びトレーニング方法の研修
144	近野 義人	15年短期	陸上競技	平成16年1月19日 ～平成17年1月18日	アメリカ デーヴィス	カリフォルニア大学デーヴィス校	中距離トレーニング及びコーチング研修、 バイオメカニクス研究
145	河野 正和	15年短期	卓球	平成15年9月23日 ～平成16年9月22日	イギリス ノッキャンガム	英国ナショナルトレーニングセン ター、イギリス卓球協会	英国及び欧州各国の卓球コーチング システム、クラブ運営システムの研修
146	木村 孝洋	15年短期	サッカー	平成15年8月1日 ～平成16年7月31日	イギリス ロンドン	アーセナル	若手有望選手の指導・育成方法の研修
147	坂井 寿如	15年短期	アイスホッケー	平成15年8月6日 ～平成16年8月5日	カナダ エドモントン	Concordia大学	コーチングの実戦研修
148	山田 永子	16年長期	ハンドボール	平成16年8月1日 ～平成18年7月12日	ノルウェー オスロ	Bekkelagets Sport Club	ハンドボールの指導法、強化システムの研修
149	中村 兼三	16年短期	柔道	平成16年10月12日 ～平成17年11月23日	イギリス ロンドン	Budokwai柔道クラブ	コーチング、ナショナルチームとの交流
150	橋口 美穂	16年短期	体操	平成16年11月28日 ～平成17年11月30日	オーストラリア ブリスベン	Moreton Bay College	ジュニア選手の育成、ナショナル強化選手の指導方法、 環境施設運営面等の研修 (Moreton Bay Collegeで研修)
151	山田 晃豊	16年短期	バレーボール	平成16年9月29日 ～平成19年9月2日	イタリア ラベンナ	イタリア女子バレーボール・ナショナ ルユースチーム (CLUB ITALIA)	世界トップレベルのセリエAを中心に ヨーロッパバレーリーグの視察と コーチング、チームプレーの研修
152	立花 美哉	17年長期	水泳 (シンクロナイズドスイミング)	平成17年10月13日 ～平成19年11月12日	アメリカ サンタクララ	Santa Clara Aquamaid Synchronized Swim Club	語学研修を主とし、シンクロの歴史の深いアメリカで指導を 中心にスポーツマネジメントを学ぶ
153	今村 文男	17年短期	陸上競技	平成17年9月9日 ～平成18年9月1日	イタリア サルツツォ	Scuola di Marcia e degli sport in Saluzzo	競歩選手におけるトレーニング方法及びコーチングに関する 研修
154	原田 睦巳	17年短期	体操	平成17年9月13日 ～平成18年9月11日	アメリカ バロアルト	Men's Gymnastics Arrillage Family Center	選手強化に関する指導方法の研修および、大学組織の 競技運営方法の比較の調査
155	阿武 教子	17年短期	柔道	平成17年8月25日 ～平成18年8月24日	フランス パリ	INSEP (国立スポーツ体育研究所)	柔道競技人口が世界一のフランスにおいての指導方法や 他の欧州各国の柔道事情を学ぶ
156	工藤 昌巳	18年長期	スキー(アルペン)	平成18年5月26日 ～平成20年5月24日	オーストリア インスブルッ ク	オーストリアスキーチーム帯同	アルペンスキーコーチングについて学び、オーストリア国 家検定アルペンスキーコーチ資格取得を目指す
157	谷澤 英彦	18年短期	テニス	平成18年11月30日 ～平成19年11月29日	オーストラリア ゴールドゴースト	バッドキャッシュインターナショナル テニスアカデミー	ジュニアからプロ選手までの指導方法
158	松本 洋	18年短期	バレーボール	平成18年11月30日 ～平成18年12月27日	ブラジル リオデジャネイロ	Centro de desenvolvimento de Voleibol	ブラジルバレーボールの強化システムとスキル、プロフェッ ショナルリーグの現状について
159	岡崎 直人	18年短期	フェンシング	平成18年11月20日 ～平成19年11月19日	フランス パリ	INSEP (国立スポーツ体育研究所)	トレーニング方法全般の修得およびマネージメント
160	稲田 法子	19年長期	水泳	平成19年12月16日～ 平成21年12月14日	アメリカ アリゾナ フェニックス	Brophy College Preparatory	アシスタントとしてトレーニング方法を学ぶ
161	佐々木 耕司	19年短期	スキー(スノーボード)	平成19年8月26日～ 平成20年8月24日	カナダ カルガリー	National Coaching Institute Calgary	コーチング技術、トレーニング方法を習得し施設を視察。カナダの コーチングシステムやその構築背景を研究
162	村田 由香里	20年長期	体操(新体操)	平成20年12月19日 ～平成22年12月18日	ロシア イルクーツク	ディナモスポーツクラブ	ロシア新体操の選手育成システム及び指導方法について 学ぶ
163	井上 康生	20年長期	柔道	平成21年1月11日 ～平成23年1月10日	イギリス エジンバラ	イギリス柔道連盟	英語研修及びイギリスを拠点として、ヨーロッパにおける柔 道指導法及びヨーロッパ各国の柔道事情を学ぶ
164	山崎 一彦	20年短期	陸上競技	平成20年9月20日 ～平成21年9月19日	イギリス レスター	ラフバラ大学	イギリスのオリンピック強化システムと対策の調査および コーチングを学ぶ
165	猿澤 真治	20年短期	サッカー	平成20年8月13日 ～平成21年8月5日	フランス クレースフォンテーヌ	フランスナショナルフットボールクラ ブ	フランスナショナルフットボール学院にて、U-13～15年代 の育成プログラム全般を学ぶ

	氏 名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研 修 内 容
166	白幡 圭史	20年短期	スケート(スピード)	平成20年6月1日 ～平成21年5月31日	オランダ フローニンゲン	ヘーレンフェーン室内リンク	スピードスケートコーチングテクニックおよび選手強化、選手育成システムを学ぶ
167	沖 美徳	21年長期	自転車	平成21年5月9日 ～平成23年3月31日	イタリア ベルガモ	Selle Italia-Ghezzi	自転車コーチング技術・語学研修及びイタリアサイクリングコーチングライセンスの習得
168	中垣内 祐一	21年長期	バレーボール	平成21年8月3日 ～平成23年5月2日	アメリカ アナハイム	アメリカバレーボールトレーニングセンター	世界トップレベルの指導法習得
169	中村 さなえ	21年短期	ボート	平成21年9月9日 ～平成22年9月8日	ドイツ ボツダム	Olympia Stutz Punkt Brandenburg	ナショナルチームのマネジメント、コーチング、選手育成システム、選手選考方法、コーチ育成プログラムを研修
170	小林 敦	21年短期	バレーボール	平成21年7月22日 ～平成22年7月20日	アメリカ アナハイム	アメリカバレーボールトレーニングセンター	各国シニア・ジュニア等トップチームの合宿にて指導者としての研修を行い、指導法、強化システムについて学ぶ
171	上村 美揮	21年短期	体操(体操競技)	平成22年2月27日 ～平成23年2月26日	アメリカ テキサス	Bela Karolyi Gymnastics Center	アメリカ体操界のジュニア育成システム及びその指導方法について学ぶ
172	神野 由佳	21年短期	スケート(ショートトラック)	平成21年4月27日 ～平成22年4月26日	カナダ カルガリー	Calgary Olympic Oval	ショートトラックにおける指導方法及び選手強化、選手育成システムについて
173	中村 健一	21年短期	セーリング	平成22年3月31日 ～平成23年3月30日	イギリス サザンブトン	Royal Yachting Association	ユース世代の育成・強化について学ぶ
174	上原 茉莉	21年短期	カヌー	平成21年10月11日 ～平成22年10月10日	ドイツ マグデブルク	ドイツカヌー連盟	日本カヌー界のレベルアップとロンドンオリンピックでメダルを獲得するための技術・トレーニング方法を研修する
175	高岡 寿成	22年短期	陸上競技	平成22年8月31日 ～平成23年8月30日	アメリカ マンモスレイク	マンモストラッククラブ	高地トレーニングなどの科学的なトレーニング及びアメリカの選手強化方法
176	三原 孝博	22年短期	卓球	平成22年8月30日 ～平成23年8月11日	中国 河北省	正定国家訓練基地	若年層からトップまでの育成方法
177	小館 操	22年短期	バイアスロン	平成22年6月21日 ～平成23年6月20日	オーストリア ザルツブルグ	オーストリアスキー連盟 オーストリアバイアスロン連盟	バイアスロン競技におけるスキー技術、射撃技術、指導法を習得し、バイアスロン連盟組織のあり方についても学ぶ。
178	塚田 真希	23年長期	柔道	平成23年9月7日～ 平成25年9月6日	イギリス ロンドン	エジンバラ柔道クラブ 武道会	英語研修、そして国外における柔道指導法および、諸外国の柔道事情を学ぶ。また諸外国コーチとのネットワークを構築する。
179	栗本 宣和	23年長期	カヌー	平成23年7月17日～ 平成25年7月16日	ハンガリー ブラハ	ハンガリーカヌー連盟	ハンガリーにおけるカヌー・カヤックスポーツの組織体制とコーチングシステム・強化プログラムのあり方について学ぶ。
180	柳澤 哲	23年短期	陸上競技	平成23年10月8日 ～平成24年10月7日	オーストラリア ブリスベン	Australian Institute of Sport (AIS)	各世代における体系化された練習方法の習得と組織としての運営方法
181	原田 早穂	23年短期	水泳 (シンクロナイズドスイミング)	平成23年5月15日 ～平成24年5月14日	マルタ共和国 スリーマ	Aquatic Sports Association of Malta	語学の鍛錬とともに、シンクロの中心であるヨーロッパにおいて指導力を磨く。
182	今泉 守正	23年短期	サッカー	平成23年7月13日 ～平成24年6月1日	アメリカ フロリダ	フロリダ州立大学(FSU)	US ODPプログラムの研修、IMGアカデミーでの育成プログラム研修等
183	橋元 郷	23年短期	セーリング	平成23年9月1日 ～平成24年8月31日	イギリス サザンブトン	国際セーリング連盟 英国セーリング連盟	英国における主にユース世代(U-19)の育成システム、およびセーリング組織の運営方法
184	佐本 睦	24年長期	レスリング	平成24年6月2日～ 平成26年6月1日	ドイツ ミュンヘン	Sportinternat Schifferstadt	ヨーロッパにおけるレスリングのコーチングスキルの習得と語学習得とプロクラブの運営システム等。
185	梅村 礼	24年長期	卓球	平成24年6月27日～ 平成26年6月26日	オーストリア ザルツブルグ	Werner Schlager Academy	欧州の強豪クラブにてヨーロッパの強化育成システムを学ぶ。
186	和田 武真	24年長期	フェンシング	平成24年7月25日～ 平成26年7月24日	ハンガリー ブタペスト	Budapest Honved(旧軍隊チーム)	元ナショナルチームの所属クラブにてビギナーからトップ選手に対し指導を行いながら指導技術、マネジメントを学ぶ。
187	谷本 歩実	24年長期	柔道	平成25年3月31日～ 平成27年3月30日	フランス パリ	INSEP(国立スポーツ体育研究所)	欧州の強豪国の1つであるフランスにおいて、柔道指導法、強化システムの調査、研究及び周辺諸国の柔道事情を学ぶ。
188	杉林 孝法	24年短期	陸上競技	平成24年9月15日～ 平成25年9月14日	スウェーデン ヨーテボリ	エルグリーテIS	世界トップレベルチーム及びコーチのもとでコーチングの研修を行うとともに語学研修を行う。
189	廣山 望	24年短期	サッカー	平成25年1月8日～ 平成26年1月7日	スペイン マドリッド	RCDエスパニョール	欧州のプロクラブにおけるトップ、育成、普及各レベルのコーチングを学ぶ。また、ヨーロッパの指導者ライセンスを取得する。
190	原 千華	24年短期	体操(新体操)	平成24年11月1日～ 平成25年10月31日	ベラルーシ ミンスク	National Center of Olympic Training in Rhythmic Gymnastics	ベラルーシのジュニア期の選手発掘・育成方法から、日本選手が国際試合で結果を残すための指導方法について学ぶ。
191	大戸 淳之介	25年長期	ボート	平成25年9月14日～ 平成27年9月13日	イギリス ロンドン	Staines Boat Club	チームマネジメント、コーチ育成プログラム他
192	菅野 幸一郎	25年長期	バレーボール	平成25年7月4日～ 平成27年4月27日	アメリカ	テキサス大学	バレーボール指導方法、世界レベルのチーム強化方法
193	高橋 豊樹	25年長期	ハンドボール	平成25年8月17日～ 平成27年8月16日	デンマーク スベンボー	オーレボイスコーレ ハンドボールレーナリエ	ジュニア育成、コーチ育成システムおよびその指導方法、強化システムについて学ぶ
194	福島 晋一	25年長期	自転車(ロード)	平成25年11月18日～ 平成27年11月17日	フランス	SA Vendee Cyclisme	チームマネジメント、コーチング、フランス語、IF関係等
195	小田島 梨絵	25年長期	自転車(MTB)	平成25年8月2日～ 平成27年7月31日	スイス	Velo Club Tamaro	地域チーム運営、ジュニア選手のトレーニング方法、英語・イタリア語習得
196	中村 真衣	25年短期	水泳(競泳)	平成25年9月8日～ 平成27年9月7日	アメリカ ミッションビエホ	ナタドールズスイミングクラブ	普及、強化、指導者育成等全般
197	今井 美希	25年短期	陸上競技	平成25年7月1日～ 平成26年6月30日	スウェーデン ヲェクショー	IFKヴェクショー	跳躍(特に走り高跳)指導論・トレーニング論・トップアスリートの男性選手・女性選手の育成方法の違い、スウェーデン陸連関連
198	田村 奈津枝	25年短期	サッカー	平成25年6月13日～ 平成26年6月12日	ドイツ フライブルグ	フライブルグFC	トップチームの普及、強化、指導者養成等全般を学ぶ

	氏 名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研 修 内 容
199	黒田 真由	25年短期	体操(体操競技)	平成25年8月3日～平成26年8月26日	アメリカ テキサス	World Olympic Gymnastics Academy	ジュニア期の育成方法
200	塩田 義法	26年長期	水泳(水球)	平成26年11月18日～平成28年11月17日	アメリカ(ロサンゼルス)	USA Water Polo, Inc.	アメリカの代表チーム及び大学水球チームのコーチング、マネジメント方法、選手育成システム、コーチ育成プログラムを研修
201	鹿島 丈博	26年長期	体操(体操競技)	平成26年11月30日～平成28年11月29日	アメリカ(フロリダ)	スタンフォード大学	アメリカにおける体操競技の実態と強化について研修
202	出島 茂幸	26年長期	スケート(スピードスケート)	平成26年9月12日～平成28年9月11日	アメリカ(ソルトレークシティ)	ユタオリンピックオーバル	アメリカナショナルチームにてコーチング研修、育成システム、医科学サポートの活用方法、マネジメントについて学ぶ
203	谷川 聡	26年短期	陸上(ハードル)	平成26年7月30日～平成27年7月29日	アメリカ(フロリダ)	University of Central Florida ほか	アメリカにおけるトレーニング理論、トレーニングシステム、コーチング論を学ぶ
204	山尾 光則	26年短期	サッカー	平成26年9月10日～平成27年9月9日	ドイツ(ライムスバッハ)	IFC. Reimsbach	グラスルーツ・育成年代・トップチームのトレーニング研修、ゲーム分析、ゲーム環境等の調査等
205	坂尾 美穂	26年短期	サッカー	平成26年5月10日～平成27年5月9日	ドイツ(デュイスブルグ)	MSV デュイスブルグ	ドイツプロクラブの育成カテゴリーのプランニング・トレーニングの構築およびコーチング、プロクラブの普及・育成・強システムについて研修
206	土橋 登志久	26年短期	テニス	平成26年10月31日～平成27年10月30日	フランス(パリ)	フランステニス連盟 ほか	フランスのプロ・ジュニア選手の育成・強化システム、トレーニング方法、メンタルアプローチ、大会でのコーチング等ほか、国による強化・組織の運営システムを学ぶ
207	大島 吉子	26年短期	体操(体操競技)	平成26年10月12日～平成27年10月11日	アメリカ(サクラメント)	Elevate Gymnastics Academy	アメリカ体操界のジュニア選手育成システム及びその指導方法、跳馬の技術指導方法について学ぶ
208	長良 将司	26年短期	フェンシング(サーブル)	平成26年7月27日～平成27年7月26日	アメリカ(ポートランド)	Oregon Fencing Alliance	世界トップのナショナルチームの技術指導及びマネジメントを学ぶ
209	三木 二郎	27年長期	水泳(競泳)	平成27年8月31日～平成29年8月30日 予定	イギリス(ロンドン)	イギリス水泳連盟	イギリス水泳連盟の運営システム・強化システム・指導プログラムを学びながら、ヨーロッパ諸外国コーチとのネットワークを構築する
210	岩渕 聡	27年長期	テニス	平成27年8月31日～平成29年8月30日 予定	イギリス(ロンドン)	イギリステニス協会(LTA)	LTAがロンドンオリンピックにおける自国選手の金メダル獲得(男子シングルス)を成し遂げた強化策を学ぶ
211	白井 祐介	27年長期	ボート	平成27年8月27日～平成29年8月26日	デンマーク(コペンハーゲン)	コペンハーゲン大学	世界トップレベル選手のトレーニング方法、コーチングおよびサポートの実態や、医科学データの活用方法を学ぶ
212	遠藤 由華	27年長期	体操(新体操)	平成27年8月31日～平成29年8月30日 予定	アメリカ(シカゴ)	North Shore Rhythmics	アメリカ在住のロシア人コーチのもとで技術・トレーニング方法、コーチング方法を研修し、またアメリカの段階別・レベル別選手育成システムとその構築された背景を研究について学ぶ
213	森 昶人	27年長期	体操(体操競技)	平成27年7月10日～平成29年7月9日	イギリス(バジルトン)	South Essex Gymnastics Club	イギリスにおけるジュニア～シニアへの一貫教育システムおよびナショナルチームでの指導方法を学ぶ
214	米満 達弘	27年長期	レスリング(フリースタイル)	平成27年8月31日～平成29年8月30日 予定	アメリカ(ペンシルバニア)	ペンシルバニア大学	世界に勝ち抜くためのフリースタイルの専門技術及び戦略・戦術を修得し、強豪国の強化対策等の研修並びに世界のトップクラス選手情報を収集・分析する
215	舍利弗 学	27年長期	ハンドボール	平成27年8月31日～平成29年8月30日	ドイツ(ベルリン)	Fuchsb. Berlin	欧州のプログラムや男子ドイツ代表チーム各年代のコーチングやスカウティング方法を学び、また海外遠征、合宿時に活かせるネットワークの構築をはかる
216	岩水 嘉孝	27年短期	陸上競技	平成28年12月20日～平成29年12月19日	オーストラリア(メルボルン)	メルボルントラッククラブ	メルボルントラッククラブにおける中長距離とマラソンの実践的トレーニングと指導内容を学ぶ
217	広瀬 統一	27年短期	サッカー	平成27年9月6日～平成28年9月5日	アメリカ(サンノゼ)	San Jose State University	フィジカルトレーニングの実地研修およびアスレティックトレーニング指導論の研修を行う
218	安食 真治	27年短期	スキー(アルペン)	平成27年6月12日～平成28年6月11日	オーストリア(インスブルック)	オーストリアスキー連盟	オーストリアにおけるスキー競技のコーチングシステムと強化環境の調査及びコーチングスキルを学ぶ
219	荻野 正二	27年短期	バレーボール	平成27年8月29日～平成28年8月28日	ブラジル(サンパウロ、リオ・デ・ジャネイロ)	ブラジルバレーボール協会	指導法や世界トップチームの強化方法を学ぶ
220	進藤 隆	27年短期	バイアスロン	平成27年7月27日～平成28年7月26日	ノルウェー(リレハンメル)	ノルウェーバイアスロン連盟	バイアスロン射撃術、クロスカントリースキー技術、トレーニング法およびその指導要領を学ぶ
221	大久保 茂和	28年短期	バレーボール	平成28年9月15日～平成29年9月14日	アメリカ(カリフォルニア)	アメリカバレーボール協会	アメリカにおけるバレーボールの最新コーチング及びトレーニングプログラムを学ぶとともに、アンダーカテゴリーにおけるalent発掘・育成プログラムを視察する
222	小川 秀樹	29年短期	サッカー	平成29年6月19日～平成30年6月18日	ドイツ(インゴシュタット)	FC Ingolstadt04	ドイツ・ブンデスリーガのクラブにおけるチーム強化及び選手育成、地域におけるアロクラブのあり方を学ぶ
223	久保 貴寛	29年短期	スキー	平成29年5月14日～平成30年5月13日	フィンランド(ヴォッカッティ)	Vuokatin Urheilupuisto	フィンランドの強化拠点となっているヴォッカッティを中心に夏季及び冬季におけるジャンプトレーニング、クロスカントリートレーニング、その他トレーニング内容の把握。
224	桑原 俊	29年短期	体操(体操競技)	平成29年8月29日～平成30年8月28日	アメリカ(スタンフォード)	Ford Burnham gymnastics gym	スタンフォード大学にて体操競技の指導。他国の指導・技術分析の方法を学び実際に指導を行う。
225	金丸 雄介	29年短期	柔道	平成29年4月5日～平成30年3月31日	イギリス(カーディフ)	Sports Wales National Centre	イギリスをはじめとするヨーロッパ諸国のトップクラス、及びナショナルチームにおける柔道指導法、強化システムの調査、研究および周辺諸国の柔道事情を学ぶ。
226	須藤 啓太	30年長期	サッカー	平成30年7月9日～令和2年6月9日	スペイン/バスク	ATHLETIC CLUB	世界トップレベルを走るスペインの育成年代の日常に触れ、スペイン人と日本人の技術、戦術、フィジカル、メンタル面における違いから日本人が海外でプレーする際にアドバンテージとなる部分を見極める。
227	河野 恭介	30年長期	スキー	平成30年7月10日～令和2年12月27日	オーストリア/インスブルック	Arlberg Ski club	アルペンスキーのコーチング理論、育成方法(日本との違い)を海外チームから学ぶ。
228	小原 英志	30年長期	スケート	平成30年8月10日～令和2年8月9日	カナダ/カルガリー	カナダスケート連盟 Canadian Sport Institute Calgary	カナダにおけるスピードスケートのコーチング技術の習得、カナダのスピードスケートナショナルチームにおけるサポート体制の調査、カナダにおけるコーチ養成システムの調査
229	近藤 大生	30年短期	テニス	平成30年11月1日～令和2年10月31日	フランス/パリ	フランステニス連盟	今年のデビスカップで優勝したフランスから、地域や県からトップ選手までの育成システムを学ぶ。
230	山村 宏太	30年短期	バレーボール	平成30年8月20日～令和2年8月19日	イタリア/ラツィオ	Fonteviva Livorno/ Paolo Montagnani	世界スタンダードのバレーボール習得と日本人に合わせたインスパイレーション、そして日本人におけるブロックシステムの構築とコーチングスキルの向上について
231	古城 梨早	30年短期	体操(新体操)	平成30年8月22日～令和2年8月21日	カナダ/トロント	Jusco Rhythmic Gymnastic Club	カナダのチームで指導しているブルガリア人コーチのもとで、語学の研修と手具の技術やトレーニング等、各年代の指導プログラムを学ぶ。

	氏 名	研修区分	競技名	研修期間	国名・都市名	研修施設名等	研 修 内 容
232	中川 貴哉	30年短期	テコンドー	平成30年8月24日～ 令和2年8月23日	イギリス/マンチェスター	GB Taekwondo (GaryHall)	ナショナルテコンドーセンターにおける強化活動、運営についての研修、練習映像および試合映像の撮影方法および分析方法、活用方法についての研修
233	松岡 佑起	31年長期	陸上競技	令和2年3月17日～ 令和5年5月23日	イギリス/ロンドン	Saint Mary's University	中長距離種目のトレーニング方法、コーチング論、選手強化体制について学び、日本選手の強化育成に向けた新たなトレーニングプログラム、強化育成システムを構築する基礎とする。
234	塚田 圭裕	31年長期	バレーボール	令和元年8月7日～ 令和3年8月6日	アメリカ/ペンシルベニア	Temple University	世界レベルの選手・チームの強化方法並びにアメリカナショナルチームの視察・大学スポーツ(NCAA)の研究
235	山中 武司	31年長期	アイスホッケー	令和元年6月26日～ 令和3年6月25日	カナダ/オタワ	KANATA Lasers	ジュニア世代の育成指導方法を学ぶ。アイスホッケーの新しい戦術の習得。
236	松岡 慧	31年長期	フェンシング	令和元年8月20日～ 令和3年8月19日	フランス/パリ	フランスフェンシング協会	フェンシング競技指導に必要な技術並びに技能習得。強豪国の育成並びに強化システムの調査・研究。
237	福井 英郎	31年長期	トライアスロン	令和元年6月28日～ 令和3年9月30日	フランス/オルレアン	フランストライアスロン連盟	2024年パリオリンピックに向けた若手育成・強化方法を学ぶ。種目転向型・専門型などの選手発掘方法を調査する。
238	松原 英輝	31年短期	サッカー	平成31年4月1日～ 令和2年3月17日	フランス/ランブイエ	Toulouse FC 育成センター	フランスにおけるプロクラブの主に10歳から12歳までの育成プログラムを学ぶ。
239	見汐 翔太	2年長期	サッカー	令和4年1月13日～ 令和6年1月12日	イギリス/バーミンガム	イングランドサッカー協会 (FA)	イングランドサッカー協会 (FA) の強化拠点から、そのフィロソフィーとデータ分析の活用を学ぶ。
240	湯元 進一	3年長期	レスリング	令和3年8月28日～ 令和5年8月27日	ロシア/ウラジカフカス	ロシアレスリング協会	ロシア国内の育成年代からトップ選手までのコーチング方法及びトレーニング方法を学ぶ。
241	嘉数 陽介	3年長期	ハンドボール	令和3年10月29日～ 令和5年10月28日	デンマーク/オーデンセ	HCオーデンセ	①競技力向上に関する具体的取り組みの調査・研究 ②コーチングの方法論に関する調査および実践
242	片桐 央規	3年短期	サッカー	令和3年9月19日～ 令和4年9月18日	ドイツ/フランクフルト	ドイツサッカー連盟	選手へのコーチング方法を中心に、データの活用方法、育成や指導者への関わりなどを学ぶ。
243	青木 晋平	4年長期	バレーボール (ビーチバレーボール)		スロベニア/リュブリャナ	Ludus Beach Park Ljubljana	NFとクラブチームとの連携、という視点から、強化、育成、普及の関係性の研究など。
244	海老沼 匡	4年長期	柔道		イギリス/カーディフ	Welsh Judo Federation	語学の習得や様々な人脈構築を目的に研修を行なっていく、総合的スキルを向上させていく。
245	忽那 静香	4年長期	トライアスロン		アメリカ/コロラド州	One Olympic Plaza Colorado Springs	2028年の自国開催となるアメリカ(USATriathlon)の強化策を習得。2028年ロスオリンピックの競技環境の把握・情報収集も兼ねる。
246	金城 芳樹	4年短期	スキー		オーストリア/インスブルック	(調整中)	スキージャンプの技術向上のためのコーチング、ジュニアからシニアまでの一貫性のある強化育成システムなど。

**スポーツ指導者海外研修事業
令和３年度帰国者報告書**

発 行 日 令和４年３月29日

編集・発行 公益財団法人 日本オリンピック委員会
〒160-0013

東京都新宿区霞ヶ丘町４番２号

Japan Sport Olympic Square13階

TEL03-6910-5957 FAX03-6910-5960

